松山市文化財調査報告書13

宮前川遺跡調査報告書

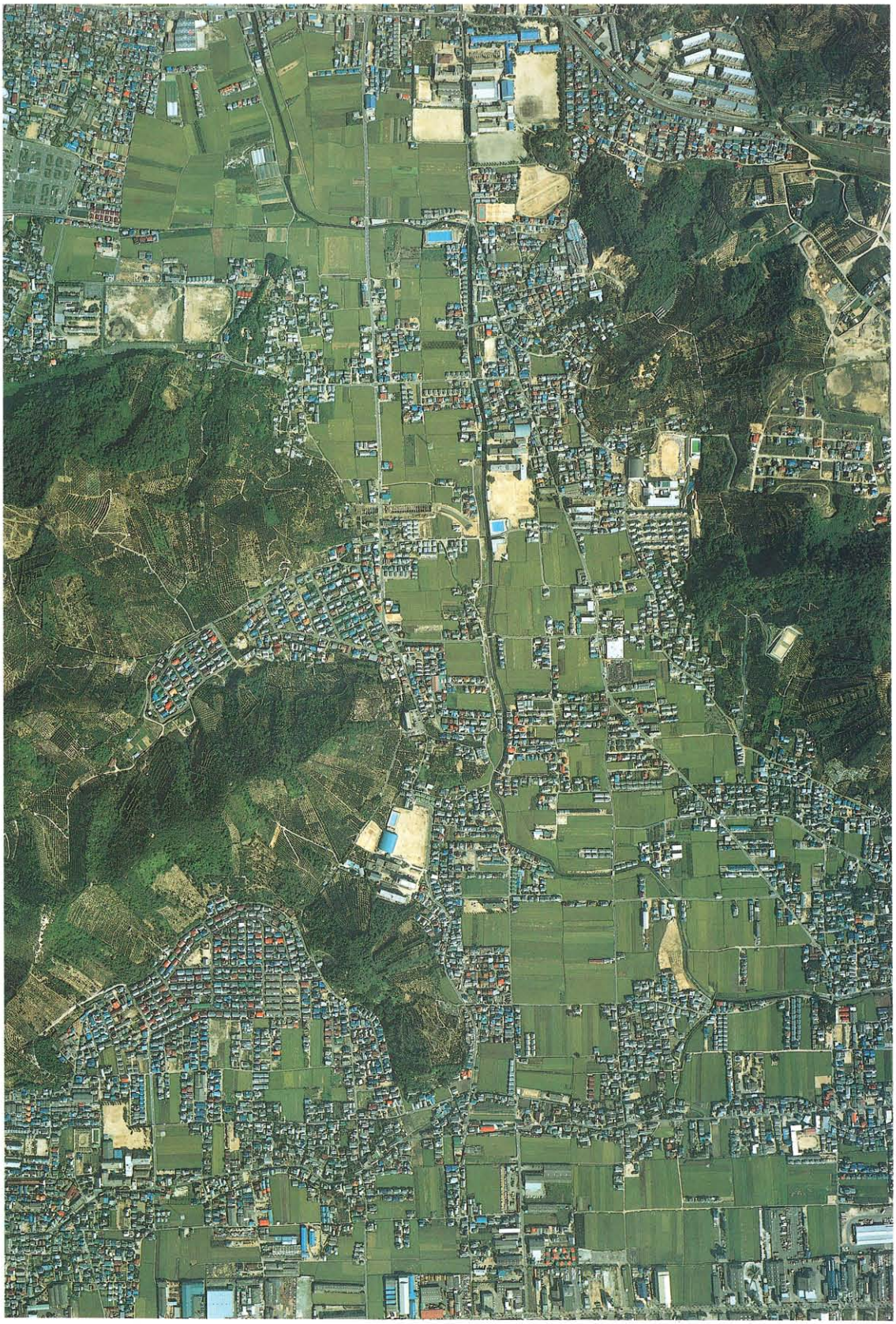
津田第Ⅰ地区(第1調査地～第4調査地)

(1986)

松山市教育委員会

宮前川遺跡調査報告書

津田第Ⅰ地区(第1調査地～第4調査地)



宮前川遺跡周辺航空写真

例　　言

1．本書は、宮前川改修工事に伴って昭和59年（1984）２月１日～同年３月24日の間実施した津田第１地区（第１調査地～第４調査地）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、愛媛県教育委員会指導のもとに松山市教育委員会が実施した。

3．発掘場所と調査面積

- 津田１区、第１及び第２調査地　　松山市北斎院町934番地ほか　　500㎡
- 津田１区、第３及び第４調査地　　松山市北斎院町906－13番地ほか　400㎡

4．本書の作成にあたって出土遺物の整理、実測、製図は、池田　学、松村　淳、栗田茂敏が行い、遺構、遺物の写真は、西尾幸則、池田　学が行った。

5．本書の執筆は、主として西尾幸則、栗田茂敏が行った。

6．本書の編集は、西尾、栗田が行った。

7．調査組織

松山市教育委員会

教　育　長　　西原多喜男
参　　事　　松原　重勝
次　　長　　井手　治己

文化教育課

課　　長　　伊賀　俊輔
課長補佐（前任）　坪内　晃幸
〃　　大野　衛治
文化第二係長（前任）　大西　輝昭
〃　　戸田　浩
調査担当　　西尾　幸則（文化教育課主任）
調査員　　池田　学（〃　嘱託）
〃　　松村　淳（〃　〃）
〃　　栗田　茂敷（〃　〃）

目　　次

第１節　遺跡の位置と歴史的環境……1
第２節　調査経過と概要……4
　　調査日誌抄……5
第３節　遺　構……7
第４節　遺物の観察……19
第５節　若干の考察……30

図版目次

巻頭カラー図版　宮前川遺跡周辺航空写真
図版１　第１調査地出土の土器実測図（ＳＢ－１、ＳＢ－２、ＳＢ－３）
図版２　第１調査地出土の土器実測図（ＳＢ－４）
図版３　第１調査地出土の土器実測図
図版４　第１調査地出土の土器実測図
図版５　第１調査地出土の土器実測図
図版６　第１調査地出土の土器実測図
図版７　第１調査地出土の土器実測図
図版８　第２調査地出土の土器実測図（ＳＫ－６）
図版９　第３調査地出土の土器実測図（ＳＢ－６）
図版10　第３調査地出土の土器実測図（ＳＢ－５、ＳＢ－７）
図版11　第３調査地出土の土器実測図（ＳＢ－８）
図版12　第３調査地出土の土器実測図（ＳＫ－７）
図版13　石器類実測図
図版14　石器類、その他の遺物実測図
図版15　調査区全景
　　第１調査地
図版16　第１調査地ＳＢ－１～４
　　第１調査地ＳＢ－２～４
図版17　第３調査地ＳＢ－５～７
　　第３調査地ＳＢ－６・７

図版18　第１調査地ＳＢ－１
　　第１調査地ＳＢ－１
図版19　第１調査地ＳＢ－２
　　第１調査地ＳＫ－４
図版20　第３調査地ＳＢ－８
　　第３調査地ＳＢ－８
図版21　第１調査地ＳＢ－１遺物出土状況
　　第１調査地遺物出土状況
図版22　第１調査地遺物出土状況
　　第１調査地遺物出土状況
図版23　第２調査地自然堤防突端
　　第２調査地ＳＫ－６
図版24　第２調査地遺物出土状況
　　第２調査地遺物出土状況
図版25　第３調査地ＳＢ－６遺物出土状況
　　第３調査地ＳＢ－７遺物出土状況
図版26　第３調査地ＳＢ－６検出状況
　　第３調査地ＳＢ－６、７遺物出土状況
図版27　第１調査地出土の土器（ＳＢ－１、ＳＢ－２）
図版28　第１調査地出土の土器（ＳＢ－３）
図版29　第１調査地出土の土器（ＳＢ－４、ＳＢ－５）
図版30　第３講査地出土の土器（ＳＢ－６）
図版31　第３調査地出土の土器（ＳＢ－６）
図版32　第３調査地出土の土器（ＳＢ－７、ＳＢ－８）
図版33　第１調査地出土の土器
図版34　第１調査地出土の土器
図版35　第１調査地出土の土器
図版36　第１調査地出土の土器
図版37　第１調査地出土の土器
図版38　第１調査地出土の土器
図版39　第１調査地出土の土器
図版40　第１調査地出土の土器
図版41　第２調査地出土の土器
図版42　第３調査地出土の土器

図版43　第３調査地出土の土器
図版44　第３調査地出土の土器
図版45　津田第Ｉ地区出土の土器
図版46　津田第Ｉ地区出土の土器
図版47　津田第Ｉ地区出土の石器類
図版48　津田第Ｉ地区出土のその他の遺物

挿図目次

第１図　遺跡分布図…… 1
第２図　津田第Ｉ地区調査地区図…… 4
第３図　津田第Ｉ地区各調査地遺構図及び土層図…… 9
第４図　ＳＢ－１平・断面図（第１調査地）……11
第５図　ＳＢ－２出土銅鏃実測図……11
第６図　ＳＢ－２平・断面図（第１調査地）……12
第７図　ＳＢ－３平・断面図（第１調査地）……13
第８図　ＳＢ－４平・断面図（第１調査地）……14
第９図　ＳＢ－５平・新面図（第３調査地）……15
第10図　ＳＢ－６平・断面図（第３調査地）……15
第11図　ＳＢ－７平・断面図（第３調査地）……16
第12図　ＳＢ－８灰層及び焼土検出状況……17
第13図　ＳＢ－８平・断面図（第３調査地）……17
第14図　ＳＫ－２平・断面図（第１調査地）……18
第15図　ＳＫ－４平・断面図（第１調査地）……18
第16図　ＳＫ－５平・断面図（第２調査地）……18
第17図　ＳＫ－６平・断面図（第２調査地）……18
第18図　ＳＫ－７平・断面図（第３調査地）……18

表目次

第１表　津田第Ｉ地区検出住居跡一覧表…… 7
第２表　ＳＢ－１柱穴状況…… 7

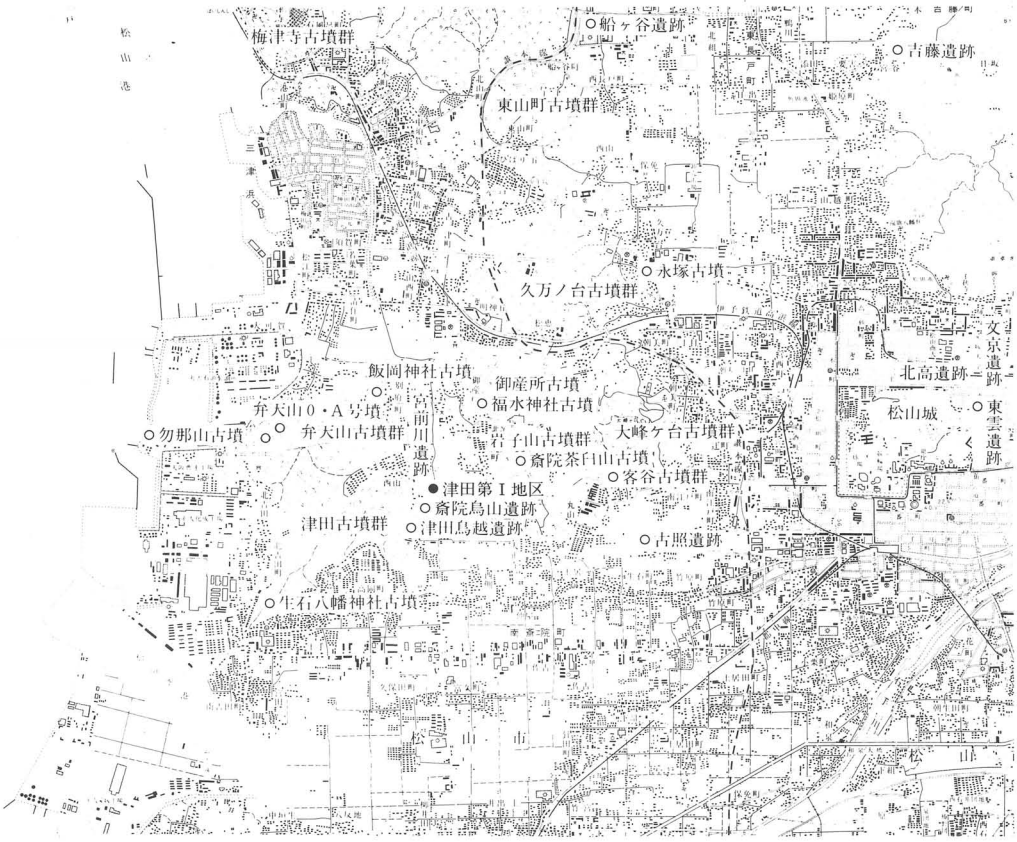
第３表　ＳＢ－２柱穴状況……12
第４表　ＳＢ－３柱穴状況……12
第５表　ＳＢ－４柱穴状況……13
第６表　ＳＢ－５柱穴状況……14
第７表　ＳＢ－７柱穴状況……16
第８表　ＳＢ－８柱穴状況……16
第９表　津田第Ｉ地区検出土壙一覧表……18
第10表　津田第Ｉ地区住居跡及び土壙出土土器観察表……19
第11表　第１調査地出土土器観察表……24
第12表　第２調査地出土土器観察表……27
第13表　第３調査地出土土器観察表……27
第14表　津田第Ｉ地区出土土製品観察表……29
第15表　津田第Ｉ地区出土石器類観察表……29

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

松山平野西端、沿岸部に所在する弁天山独立丘陵（海抜129.3ｍ）は、南北1.7km、東西1.3kmで、北は別府町から南は北吉田町にまたがる丘陵である。調査遺跡は、同丘陵のほぼ中央東麓200ｍに位置し、宮前川左岸の後背湿地に立地している。

本遺跡に関係する宮前川は、高縄山より水源を発する石手川の支流になるもので、湯山渓谷をへて岩堰で分岐し、城北を流れて大宝寺川となって朝美に達する。その後は宮前川となって大峰台南麓を迂回し、さらに本遺跡から２km北流し三津湾に注いでいる。一方、足立重信の改修以前段階の石手川主流は、岩堰～湯築城～持田中央～玉川町～二番町～南堀端～妙清寺～吉田浜に注ぐ旧流路の報告[1]がなされ、今も生石町から北吉田にかけては、蛇行状になって土手部に形成された町並の久残りが見られ、それが偲ばれている。ただ南斎院町相生の松附近で分岐し、北流した様相も合わせて見られている。

本遺跡をとりまく周辺遺跡には、本調査地より西方100ｍの弁天山低丘陵に烏山遺跡が見られ、弥生前期未段階の濠を検出し、壺形土器、甕形土器、鉢形土器などが出土している。また、この烏山遺跡の南側隣接地にあたる津田中学校構内からは、昭和51年の調査により、



第１図　遺跡分布図

弥生後期の住居跡群が発見され、各住居跡から土錘、石錘など漁撈具をはじめ壺形土器、甕形土器、高杯、支脚、小型鉢、ミニチュア土器などが出土している。これら出土土器類のうちには庄内段階までは下る土器も認められ、一部、本遺跡との共存関係も合わせて考えられている。

鳥越遺跡（津田中学校構内１次）住居群

また、弁天山丘陵部には、前期～中期段階の古墳築造が見られ、弁天山北西部の尾根には弁天山ＯＮ号墳[2]が存在している。墳丘形態等の詳細調査が必要であるが古式の埴輪が認められ、前期古墳として注目されている。その他朝鮮系鋳造鉄斧出土の前期古墳[3]これらの古墳に続く同丘陵北突端には、別府町の飯岡神社古墳が見られ、時代も含めて確定的ではないが前方後円墳としてその様相があり注目される。

弁天山丘陵に対岸する岩子山丘陵には、頂上部の岩子山古墳群[4]から、中期末～後期段階の各須恵器類と合わせて素環頭太刀や円筒埴輪、人物、動物埴輪が見られている。また、これらの古墳群に対して同丘陵西南麓の隔絶された位置にある斎院茶臼山古墳[5]からも５世紀後半段階の各須恵器類に伴って円筒埴輪や朝顔型埴輪などが出土している。これらの他に同丘陵に関係するものとして、茶臼山古墳の南下麓部には直径30ｍ規模の円墳が存在したことが伝えられていることを含めて、同丘陵の西突出部に見られる福水神社古墳は、全長45ｍ前後をなす中期段階の前方後円墳としての要素があり、今後の追究が必要かと思われる。その他、注目すべきものとして、伝岩子山出土とされているもので五鈴鏡、乳文鏡などが出土している。

鳥越Ｉ遺跡（火災住居）

次に、本遺跡に関連する遺跡として、本調査地より西方50ｍ位置において昭和51年に発見された、津田鳥越Ｉ遺跡からは弁天山緩斜面地に立地するもので、長方形をなす火災住居址が検出されており、本遺跡の西域範囲内の同一集落としてその様相が見られている。さらに本遺跡より東方1.6ｍには、農耕用灌漑施設として一大土木工事をなした古照遺跡があり、有力者存在が窺がわれると共に同一流域の遺跡としてまた、出土遺物的にも布留式土器が主として見られている。その他、同一流域範囲内と考えられる遺跡に北高遺跡を含む周辺遺跡があり、庄内から布留段階にかけての土器類が見られている。

（西尾）

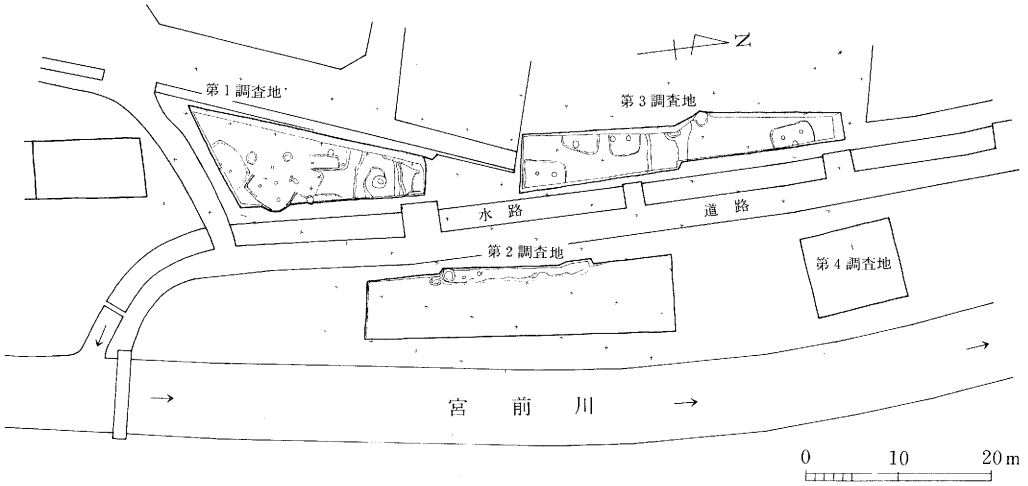
注(1)　松沢巖「伊予史談４・５号」、鵜久森熊太郎「伊予史談17・19号」
注(2)　相田則美「古墳時代前期の松山平野」伊予史談257号
注(3)　〃　　〃
注(4)　名本二六雄「岩子山古墳」松山市教育委員会
注(5)　筆者「斎院茶臼山古墳」松山市教育委員会

第２節　調査経過と概要

発掘調査は、津田第Ｉ地区をさらに４区画に分割し、第１及び第２調査区を昭和59年２月１日～同年２月29日まで実施し、第３・第４調査区を同年３月１日～同年３月24日まで実施した。第１及び第３調査区は、宮前川左岸提防からそれぞれ20ｍで両者間は10ｍである。この両調査区から水路及び生活用道路を挟み、第２及び第４調査区は左岸提防から２ｍ～３ｍの場所になる。また、調査区はそれぞれ試掘データーや排土場所を考慮し設定した。

掘削はバックホーにより、造成土及び耕作土を搬出し、手掘りによって地表下1.1ｍ～1.3ｍ部分より遺物を含み堆積する黒色土（厚さ50～60cm）または、暗青灰色土を中心に発掘を進めた。この結果、青灰色土層を基盤面として切り込む遺構の検出を行った。

発見の遺構は、第１調査区から隅丸を主とする住居跡群（ＳＢ－１～ＳＢ－４）や土壙（ＳＫ－１～ＳＫ－４）などを検出した。また、同一遺跡とみられる第３調査区からも同様の遺物を含む土層を検出し、住居跡４棟、土壙１基などを検出した。続いて第２調査区からは、旧宮前川の河岸面とみられる青灰色をなす自然提防状の遺構を検出した。この面からは、土壙２基を合わせて検出した。出土遺物には、第１～第３調査区からの各遺構より、在地性のものとは異なる畿内、吉備、山陰系など多量の土器類の出土が見られた。なお第４調査区からは僅かに土器類の出土が見られたが、遺構は検出されなかった。



第２図　津田第Ｉ地区調査地区図

調査日誌抄

（昭和59年２月１日～３月24日）

２月１日　器材搬入。調査前写真撮影。調査区域を設定（第１～第４調査地）し、第１調査地から重機による表土の掘削を始める。

２月２～４日　重機による掘削。排土の完了した区域より包含層の掘り下げを始める。グリッドは５×５ｍで設定した。第４調査地には包含層、遺構ともに認められない。

２月６～７日　第Ｉ調査地中央部で、ミンチ状に堆積した土器片を検出。

２月８日　第Ｉ調査地、遺物をとりあげた区域から順次、遺構面の精査を行い、住居址を３棟（ＳＢ－２、３、４）検出した。第２調査地の包含層を掘り下げる。

２月９日　第１調査地の各住居址を掘り始める。

２月10～16日　第１調査地の北方向で甕類が良好な状態で数点出土するが、明確な遺構はとらえられない。

２月17日　雨天。屋内整理作業。

２月18日　終日。排水作業。

２月19～20日　第１調査地、遺物出土状況実測。第２調査地にてＳＫ－５、６を検出、掘り下げる。

２月21日　第１調査地南端に焼失住居と思われる炭化材を検出、ＳＢ－１とする。

２月23日　雨天。屋内整理作業。

２月24～26日　第１調査区、土壙状が検出され始める。第２調査地、遺物出土状況実測。

２月27～29日　第１調査地では、土壙状が計４基（ＳＫ－１，２、３、４）検出された。それぞれを掘り下げる。

第１調査地器台出土状況

３月１～４日　ＳＢ－２、３．４の床面精査、柱穴、炉址を検出。ＳＢ－１の炭化材の実測、写真撮影。第３調査地、包含層の掘り下げを始める。

３月５～７日　第１調査地の各遺構を実測。発掘区西壁の層序断面図を作成。第２調査地、ＳＫ－５、６の実測。第３調査地、遺物出土状況実測。ＳＫ－７を検出。

３月８～９日　第１、第２調査地の50分の１遺構実測を行い、両区とも一応完了した。第

第１調査地器台出土状況

写真５　ＳＢ－８発掘状況

ＳＢ－８発掘状況

３調査地、遺物検出作業に並行して出土状況を実測する。

３月10～13日　第３調査地、遺物実測、とりあげを繰り返しながら遺構面まで掘り下げる。ＳＫ－７を完掘する。

３月14日　雨天。屋内整理作業。

３月15日　第３調査地、遺構面の精査を行い住居址４棟（ＳＢ－５、６、７、８）を検出。

３月16日　各住居址を掘り下げて遺物検出作業を行う。さらに床面を精査して柱穴を探す。

３月17～18日　遺構図及び、土層図を作成する。

３月19日　雨天。作業休み。

３月20日　発掘区を全域にわたって清掃して最終撮影を行う。器材を撤収して現場での作業を終了する。

３月21～24日　引き続いて遺物の整理作業を行い、調査を終了した。

（松村）

第3節　遺　構

第1表　津田第Ⅰ地区検出住居跡一覧表

(単位：cm)

遺構番号	調査地区	形　態	規　模	深さ	炉跡径（深さ）	埋　　土	備　考
ＳＢ－１	第１調査区	隅丸方形	東西 500	17	45～35(15)	暗青灰色土	火災住居
ＳＢ－２	〃	方　形	南北 450	13		〃	
ＳＢ－３	〃	隅丸方形	東西 300	14	70～50(10)	〃	
ＳＢ－４	〃	〃	南北 450	28	60(11)	〃	
ＳＢ－５	第３調査区	方　形	〃 450	14	60(1)	〃	
ＳＢ－６	〃	隅丸方形	〃 400	20		〃	
ＳＢ－７	〃	〃	〃 350	7		〃	
ＳＢ－８	〃	〃	〃 450	11	70(2)	灰混じりの暗青灰色土	火災住居

本調査区より検出の遺構は、第１調査区で住居跡４棟、土壙４基、第３調査区で住居跡４棟、土壙１基、第２調査区から土壙２基などを検出した。このうち第２調査区では、旧宮前川左岸面と見られる自然提防（標高4.3ｍ）を検出した。検出の各住居跡群は、河岸面から10ｍ内外で、青灰色土層（海抜4.7ｍ～５ｍ）を基盤面としている。各住居跡の規模は、一辺３ｍ～５ｍ内外になり、主として隅丸方形のプランが見られている。また、これら建物の性格としても床面状態が不安定であり、一時的な住居と考えられる。

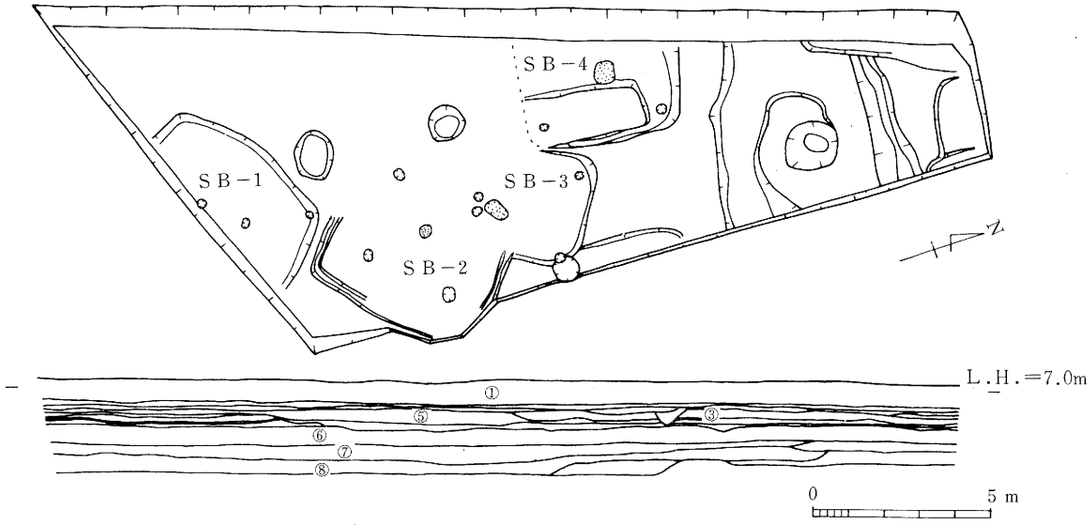
ＳＢ－１（第４図）

本住居跡は、第１調査区南端に見られたもので、住居跡としては３分の１範囲を確認した。規模は東西５ｍになり、平面プランは、コーナーが丸味がかるもので隅丸方形の竪穴住居跡として考えられる。検出した壁高は、西壁で25cm、北壁16cm、東壁10cmになり、床面も北東側が浅くなる。埋土は、暗青灰色土で床面状態は細砂質土を含む青灰色土をなしている。柱穴は、中央部の２個と周壁部のＰ３を検出し、中央のＰ１とＰ２の中には８cm大の小石を詰めている。また、図に示すように住居内全体には炭化材（Ａ類＝桁材か、Ｂ類＝垂木）が見られ、僅かながら焼土も検出しており、火災住居として考えられる。出土遺物は、少量であるが甕、椀、鉢など４個体の古式土師器類の出土が見られている。

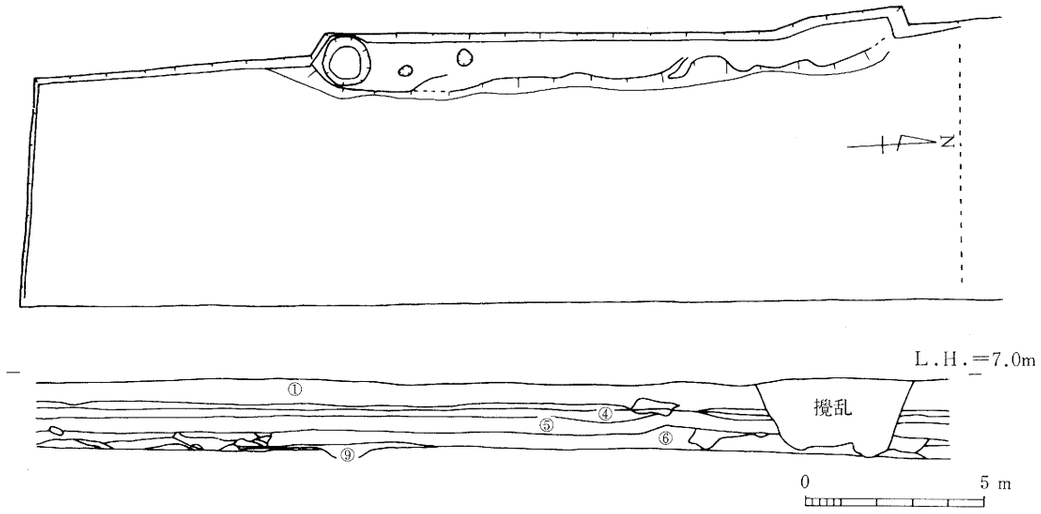
第２表　ＳＢ－１柱穴状況

(単位：cm)

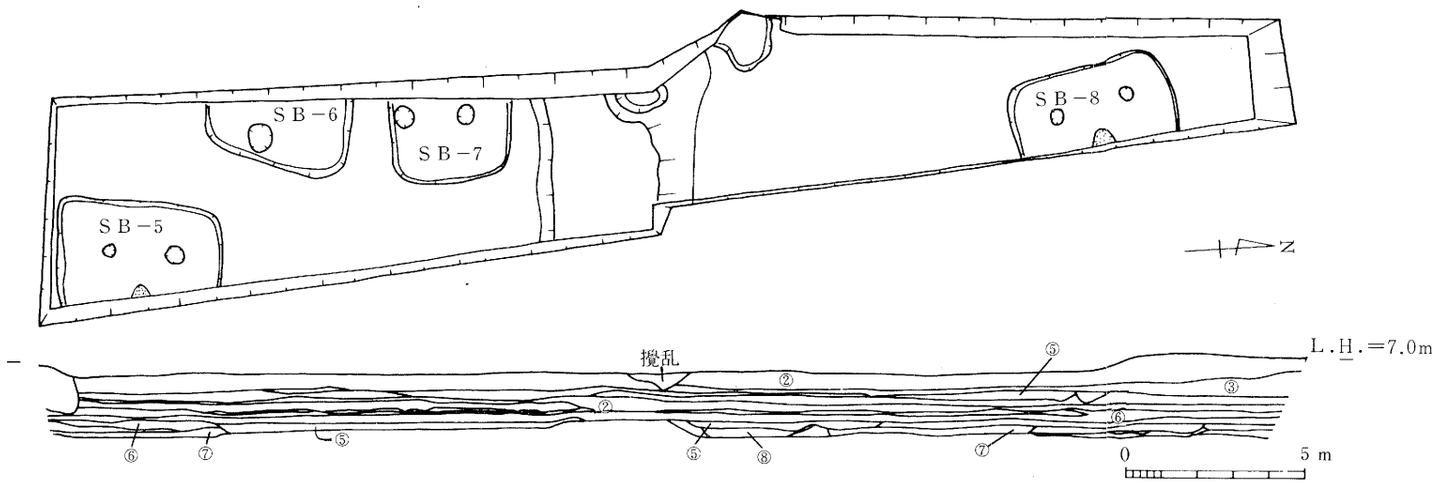
柱穴番号	Ｐ1	Ｐ2	Ｐ3	柱穴間（m）	
基底部の径	21.0	16.5	9.5	Ｐ1～Ｐ2	1.16
床面からの深さ	37.0	38.0	20.2	Ｐ2～Ｐ3	1.83



〔 第 1 調 査 地 〕



〔 第 2 調 査 地 〕

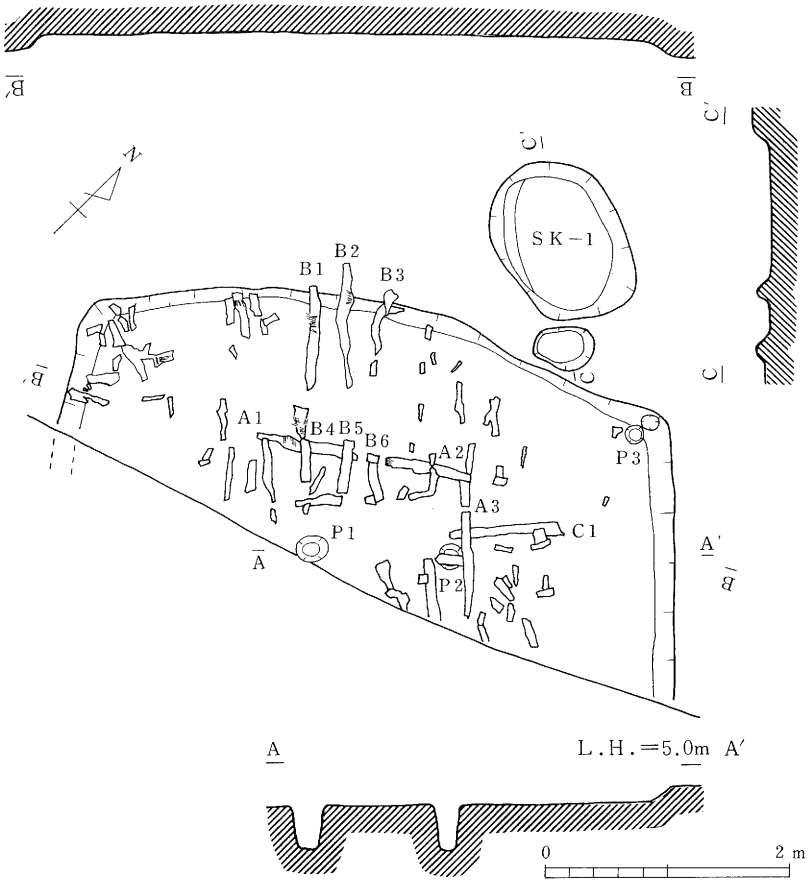


〔 第 3 調 査 地 〕

第３図　津田第１地区各調査地遺構図及び土層図

凡　　例

①造　成　土
②耕　作　土
③黄色粘質土
④グレー粘質土
⑤黄　色　土
⑥黒色粘質土
⑦青 灰 色 砂
⑧含小礫グレー粗砂
⑨含小礫黒色砂質土

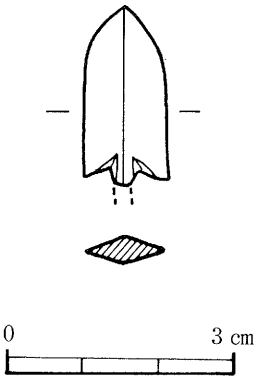


第４図　ＳＢ－１平・断面図（第１調査地）

ＳＢ－２（第６図）

ＳＢ－１住居跡北側に接して検出されたもので南北4.5ｍ(東壁）になり、西北壁面がＳＢ－３によって切られている。確定的でないが方形竪穴住居跡として考えられる。検出の壁高は、北壁で14cm、東壁13cm、南壁13cmになり、埋土及び床面はＳＢ－１に同じである。炉跡は、住居跡のほぼ中央部に楕円形（径45～35cm）になった窪地（深さ15cm）があり、それより炭化物の混入が見られている。柱穴は、別表の通り11個検出しており一応Ｐ１～Ｐ４の４本主柱が考えられる。

出土遺物は、甕１、椀４の５個体の土器類と銅鏃１個、炭化材１本などが見られている。

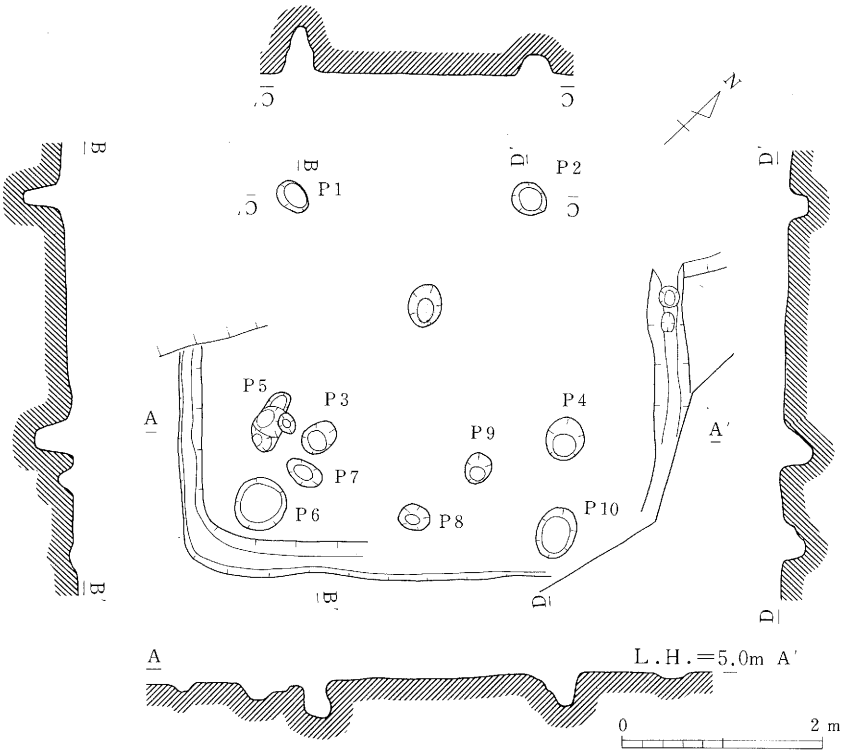


第５図　ＳＢ－２出土銅鏃実測図

第３表　ＳＢ－２柱穴状況

(単位：cm)

柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	柱　穴　間（m）			
基底部の径	13.0	27.0	24.0	26.0	15.0	43.0	18.0	15.5	15.0	19.0	P3～P4	2.46	P1～P3	2.49
床面からの深さ	40.0	23.0	35.0	35.0	24.4	12.5	20.0	17.0	18.1	28.0	P1～P2	2.38	P2～P4	2.48



第６図　ＳＢ－２平・断面図（第１調査地）

ＳＢ－３（第７図）

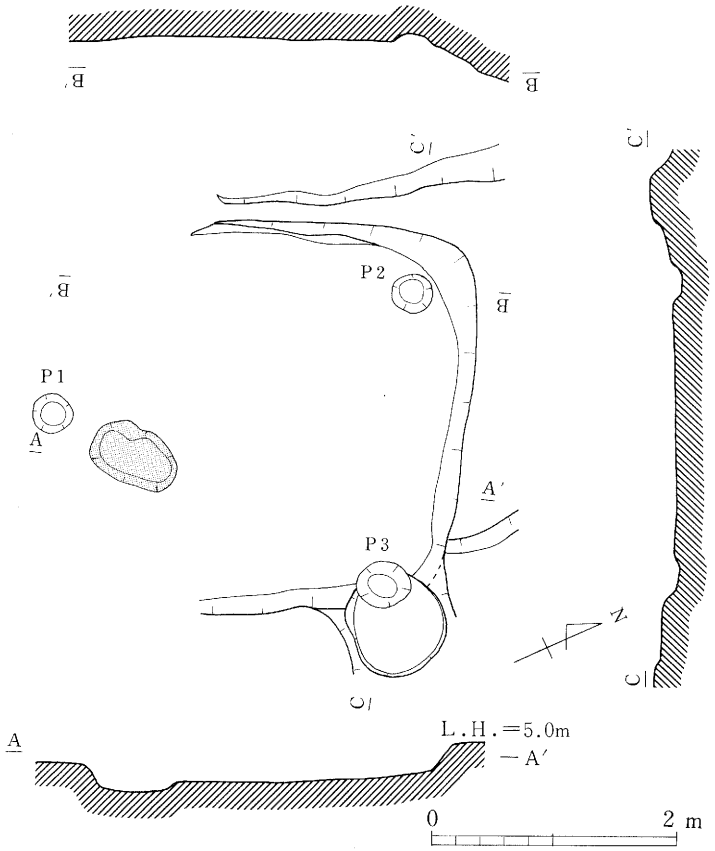
前者より小規模であるが、一辺３ｍをなす隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。検出の壁高は、東壁17cm、北壁18cmであり、西壁は北端で６cm、中間部でＳＢ－４に接して消失している。また、東壁も途中でＳＢ－２に接して消失している。埋土及び床面状況も、前者の住居跡と同じであり不安定な土層といえる。住居跡南端近くに窪地（長径70cm、短径50cm、深さ10cm）が見られ、炉跡としても考えられる。柱穴は３個検出し、Ｐ２～Ｐ３間が2.5ｍになる。

第４表　ＳＢ－３柱穴状況

(単位：cm)

柱穴番号	P1	P2	P3
基底部の径	20.0	20.0	25.0
床面からの深さ	20.0	9.0	5.0

出土遺物は、先行タイプの壺（図版１－15）のほか、甕(13・14)、鉢(12)、椀(10)、支脚(11)などの出土が見られている。



第７図　ＳＢ－３平・断面図（第１調査地）

ＳＢ－４（第８図）

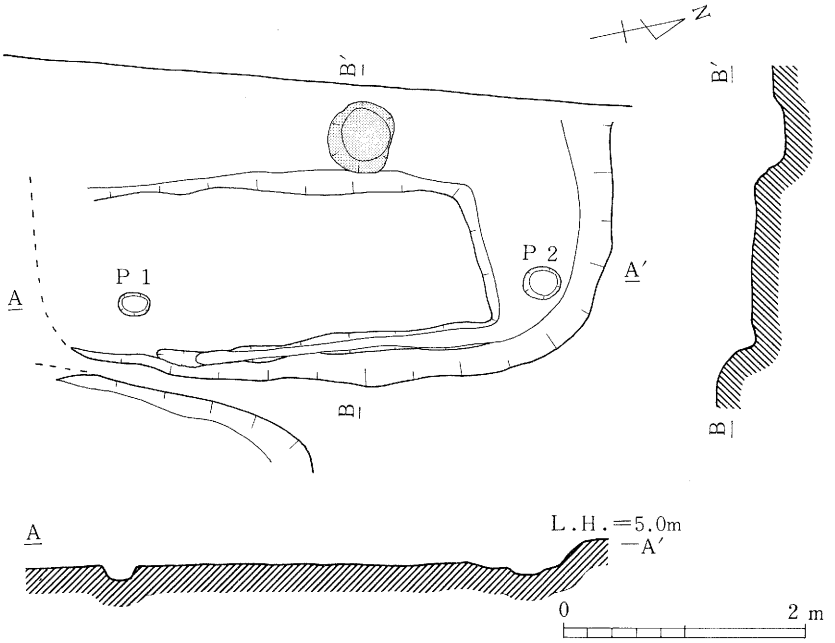
ＳＢ－３の西側面に接して見られ、住居跡としては東半分の範囲になる。平面プランは、南北4.5ｍの規模を持つ隅丸方形の竪穴住居跡として考えられる。東壁面にそって床面より１段高く（７cm）なったベッド状プラン（南北3.5ｍ、幅1.1ｍ）も見られる。壁高は、北壁22cm、東壁34cmで、南壁は消失している。住居跡中央東寄り部には、直径60cm、深さ11cmの窪地が見られ、中には焼土が含まれており炉跡として考えられる。柱穴は、２個検出している。埋土及び床面は、先の住居跡に同じである。

山土遺物は、壺(図版２－22)、甕(23)、鉢(20)、椀(18・19)、皿(16・17)、支脚(21)などが各種見られる。

第５表　ＳＢ－４柱穴状況

(単位：cm)

柱穴番号	P1	P2	柱穴間（m）	
基底部の径	21.0	23.0	P1～P2	3.4
床面からの深さ	4.0	3.4		



第８図　ＳＢ－４平・断面図（第１調査地）

ＳＢ－５（第９図）

本遺構は、第１調査区北側10ｍの第３調査区南端部から検出したものであり、住居跡としては約３分の２範囲になる。平面プランは、西北コーナーが僅かに丸味がかっているが、南北（西壁）4.5ｍ規模の方形竪穴住居跡として考えられる。壁高は、北壁９cm、西壁19cm、南壁15cmを検出した。住居跡中央東寄り部には、焼土を含む僅かな窪地（径60cm）が見られ、炉跡と考えられる。埋土及び床面の土層は、先の第１調査区に同じで、青灰色土の基盤に暗青灰色の埋土をなすものである。

出土遺物は少なく、壺２個体（図版10－108）ほかと椀（105）のみである。

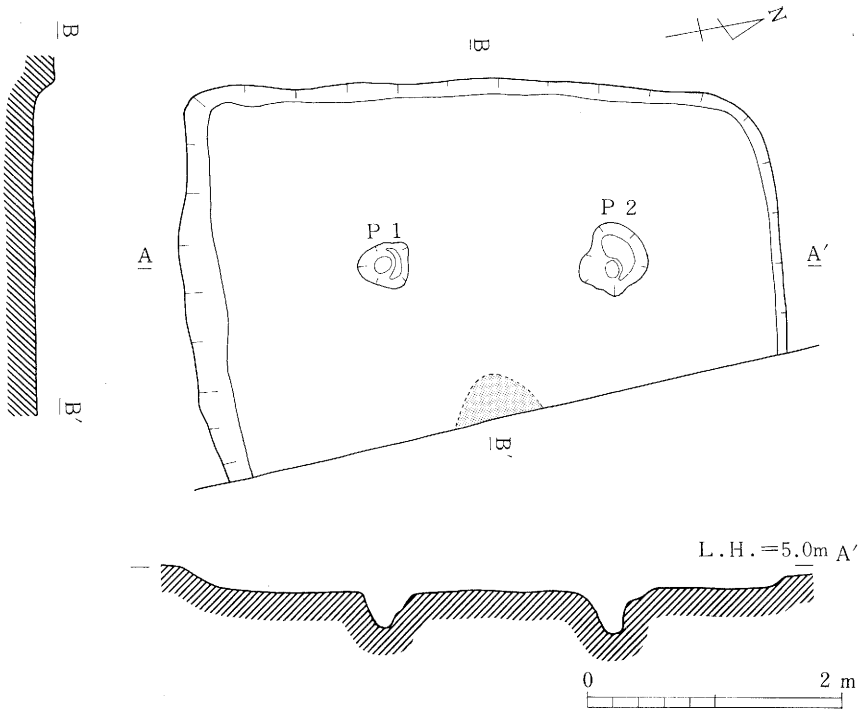
第６表　ＳＢ－５柱穴状況

（単位：cm）

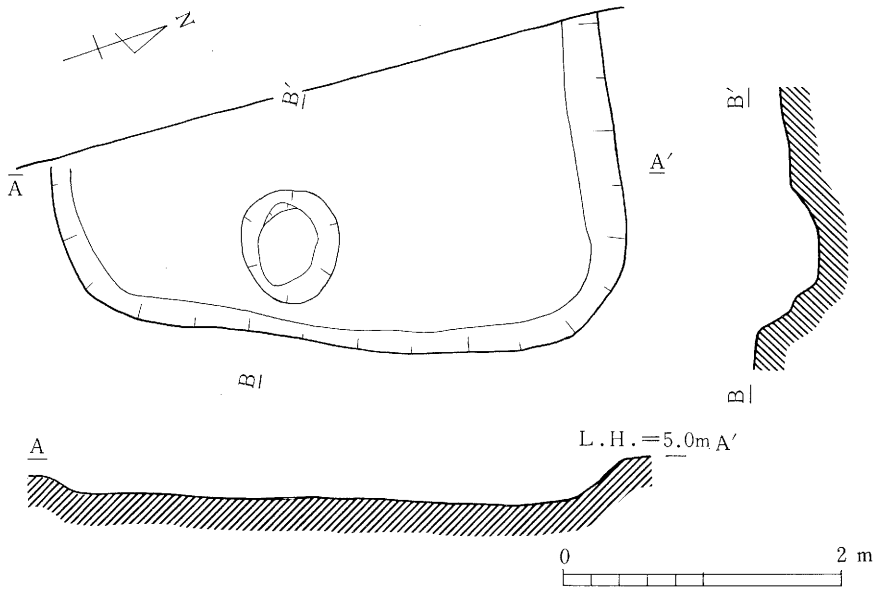
柱穴番号	P1	P2	柱穴間（m）	
基底部の径	14.0	14.1	P1～P2	1.85
床面からの深さ	28.5	35.5		

ＳＢ－６（第10図）

本遺構は、ＳＢ－５住居跡の西北側方２ｍの所から検出されたもので、南北４ｍになり、明確に言えないが隅丸方形の竪穴住居跡として考えられる。壁高は、北壁23cm～26cm、東壁24cm、南壁９cmである。東壁近くで楕円形の窪地（径70cm、深さ15cm）を検出している。埋土は先の住居跡に同じである。出土遺物は、壺（図版９－100・101）、甕（97～99）、高杯（94～96）、小型丸底壺（93）、椀（91・92）など各種の土器類がみられている。



第９図　ＳＢ－５平・断面図（第３調査地）



第10図　ＳＢ－６平・断面図（第３調査地）

ＳＢ－７（第11図）

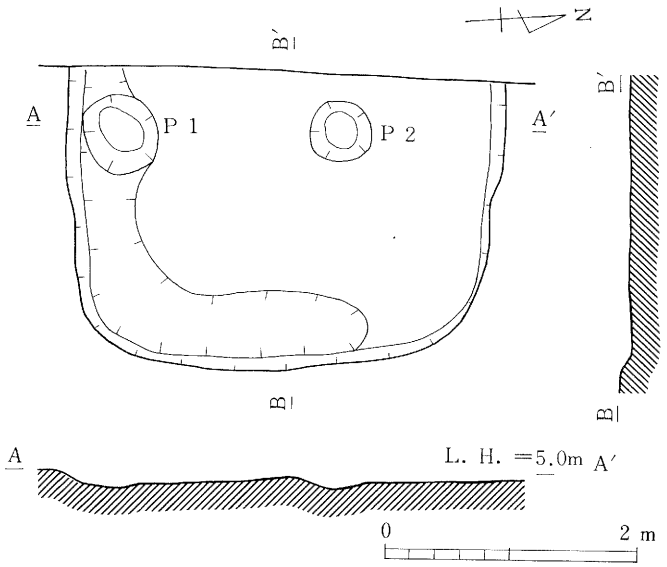
ＳＢ－６の北側（１ｍ）に接して検出されたもので、南北3.5ｍの規模をなす隅丸方形のプランと考えられる。青灰色をなす床面は、全体的に浅く壁高も北壁３cm、東壁８cm、南壁８cmになっている。南壁から東壁部に至って浅い溝状（幅50cm、長さ４ｍ、深さ３cm）になった窪地が見られる。柱穴は、中央東寄り部と南壁部から検出している。なお、炉跡は見られていない。

出土遺物は、壺(図版10－106・107)、小型丸底壺(103・104)、鉢（102)、手捏ね土器（図版14－140）など６個体の土器類が見られている。

第７表　ＳＢ－７柱穴状況

（単位：cm）

柱穴番号	P1	P2	柱穴間（m）	
基底部の径	43.0	31.0	P1～P2	1.78
床面からの深さ	7.0	4.0		



第11図　ＳＢ－７平・断面図（第３調査区）

ＳＢ－８（第13図）

ＳＢ－７の北方14ｍから検出されたもので、南北4.5ｍ規模になる隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。遺構としてはその２分の１範囲になり、ほぼその中央部には、径70cm前後の窪地（深さ２cm）が見られ、それより木炭及び炭化物の混入が見られ、炉跡として考えられる。壁高は、北壁で10cm、西壁13cm、南壁９cmである。埋土は、先の住居跡群よりやや灰を帯びた暗青灰色土になり、床面は先の住居跡と同じく青灰色土をなす。柱組みはＰ１、Ｐ２を考慮し４本主柱とみられる。また、住居跡全体に

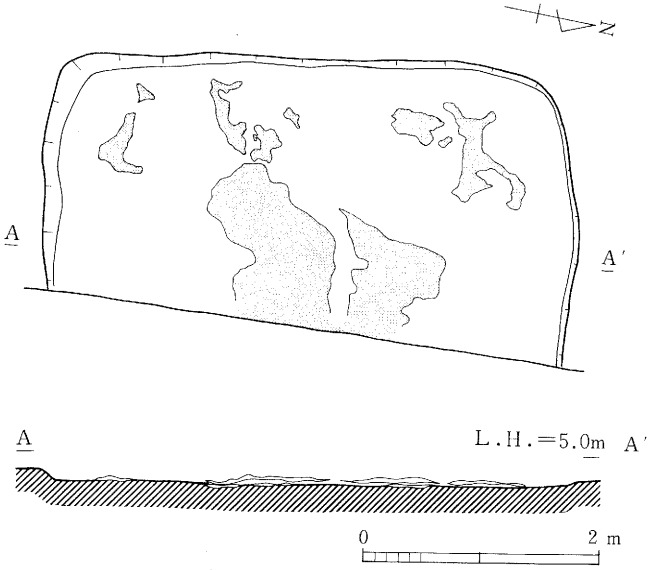
第８表　ＳＢ－８柱穴状況

（単位：cm）

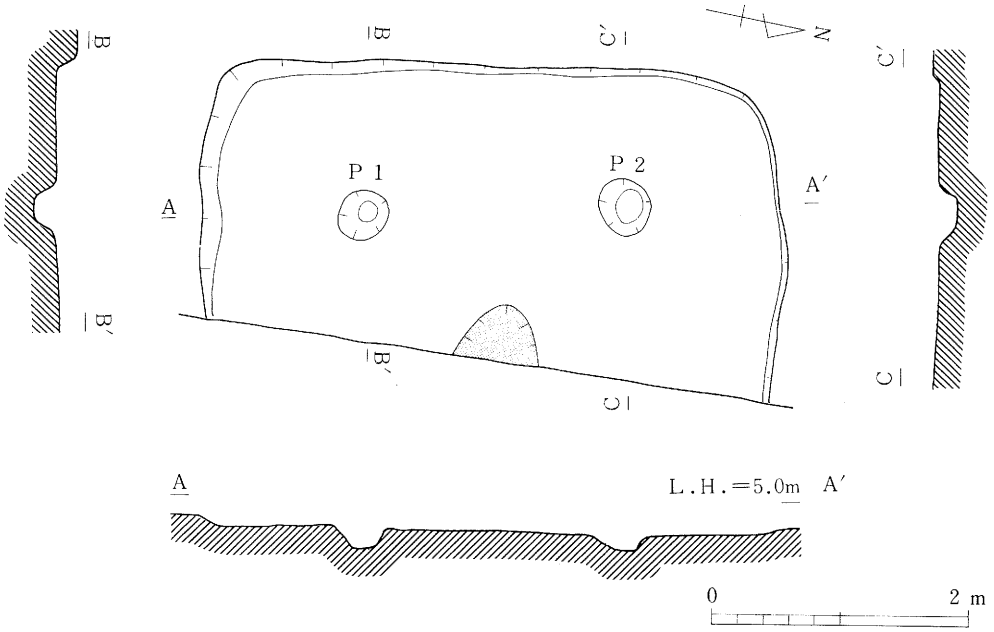
柱穴番号	P1	P2	柱穴間（m）	
基底部の径	16.0	27.5	P1～P2	2.08
床面からの深さ	17.5	11.5		

は炭化物の固まり（ほぼ灰状になる）が見られることと炭化材（１本）も含まれることからして全焼状態も考えたい。焼土は見られなかった。

出土遺物は、鉢（図版11－122）と椀（110）の２個体のみである。　　（西尾）



第12図　ＳＢ－８灰層及び焼土検出状況（第３調査地）

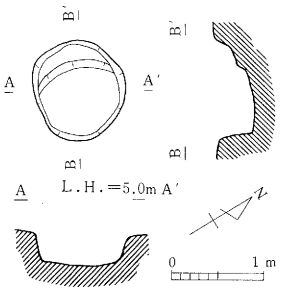


第13図　ＳＢ－８平・断面図（第３調査地）

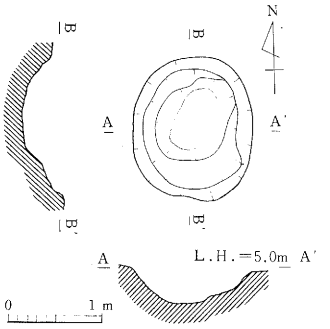
第９表　津田第Ｉ地区検出土壙一覧表

（単位：cm）

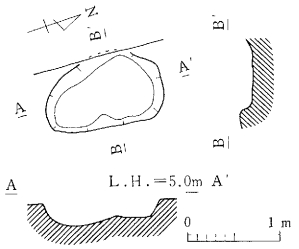
遺構番号	調査地区	上場径	基底部径	深さ	長軸方向	覆　土	形状の特徴	出土遺物
ＳＫ１	第１調査地	137×104	115× 74	17	Ｅ－30°－Ｎ	暗青灰褐色土	長楕円形	
〃　2	〃	109× 98	83× 74	41	Ｅ－12°－Ｓ	〃	長楕円形（西側に傾斜をもつ段を持つ）	
〃　3	〃	78	73	4	Ｅ－２°－Ｎ	〃	円　形	
〃　4	〃	154×130	72× 38	38	Ｎ－２°－Ｅ	〃	長楕円形（中場を持つ径104×76）	
〃　5	第２調査地	128	108× 67	27	Ｎ－３°－Ｗ	黒色砂質土	不整楕円形（基底部中央寄りに段を持つ）	
〃　6	〃	141×136	94× 92	30	Ｅ－15°－Ｓ	黒色微砂	不整円形（中場を持つ径127×123）	高杯 183・壺 84
〃　7	第３調査地	－	－	16	Ｅ－25°－Ｎ	暗青灰褐色土	不整形	鉢 127・壺 128・129 甕 123・124・125・126



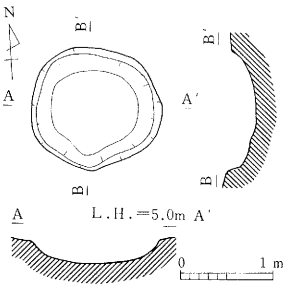
第14図　ＳＫ－２平・断面図（第１調査地）



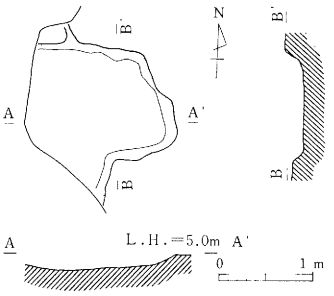
第15図　ＳＫ－４平・断面図（第１調査地）



第16図　ＳＫ－５平・断面図（第２調査地）



第17図　ＳＫ－６平・断面図（第２調査地）



第18図　ＳＫ－７平・断面図（第３調査地）

第４節　遺物の観察

第10表　津田第Ｉ地区住居跡及び土壙出土土器観察表

遺構	器種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SB-1	椀	1	丸底から緩やかな曲線を描いて口縁部に至り、端部を丸くおさめる。	内外面ともハケ調整。口縁外面にナデが施される。	黄褐色。細砂粒を少し含む。焼成は良。外面底部付近に籾痕が残る。
		2	やや平底気味の底部から緩やかに内弯して立ち上がり、口縁部で外反し端部は丸くおさめる。	外面底部から体部にかけてはヘラ削り。口縁部をツマミ出して横ナデ調整を施す。内面はナデ。	黄褐色。砂粒を少し含む。焼成は良。
	甕	3	きわめて小型の器形である。尖り気味の底部にふくらみを持つ体部を有し、口縁下部を若干絞って口縁を斜め上方にツマミ出す。	外面底部から体部にかけてはナデ調整の上を入念に研磨。口縁部にはツマミ痕が残る。内面はナデ、口縁部付近をヘラで横ナデし、口縁内部に粗いハケ調整を施す。	灰褐色。胎土良。焼成は良。
	鉢	4	丸底から緩やかに内弯状に立ち上がり肩部に丸味を帯びた張りをもたせる。頸部は外反し鋭い稜をなして直立気味に外反する口縁に至る。端部は丸くおさめる。	外面体部はハケ調整の上を部分的にヘラ削りをなし、頸部から口縁部にかけては横ナデを施す。内面はナデ、口縁部は入念に横ナデをなす。	乳白色。砂粒・金雲母を含む。焼成は良。
SB-2	椀	5・7	口縁部は開き気味に内弯して次第に薄くなる。端部は丸い。	外面はヘラ削り。口縁付近は横ナデを行う。	橙褐色。砂粒を多く含む。
		6	やや肉厚の椀である。器厚は口縁部までほぼ一様で端部を丸くおさめる。	外面は粗いヘラ削りの上をハケで調整し、口縁部を横ナデする。	橙褐色。砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。
		8	扁平な底部から内弯する体部は、口縁下部に至って緩やかに外反し、そのまま外上方へ開く。口縁部と体部の境界は内面ににぶい稜をつくる。	外面底部はヘラ削り。他の部分は内外面とも横ナデ。	黄褐色。砂粒を含む。焼成は良。
	甕	9	ほぼ直線的に伸びた肩部から鋭角的に外反した口縁は上端で外下方にわずかに傾斜した面をつくり内面を肥厚させる。	外面体部はハケ。口頸部は内外面とも横ナデ。内面体部はヘラ削り。	橙褐色。大粒の砂粒を含む。焼成は良。
SB-3	椀	10	上端で薄く終る口縁から浅く底部へ曲る。	外面はヘラ削り。口縁部を横ナデする。内面はナデ。	暗灰褐色。胎土は精良。焼成は硬質。
	支脚	11	上部を欠損している。上部がラッパ状に開く円筒をU字状に切り欠き、下部にドーナツ状の円板を貼り付けて台部とする。	全体的に粗雑な手捏ねによるつくりである。切り欠いたU字状の端部をつまんで調整している。なお、内面の一部をハケ調整している。	黄褐色、一部橙を帯びる。大粒の砂粒を含む。焼成は硬質。
	鉢	12	小さな平底の底部から一旦外反して立ち上がった体部は、内弯しながら口縁部に至る。口縁上端はほぼ水平	外面は全体にハケ、その後底部から体部にかけてヘラによるナデを施す。内面はハケ調整の上をナデる。	乳白色。砂粒を含む。焼成は良。

遺構	器種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SB-3	鉢	12	に小さな面をなし、外側にふくらむ。		
	甕	13	胴部の最大径を器高の中位よりやや上にとる。口縁は外反傾向を示しながら外上方に開く。口端部は丸くおさめる。	外面頸部から胴部中程にかけては縦ハケ、それ以下は幅の広い縦ハケ調整。口頸部内外面とも横ナデを施し、胴部内面はヘラ削り。	橙褐色。肩部から下には一面に煤が付く。砂粒を多く含む。焼成は良。
		14	平たい底部から一貫して内弯するやや長胴の体部を有する。短い口縁はほぼ直線的に斜め上方に開くがそれほど大きくは開かない。端部外面に比較的大きな面を持つ。頸部内面に稜を持つ。	口縁部内外面はハケ。外面は肩部にタタキを施し、それより下は縦ハケ調整。底部付近にタタキを消した跡が一部見られる。内面はヘラ削り。頸部付近に指頭痕が残る。	ピンクがかった灰褐色。胴部に煤が付く。大粒の砂粒を含む。焼成は良。
	壺	15	球形に近い体部、肩部から大きく屈曲した口頸部は、外反しながら大きく開く。内外面に肥厚した口端部外側の面には、ハケ状工具による2条の浅い凹線状を施す。	口縁内外面及び体部外面は目の粗いハケ調整の後、軽くヘラナデを施す。体部内面は外面よりも目の密なハケ調整。	外面は橙褐色、内面はグレー。砂粒を多く含む。焼成は良好。
SB-4	皿	16 17	他の部分よりも薄くつくった口縁部から緩やかに弯曲して浅い底部に至る。口端は丸くおさめる。	手捏ねによる成形で外面には指頭痕が残る。内面は不定方向のヘラ調整を施す。	灰褐色。細砂粒、金雲母を含む。焼成は良。
	椀	18	丸底から体部で一旦外反し、そのまま直線的に口縁部まで開く。口端は内側に折り曲げ丸くおさめる。	外面底部はヘラ削り、体部から口縁部は横ナデ。内面はハケ調整の後ヘラ削り、底部を削る際の深いヘラ傷が放射状に残っている。口縁部は横ナデ。	黄灰色。砂粒を少し含む。焼成は良。
		19	やや尖り気味の丸底から内弯して立ち上がり、内弯傾向の口縁まで続く。口端上面は外下方に斜めの面を持ち凹線が1条刻まれる。	外面はヘラ削り、内面はヘラで入念に研磨する。	乳白色。砂粒を多く含む。焼成は硬質。
	鉢	20	すわりの良い丸底から内弯する体部は口頸部に至って緩く外反し直線的に外上方へ開く。内面頸部に稜をなした後次第に薄く端部に至り丸くおさめる。	体部外面はハケ、口頸部をナデる。口縁内面はハケの上をナデ、体部はハケ調整の後ヘラ削り。	黄灰色。砂粒を多く含む。焼成は硬質。
	支脚	21	ラッパ状に開く脚部に角状突起を2本持つ。比較的小ぶりの器形である。	手捏ねによる成形。	黄褐色。背部に黒斑。砂粒を多く含む。焼成は良。
	甕	22	底部をわずかに欠失するが、ほぼ球形の体部から短かく外反した頸部から一旦稜を作って口縁が垂直に立ち上がり端部を内面に肥厚させて丸くおさめる。口縁外面には櫛状工具による条線が刻まれる。器厚はきわめて薄い。	外面底部から体部にかけては縦ヘラ研磨、肩部にハケ、口頸部内外面を横ナデする。体部内面はヘラ削り。	橙褐色。底部から口縁部までの一部に煤が付着。焼成は良。

遺構	器種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SB-4	甕	23	やや尖り気味の底部に球形に近い体部。口頸部は「く」の字状に屈曲し若干内弯傾向を示しながら外上方に開く。内面に稜を持った頸部から次第に薄くなる口縁は端部を尖り気味に丸くおさめる。	外面底部はヘラ削りで作り出し体部全体をたたく。その後胴部から上を軽くナデ、口縁部を横ナデする。内面はヘラ削りの上をナデ調整。	黄褐色、砂粒を多く含む。焼成は硬質。
SB-5	椀	105	端部を丸くおさめた口縁部から内弯して丸底の底部に至る。	外面はヘラ削りの上をナデる。内面には縦ヘラ磨きのあとが顕著に残る。口縁部は横ナデ。	橙褐色。微砂粒を含む。焼成は良。
	壺	108	丸底から球形に近く内弯する体部はその最大径を器高の中位にとり、それより上は緩く内弯しながら頸部に至る。口頸部は外反傾向を持ちながら直線的に外上方に開き端部を外面に肥厚させて丸くおさめる。	外面底部から頸部付近まではハケ。口頸部内外面を横ナデする。内面はヘラ削り、底部にナデが見られる。	黄灰色。体部に黒斑。微砂粒を含む。焼成は硬質。
SB-6	椀	91 92	端部を薄く、尖り気味に丸くおさめた口縁部から緩く内弯して底部に至る。	外面はヘラ削り、口縁部を横ナデする。内面は入念にナデを施す。	黄灰色。91は砂粒を少量、92は多量に含む。焼成は良。
	小型丸底壺	93	すわりの良い丸底から緩く内弯して立ち上がる体部は、頸部のやや下に張りを持つ。頸部で緩く外反して内弯しながら外上方に開く。端部は薄く尖らせる。	外面はヘラ削り、口頸部は内外面横ナデ。内面全体を入念にナデる。	黄褐色。微砂粒を少量含む。焼成は良。
	高杯	94	わずかに外反する杯部口端は薄く尖らせる。内弯する体部は柱部近くなって緩く外反する。柱部は短かく、若干のふくらみを持って下方に広がる。裾部は柱部との明確な境界を持ってわずかに内弯しながら下方に大きく広がる。裾端部は欠失している。なお裾部に直径 1.2cmの円孔を 4 箇所、焼成前に穿たれている。	外面、杯底部、柱部はヘラ削り。杯体部、口縁部及び杯部内面は入念な横ナデ、裾部外面はハケ調整の後ヘラ研磨を施し、内面はハケの上をナデる。	黄灰色、裾部は橙褐色。焼成は良。
		95	杯部片である。底部と口縁部の境界は外側に明確な稜を持ち口縁は外反しながら大きく外上方に開き端部を丸くおさめる。	内外面ともヘラ研磨。内面には斜めのヘラあとが明瞭に残る。口縁は内外面に横ナデが見られる。	黄灰色。砂粒をごくわずか含むがおおむね精良。焼成は硬質。
		96	杯底部との境界に明確な稜を持って立ち上がった口縁部は中程まで内弯して開き、それより上は直線的に外方に大きく開く。端部は丸い。柱部は若干ふくらみをもって下方に開き、更に「く」の字状に外反して裾部が広がる、直径 1 cmの円孔を 4 箇所焼	杯部外面底部はヘラ削り。他は内外面を横ナデ。柱部外面ヘラ削り、内面はナデ。裾部は内外面ともハケ調整の後ナデを施す。	黄灰色. 胎土、焼成とも良。

遺構	器種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SB-6	高杯	96	成前に穿たれている。		
	甕	97～99	97は底部を欠失するが、ほぼ同様の器形である。球形の下半分を若干伸ばしたような体部から大きく外反する口頸部を持つ。98・99の口縁部にはやや内弯傾向が見られる。口端は外斜め下方に傾く小さな面を持ち、97・98では内面を肥厚させている。	外面体部はハケ、内面はヘラ削り。口頸部は内外面とも横ナデ。	黄灰色ないし明るい褐色、一部黒斑あり。砂粒を多く含む。焼成は良。
	壺	100	底部を欠失するが丸底と思われる。体部はやや扁平な球状。頸部は体部との明確な境界をなして垂直に立ち上がり口縁部との段状の稜をなすべく大きく外反する。口縁部は外反しながら斜め上方に大きく開き端部を丸くおさめる。	外面は全体にヘラ研磨を施す。口端部にはナデが見られる。内面体部は入念なナデ。口頸部はヘラ研磨、特に口縁部には斜めのヘラ痕が明瞭に残る。	橙褐色。微砂粒を少量含む。焼成は硬質。
		101	108に似たプロポーション、体部の張りはこちらのほうがやや小さい。口縁部は緩く外反、端部は内面に肥厚させ丸くおさめる。	外面体部はハケ。肩部から口頸部は横ナデ。体部内面はヘラ削り、口頸部内面は横ナデ。	赤味を帯びた淡茶褐色。砂粒を多く含む。焼成は硬質。
SB-7	鉢	102	粘土板を強く押しつけたような平底の底部は体部から突出する。肉厚の体部は内弯気味に斜め上方に開く。端部は次第に薄く作るが、調整は雑である。	外面は雑なナデ。内面はハケ調整。	黄褐色。砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。
	小型丸底壺	103 104	丸底から内弯して立ち上がり、体部の上部に張りを持たせ、頸部で緩く外反し、内弯する口縁部は斜め上方に開く。端部は薄く尖らせる。104は103に比べ口径の割に器高が低い。頸部のしぼりは浅く口縁は大きく外に開く。	外面底部から体部はヘラ削り。口頸部は横ナデ。103の内面はヘラ研磨。口縁は横ナデ。104の内面はナデ。	103は暗黄灰色、砂粒を多く含む。104は黄灰色、微砂粒を少量含む。焼成は双方良。
	壺	106	口頸部を欠失する。丸底、楕円に近いが張りは体部の中位より上にある。	外面ヘラ研磨。内面ヘラ削り及びナデ。	橙褐色、砂粒を少量含む。焼成良。
		107	底部をわずかに欠失する。球形の体部から一旦外反した口頸部は外面に稜、内面にゆるい段をなして、やや内傾して立ち上がる。口縁端は外面を肥厚させ上端を水平に整える。	外面体部はハケ。口頸部内外面ともナデ。体部内面はヘラ削り。	暗褐色。胴部外面に黒斑。砂粒を多く含む。焼成良。
SB-8	椀	110	扁平気味の丸底、端部を薄く尖らせた口縁。	内外面ともヘラ研磨。	黄褐色、一部橙色。微砂粒を少量含む。焼成は良。
	鉢	122	扁平気味の丸底から一旦鈍い稜を持って内弯する体部は、その中位より	外面体部はハケ、口頸部横ナデ。内面体部はヘラ削り、口縁部横ナデ。	黄灰色。内面に黒斑あり、砂粒を含む。

遺構	器種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SB－8	鉢	122	やや上に最大径を持つ。頸部は口縁部との境界に突帯状に稜を持たせるべく強く外反し、口縁は直線的に斜め上方に開く。端部は丸くおさめる。		焼成は硬質。
SK－6	高杯	83	内弯する杯体部は柱部近くでやや外反する。口端部は丸い。柱部は比較的長く、若干のふくらみを持って下方に広がる。裾部は直線的に大きく開く。直径0.8cmの円孔を4方向に持つ。	外面は全体にヘラ研磨。内面杯部はヘラ研磨、口縁部を横ナデする。裾部内面はハケ及びナデ。	暗黄灰色。胎土は微砂粒をごくわずか含むが精良。焼成は良。
	甕	85	丸底の底部から球形状に立ち上がった体部は器高の中位に張りを持つ。肩部は直線的に内傾し頸部付近で緩く外反する。短かい口縁部は外上方に大きく開き端部を丸くおさめる。	外面底部から肩部にかけてはハケ調整、口頸部は横ナデ。体部内面はヘラ及びナデ。口縁部は横ナデ。	黄灰色。底部から体部外面には煤が付着。下半分の砂粒を少量含む。焼成は硬質。
SK－7	甕	123 124	124は底部を欠失しているが123とほぼ同様の器形である。小さな平底に長胴の体部を持ち、外反する口縁が斜め上方に開く。123の口縁端部は外側に小さな面を持つ。124の口縁はやや長く端部を丸めている。	外面胴部中位から頸部付近までタタキ、底部からはハケ調整を施し胴部中位付近のタタキを消している。口頸部はハケ。内面はハケ調整。	暗黄褐色。外面全域に煤が付着。大粒の砂粒を少量含む。焼成は良。
		125	胴部中位以下を欠失する。長胴の体部から「く」の字状に口縁が開く。端部は外側に面を持つ。	外面胴部はタタキ、下半分にヘラ削りでタタキを消した痕跡がうかがえる。口縁部は内外面ナデ。胴部内面はハケ。	黄灰色。外面下部に煤が付着。砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。
		126	尖らせた底部に丸味を帯びた体部。口縁部は外反傾向を示しながら斜め上方に開く。端部外面を肥厚させて丸くおさめる。	外面下半はヘラ削り。胴部から頸部にかけてタタキ調整の後ハケ。口頸部は内外面横ナデ。体部内面はハケ調整。	黄灰色。微砂粒を少量含む。焼成は良。
	鉢	127	扁平な丸底から緩く内弯して丸くおさめた口縁に至る。	外面底部はヘラ削り、他の部分はナデ。内面はハケの上をヘラ研磨する。	暗黄褐色。砂粒を多く含む。焼成は良。
	壺	128	頸部はわずかに内傾しながら立ち上がり、大きく外反して二重口縁をなす。口縁下部は外側に面をもち、そこから外反しつつほぼ垂直に口縁が立ち上がる。口縁外面はクシ状道具で波状文を施す。口端は丸くおさめる。	外面体部から頸部はヘラ研磨。口縁部はナデ。内面体部はハケ、肩部にヘラ削りがうかがえる。口頸部はヘラ研磨。	外面橙褐色。内面淡茶褐色。大粒の砂粒を含む。焼成は良。
			小さい平底から一旦外反傾向を示しながら立ち上がった体部はまもなく緩やかに内弯し始め、肩部に張りを持って頸部に至る。屈曲した口頸部は外反しながら外上方にラッパ状に大きく開き、端部外面に面をつくる。	外面底部はヘラ研磨。体部から口頸部はハケ調整の後軽くヘラでナデる。口端部は横ナデ。内面体部はハケ、口頸部はハケの上を横ナデする。	外面橙褐色。内面灰褐色。砂粒を含む。焼成は良。

第11表　第１調査地出土土器観察表

器　種	No.	形　態　上　の　特　徴	手　法　上　の　特　徴	備　　考
壺	24	やや扁平な球状の体部から直立気味に外反する頸部。短い口縁部は内弯傾向をもちながら斜め上方に開く。端部は丸い。	外面底部ヘラ削り。体部、頸部ヘラ研磨。口縁部横ナデ。内面体部は雑なヘラ研磨。口縁部横ナデ。	暗黄褐色、大粒の砂粒を含む。焼成良。
甕	25	直立気味に内弯する体部から緩く外反する口縁部は、端部を丸くおさめる。	外面ヘラ削り及びナデ。内面体部ヘラ削り。口縁部は内外面とも横ナデ。	外面橙褐色。内面暗黄灰色。砂粒を多く含む。焼成は良。
	26	尖り気味の底部に球形状の体部から「く」の字状に屈曲した口縁は外反しながら外上方に開く。端部は薄く丸い。	体部は内外面ともハケ調整の後ヘラ研磨。口縁部は内外面にヘラ研磨を施す。	赤味を帯びた淡茶褐色。胎土は精良。焼成は硬質。
	27・28	球形状の体部から「く」の字状に屈曲した口縁が直線的に外上方へ開く。28では体部の張りを肩部付近に持つ。	外面体部はハケ。口頸部は内外面とも横ナデ。体部内面はヘラ削り。	淡茶褐色。砂粒を含む。焼成は良。
	29	尖った底部に大きくふくらむ体部から外反する頸部。口縁部は外反しながら外上方に開く。端部外側に小さな面を持つ。	外面体部はタタキ、底部付近はハケ調整。口縁部はハケの上をナデる。内面はハケ。	赤褐色。底部付近に煤が付着する。焼成はやや軟質。
	48	きわめて小型の器形である。尖った底部を持つフットボール状の体部は頸部でわずかに外反し、直立した短かい口縁部へと続く。口端は薄く尖らせる。	外面体部はヘラ研磨、口頸部はハケ。内面底部はヘラ削り、胴部から頸部はハケ、口縁部は横ナデ。	橙褐色。微砂粒を少量含む。焼成良。
	53	底部は平底でごく小さい。フットボールを半截したような形状の体部から「く」の字状に屈曲した口縁部は外反しながらやや斜め上方に開き、端部外側に外面を肥厚させた面をつくる。	体部は内外面ともハケ、口縁部は内外面とも横ナデ。	明黄褐色。砂粒を多く含む。焼成良。
	55～70 74～76 81	長胴の体部と「く」の字状に屈曲し外反する口縁を有し、ハケ目による調整を施される甕の一群である。体部下端から明瞭に外反して作り出された平底の底部を持つもの56・57と、少し丸味を帯びるが基本的に平底の性格を持つもの、底部の角がとれて丸底に近くなるもの63・65・76とがある。口縁端部は外側に小さな面を持つ。62・66・81は口端外側を肥厚させている。口径が胴部最大径よりも大きくなるのは56だけである。	内外面とも基本的にはハケ調整である。口端部の内外面には横ナデを施す。底部内面をナデるものが多い。66ではハケ調整の後ヘラナデを施している。81の口頸部内面はナデ。	暗褐色、及び橙褐色。煤の付着がみられる。砂粒を含む。焼成はおおむね良。
椀	30～32 34・35・45	口端部を薄く尖らせるか或いは丸く	外面底部から体部まではヘラ削り。	黄灰色。砂粒を多く

器　種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備　　考
椀	30～32 34・35・45	仕上げ、外上方に開かせ内弯して浅い底部に至る。	口縁部及び内面はナデ。32、45の内面にはヘラ及びハケの痕が残る。	含む。焼成は硬質。
	33・36	器形の大小はあるが口縁部を上方ないしはやや内側に内弯させている点で共通している。33の底部が扁平なのに比べ36では少し丸味を帯びている。	33は内外面ともナデ。36は底部外面にヘラ削りの痕が残る他は内外面とも入念にヘラ研磨されている。	33－暗黄褐色。砂粒を多く含み、焼成はやや軟質。 36－黄灰色。砂粒を含み、焼成は良。
小　型 丸底壺	37～38	37の口縁は内弯しながら斜め上方に大きく伸び、底部から体部をヘラ削りすることによって体部上部に純い稜を作る。38の口縁は37ほど長くない。体部も緩やかに内弯した曲線を描いている。頸部内面の稜も37に比べれば鈍い。37・38ともに口端部は薄く尖らせている。39では口縁は更に短かく頸部の外反の度合いも弱い。ただし頸部内面の稜は屈曲の度が弱いにもかかわらず明瞭に作りだしている。口端部は丸くおさめている。	外面体部下半はヘラ削り。他は内外面ともにナデ。	37－暗橙褐色。砂粒を少量含む。焼成は良。 38－橙色。砂粒を少量含む。焼成はやや軟質。 39－乳白色。砂粒を含む。焼成は良。
鉢	40	ミニチュアの鉢、口縁近くになって肉厚になる。	手捏ねによる成形と思われるが最終的な調整は外面をナデ、内面をヘラ削りで行う。口端部のナデではみ出した粘土をヘラで削った痕が残る。	黒褐色。砂粒を少量含む。焼成は良。
	41・43	すわりの悪い丸底から内弯して立ち上がり、口縁部近くになって外反傾向を示す。特に43の口端部は外反の度が強い。	外面はナデ、内面はハケ。43の口端部は内外面とも横ナデ。	41－橙褐色。砂を含む。焼成は良。 43－灰色。砂を少量含む。焼成は良。
	42・46	46の底部ははっきりした平底であるが、42は丸味を帯びる。	外面はヘラ削り及びナデ。42の内面はハケの上を縦ヘラでナデたあとが明確に残る。46の内面はハケ。	42－黄褐色。砂を少量含む。焼成は良。 46－黄灰色。砂を多く含む。焼成は良。
	44・47	丸底の底部を持つ鉢である。44の口縁上端は内傾した面をつくる。47の口端は丸くおさめる。	外面はハケ、口縁部内外面を横ナデする。44の内面はナデ。47はヘラナデ。	44－外面暗褐色。内面黒色。大粒の砂粒を含む。焼成良。 47－黄灰色。砂粒を含む。焼成良。
	52	丸底の扁平な体部は上部に張りを持つ。頸部は「く」の字状に屈曲し、一旦口縁下端外面に稜をなして外反し、斜め上方に開く。口縁上端に水平な面を持つ。	外面体部はハケ、口頸部は横ナデ。内面体部はヘラ削り、口縁は横ナデ。	オレンジ気味の黄灰色。砂粒を多く含む。焼成は硬質。
	54	尖り気味の底部、半球状の体部から屈曲した口縁部は外やや上方に大き	外面底部はヘラ削り。体部は内外面ともハケ。口縁部は外面横ナデ、内	橙色気味の黄灰色。底部に黒斑。砂粒を

器　種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備　考
鉢	54	く開き端部外側に面を持たせる。	面ハケ。	少量含む。焼成は良。
台付鉢	51	台部を欠失する。緩く内弯して立ち上がる体部は上部に張りを持つ。口縁部は内弯して外上方に開き、端部を丸くつくる。	体部内外面はヘラ削り及びナデ、口頸部は内外面とも横ナデ。	黄灰色。砂粒を多く含む。焼成良。
低脚杯	49	内弯して外上方に開く杯口縁部は端部を薄く丸く作る。脚部は短かく、ラッパ状に開く。裾部の径は杯口径の約3分の2である。裾端部は丸くおさめる。	外面杯体部ハケ、口縁部及び脚部はナデ。杯内面はヘラ研磨。脚内面はハケ。	黄灰色。砂粒を少量含む。焼成は硬質。
支　脚	50	円錐形の上端を斜めに切って高い方の一端を斜め上方に薄く伸ばした形状をなす。内面は中空。	手捏ねによる成形。	暗褐色、黒斑あり。砂粒を多く含む。焼成良。
器　台	71～73	いずれも脚部が直線的に広がり横等間隔に3方向の円孔を持つ。受部の立ち上りは71では外面に稜をなして内側につまみ上げられ、72では71ほど明確ではないものの、やはり外面に鈍い稜を持つ。73では内弯した受部上端を丸くおさめるにとどまる。	外面はヘラ研磨。72の受部及び脚部端部には横ナデを施す。受部内面はナデ。脚部内面71・73はヘラ削り及びハケ。72はヘラ削り及びナデ。	黄褐色、橙褐色。71・73は砂粒を少量含む。72の胎土は精良。焼成は良。
壺	77・78	多少長めの口頸部が外反しながら外上方に開き、77では口端を丸くつくるが、78では外面に肥厚した面を持つ。78の体部は球形を上下に若干伸ばしたような形状で平底の底部を持つ。77は体部下半を欠失するため全体の形状は不明ではあるが、78よりもなで肩である。	77の体部外面はヘラ研磨、内面はハケ。体部と頸部の接合部に指頭痕が残る。口頸部は内外面ともハケ、口縁部を横ナデする。78は内外面ともハケ。口頸部内面はさらにその後ナデを施す。口縁部外面は横ナデ、なお端部外面はハケで横にナデている。	黄褐色。77は砂粒を多く含む。78の胎土は良。焼成は良。
	79	体部下半を欠失するが、ほぼ球形状になるものと思われる。口頸部は内弯傾向を示しながら斜め上方に直線的に伸びる。なお口端部は内側に折り曲げて丸くおさめている。	外面は全体にヘラ削り。肩部から口頸部はその後ナデる。内面はナデ。肩部から頸部に指頭痕が残る。	黄褐色、一部橙色。胎土良。焼成良。
	80・82	ほぼ直立する頸部と短かくやや外反する口縁部を有する。82では80よりも外反の度は強い。80の口端部上面は雑ではあるがナデを施して平らな面を作ろうとしている。82では外側を肥厚させた丸い端部を作っている。両者ともに体部下半を欠失するため形状は不明であるが胴長の球状になるものと思われる。	内外面ともハケ調整。82では口縁部内外面を横ナデする。体部と頸部の接合部には指頭痕が残る。	黄褐色。80は砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。82は砂粒を少量含み、焼成は良。

第12表　第２調査地出土土器観察表

器　種	No.	形　態　上　の　特　徴	手　法　上　の　特　徴	備　　考
壺	84	体部は肩部以下を欠失する。強く外曲した口頸部は一旦外側に稜をなした後直立して立ち上がる。口端部は外側に折り曲げて丸くおさめる。	体部外面はハケ、内面はヘラ削り。口頸部内外面及び肩部外面は横ナデ。	黄灰色、一部橙色。砂粒を含む。焼成は良質。
	90	平底から内弯して立ち上がった体部はその中位よりもやや上に胴張り持つ。頸部には斜格子状にヘラで刻んだ突帯を貼り付け、口縁部は外上方に大きく開く。口端部は外斜め下方に引き伸ばして外側に面をつくりハケによる波状文を施す。なお胴部中位よりやや下に径 2.5cmの円孔を焼成後に穿つ。	外面全体に一旦ハケを施した後体部にはヘラ研磨を行う。特に胴部から肩部にかけては入念にハケメを消している。口縁部外面にはナデが見られる。内面はハケ。	橙褐色。砂粒を多く含む。焼成良。
支　脚	86	上端部を斜めに、下面を上げ底に作る。	手捏ねによる成形。	橙褐色。砂粒を多く含む。焼成良。
鉢	87	椀状の体部から外上方に開いた口縁部は一旦屈曲してやや外反気味に直立した短かい立ち上がりを持つ。端部は薄く尖らせる。	内外面ヘラ研磨。口頸部外面を横ナデ。内面には斜め放射状のヘラ先による痕が見られる。口縁部立ち上がりの内面は横ナデ。	黄褐色。胎土、焼成ともに良。
甕	88・89	胴部最大径と口径がほぼ同じに作られる。口縁は斜め上方に直線的に伸びる。88の底部はややふくらみを持った平底。89はごく小さいが平底を持つ。	両者とも外面全体にタタキ目を持つ。88の外面は磨滅が著しい。89では胴部下半にヘラによるナデが見られる。なお底部下面にもタタキ目を施している。内面胴部下半をナデる他はハケ調整である。	88－黄褐色。胎土、焼成ともに良。 89－暗褐色。煤が付着する。砂粒を少量含む。焼成は良。

第13表　第３調査地出土土器観察表

器　種	No.	形　態　上　の　特　徴	手　法　上　の　特　徴	備　　考
椀	109	底部に「＋」のヘラ記号が刻まれる。	手捏ねで成形し内面をヘラ削りする。	橙色気味の淡茶褐色。底部に黒斑。砂粒を含む。焼成は良。
鉢	111	丸底。口端部は薄く丸く作る。	外面ヘラ削り、口縁部に横ナデ。内面ヘラ研磨。	内外面とも黒色。胎土焼成ともに良。外面に煤が付着し、さらに外面の一部及び内面に朱が付着する。おそらく水銀朱の製造過程に用いられたものであろう。

器　種	No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備　　考
鉢	112	大型の鉢、内弯する浅い体部が直立したところを頸部として口縁が外斜め上方に内弯して開く。端部は内外面を肥厚させて外側に面をつくる。	外面ナデ。内面体部ハケ。口縁部内外面を横ナデする。	黄褐色、内面に黒斑。砂粒を多く含む。焼成良。
	113	尖り気味の丸底から内弯して大きく開く。口端は丸く作る。	外面ヘラ削り。内面ヘラ研磨。口縁部内外面を横ナデする。	黄灰色。砂粒を多く含む。焼成良。
壺	114	口頸部片。外反した頸部から稜をなして立ち上がる口縁は直線的に内傾する。端部を外に折り開げて上端に狭い面をつくる。	内外面ともに横ナデ。	黄褐色。砂粒を多く含む。焼成良。
	118	口頸部片。外反した頸部から丸味を帯びた段を経て立ち上がる口縁は外反して外上方に開き、端部に外斜した面をつくる。	内外面ともに横ナデ。頸部下から外面はハケ、内面はヘラ削りを施す。	乳白色。砂粒を含む。焼成は硬質。
	117	きわめて小型である。77・78をミニチュアにした器形。底部は欠失しているため不明。	手捏ね。外面にハケ調整を施す。	暗褐色。砂粒を多く含む。焼成良。
甕	119	口頸部片。体部から「く」の字状に屈曲した口縁部は外上方へ直線的に開く。端部は丸くおさめる。	体部外面ハケ、内面ヘラ削り。口縁部は内外面とも横ナデ。	橙褐色。微砂粒を少量含む。焼成はやや軟質。
高　杯	115	端部を薄く尖らせた杯部は内弯して底部に至る。ごく短かい柱部はやや下方に広がり、内弯気味に大きく下方に開く裾部に至る。裾部には横方向等間隔に4箇所、径1cmの円孔を持つ。	杯体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁部内外面横ナデ。柱部ヘラ研磨。裾部は内外面ともハケ、端部を横ナデする。	橙褐色。胎土、焼成ともに良。
器　台	116	直線的に下方に開く脚部には直径1.3cmの円孔を3個持つ。受部の立ち上がりはほとんどなく、端部外側に面を持つ。	受部は内外面ともヘラ研磨、端部内外面を横ナデする。脚部は内外面ハケ調整。	黄褐色、大粒の砂を含む。焼成良。
支　脚	120	断面が反りを持った台形状になる。底面を上げ底にしている。	手捏ね。	暗黄褐色。砂粒を含む。焼成良。
	121	50に似た器形。上面に反りを持つ。	手捏ね。	乳白色。砂粒を多く含む。焼成良。

第14表　津田第Ⅰ地区出土土製品観察表

器種		No.	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
不明		138	復元径11cmの円板の端部を外斜め上方につまみ上げた粘土板の内弯した面中央に高さ3.5cmの円錐状の突起を貼り付ける。	手捏ね成形の後、内面及び突起部にハケメを施す。（一応、内弯したほうの面を内面とする。）	暗褐色、外面に黒斑あり。砂粒を少し含む。焼成良。蓋的な用途？第1調査地出土。
手捏ね土器	鉢	139	平底で上半に稜を持った体部。口端は内傾した面をなす。ミニチュア鉢。	内外面にナデがみられる。	黄褐色。砂粒を多く含む。焼成良。第3調査地出土。
	壺	140	球形の体部。底部は扁平。口縁部はほぼ直立する。ミニチュア壺。	内面には指頭痕が良く残る。	暗褐色。砂粒を多く含む。焼成良。ＳＢ－７出土。
	杓子	141	柄部の大部分と椀部端部を欠失する。柄部の断面は丸い。	全体に雑なナデ調整を施す。	黄褐色、椀部外面に黒斑。砂粒を少量含む。焼成良。第1調査地南出土。
		142	きわめて小型である。ミニチュア模造品と思われる。		橙褐色、外面に黒斑。砂粒を少量含む。焼成良。第1調査地南出土。

第15表　津田第Ⅰ地区出土石器類観察表

器種	No.	材質	長さ×幅×厚さ(cm)	形状	出土場所
砥石	130	細粒砂岩	20.0×7.0×7.8	一面のみを使用。他2面には面取りの痕が見られる。	第1調査地
	131	〃	12.2×4.8×3.8	断面5角形。全面を使用。	ＳＢ－１
	133	〃	17.4×7.1×6.2	全面を使用。尖ったものを擦った痕が残る。	ＳＢ－７
石庖丁	132	緑泥片岩	9.3×4.2×0.5	刃部両面から研磨。両面から穿孔。	第1調査地
叩き石	134	砂岩	13.4×7.5×6.1	3面に使用痕が見られる。	第1調査地南
石斧	135	泥岩	9.4×8.4×3.8	刃部片面を打ち欠いて作り出し、他面を研磨する。	第1調査地
擦り石	136	緑泥片岩	11.5×5.0×3.1	全面を研磨。端部を使用する。一部欠損。	〃

第５節　若干の考察

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどが弥生終末期から古墳前期初頭段階のものである。包含層がたいていの場合一層に限られ、層位的な分類は困難である。したがってここでは遺構にかかわる遺物について簡単に述べておきたい。

遺物を出土した遺構は方形竪穴住居址８棟、土壙２基である。なかでも最も遡ると思われるのは出土遺物が在地の土器のみで構成されるＳＢ－３、ＳＫ－７である。ＳＢ－３出土の甕14は弥生後期末に比定される遺物である。壺15は口端部を若干肥厚させ、端面に浅い凹線を２条ほどこしている。当平野における凹線文の盛期は中期中葉から末葉までであるが、その名残りが後期末葉まで残っていたと考えられる。ＳＫ－３からは３タイプの甕が一括して出土している。それぞれ叩き目を有するが、127ではそのほとんどを刷毛目によって入念に消している。内面上半は刷毛目調整、下半はヘラ削りの後ナデを施す。123～125では胴部下半の叩き目を刷毛目で消し、胴部上半には粗い叩き目がそのまま残る。内面は刷毛目調整で器壁を薄く仕上げている。126では尖り底になり丸底化の傾向を示している。型式的には、127→123～125→126という順序になろうがこれらが同一土壙から共伴して出土するという事実はその１：３：１という個体数の比率とあわせて弥生終末期の一段階における甕の形態変化のあり方を示唆していると言える。また、第１調査区出土の内外面刷毛目調整の甕の一群55～70、74～76は包含層からの出土であるが、これらとＳＫ－７の127との間にも器型的に見る限りそれほどの時期的な差というものが感じられない。すなわち弥生後期から終末期にかけての調整方法における刷毛目から叩き目への移行ないしは保存といった状況がＳＫ－７の遺物とあわせて比較的容易に看取することができる。

他の遺構からは他地方、特に近畿地方の影響を強く受けた遺物が出土している。遺物の量や時期的なバラツキのなさといった面で最も安定した出土状態をみせるのはＳＢ－６である。これら一群の遺物は特に甕における口端面の特徴、内面ヘラ削りの入念さから見て布留の古い段階、１式に比定されよう。これらの遺物はおそらく搬入品であろうと考えているが、これら搬入品と在地の遺物、特に器型変化をとらえ易い甕の同一遺構内での共伴関係が残念ながら明らかでないため、近畿地方布留１式の段階で当地方がどのような状況であったかを明確にすることは難かしい。ただＳＢ－４で布留１式に併行する時期の吉備系甕22と在地の小型甕23との共伴がみられる。この23とＳＫ－７出土の126とを較べれば126が若干先行すると考えられるが，それほど大きな時期差ではあるまい。したがって、ＳＢ－４とＳＫ－７との間にもさほど大きな時間的なズレはないと考えられ、布留の１式段階における当地は弥生的な社会状況を色濃く残していたものと思われる。その他の住居址についてもＳＢ－４、６と大差ない時期を与えることができると考えている。

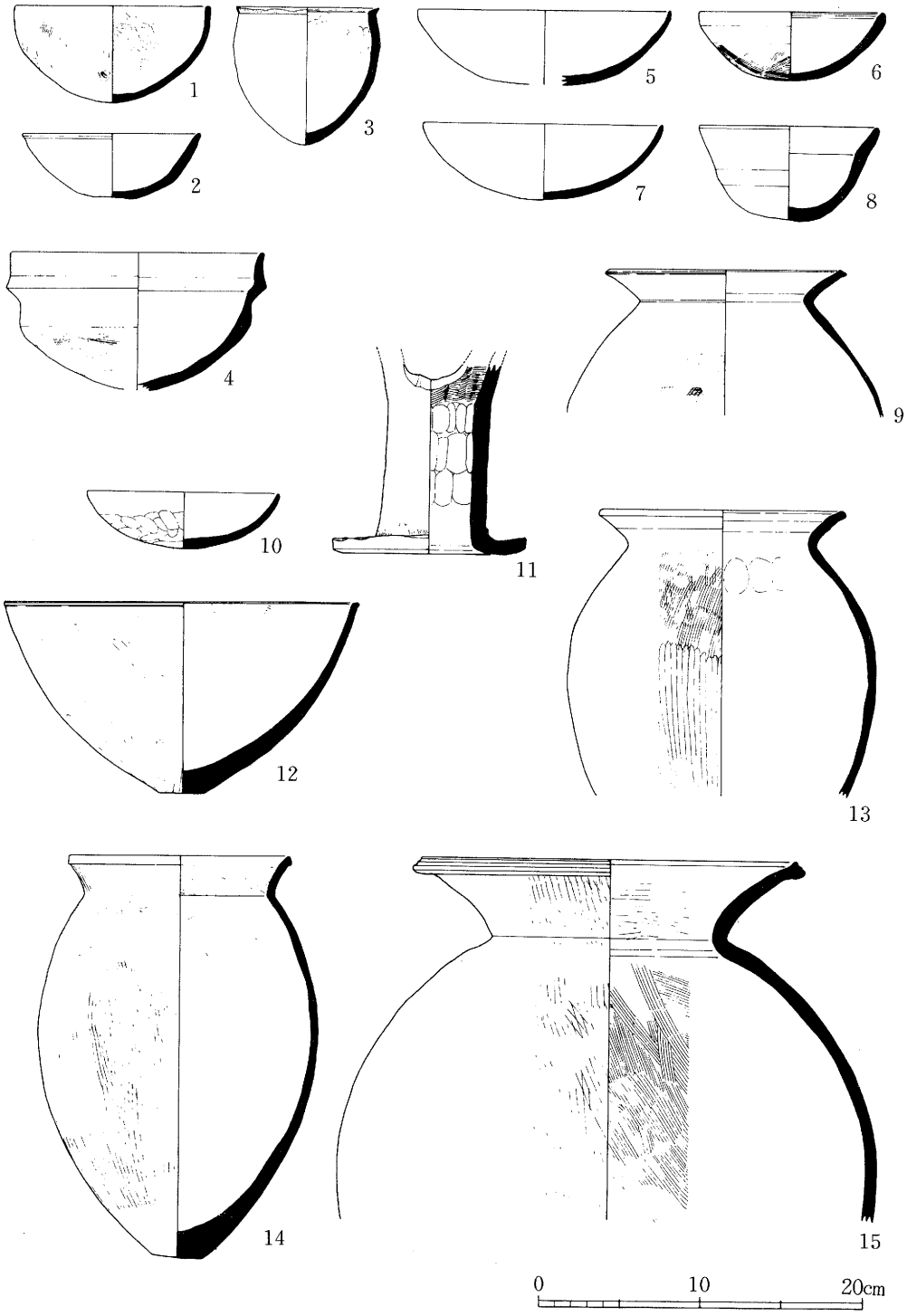
ＳＫ－６出土の小型甕85は少々異質な遺物である。プロポーション及び外面の刷毛目調整

は布留式甕に似るが、口縁部と肩部との屈曲点がやや鈍く、全体的にシャープさを欠く。口端部に肥厚はみられず丸くおさめる。内面のヘラ削りも肩部上半まででそれ以下は雑なナデ調整にとどまり器厚も比較的厚い。共伴する高杯83から考えればこの遺構だけが時期的に下るとは考え難い。おそらく布留式甕の影響を受けた在地の製品であろうと考えている。

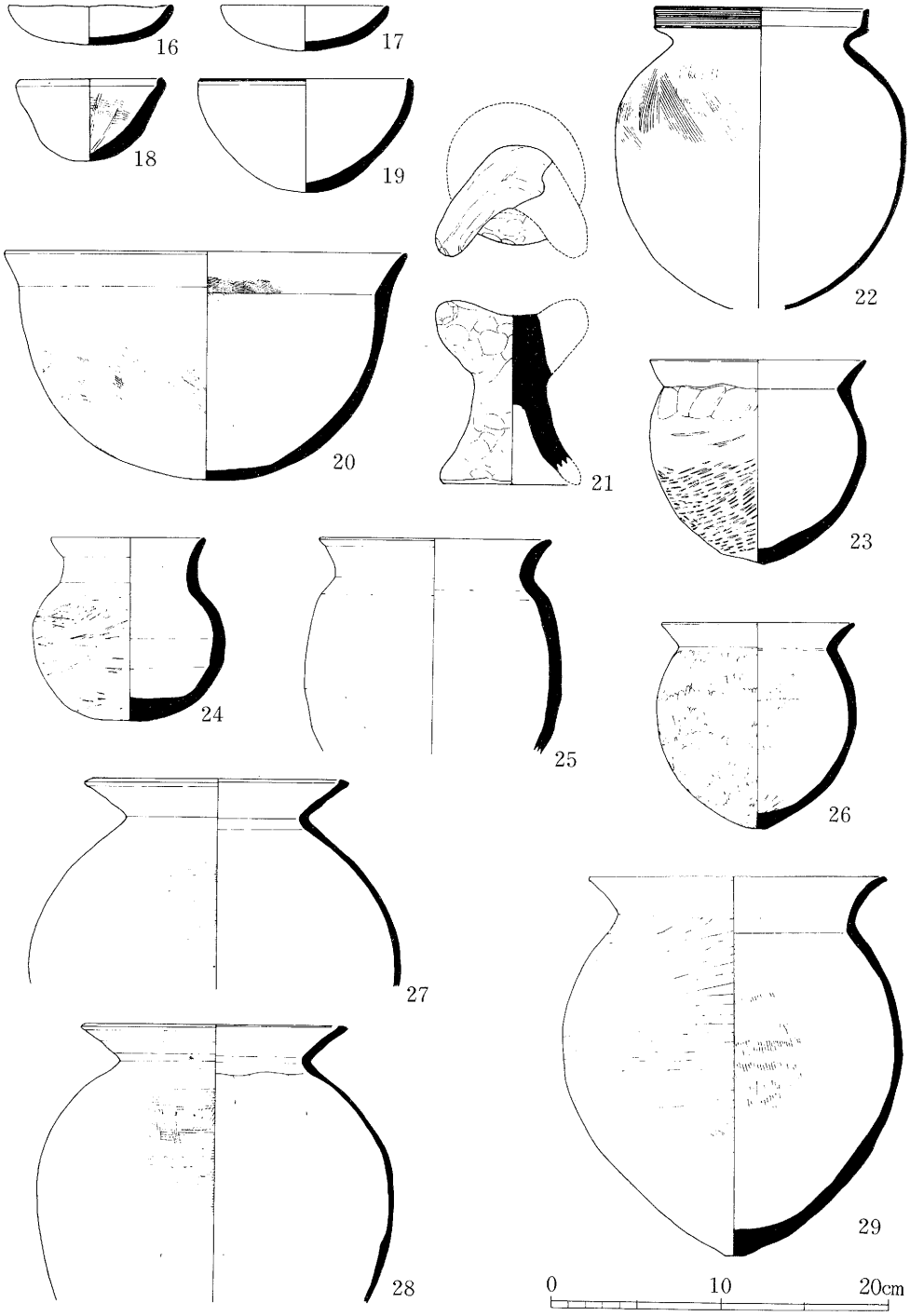
以上、遺構にかかわる遺物を概観してきたが、論点の甘さ、資料不足といった感があるのは否めない。筆者は従来、当平野における弥生終末期をもう少し下げる必要があるのではないかと考えていたのであるが、これはおよそ感覚的なもので、松山平野において前期古墳の調査例がない現在、古墳時代の始まりをどこに置くべきなのかいまだに混沌とした状況である。ただし4世紀初頭から中頃までの在地の遺物といったものがこれまでほとんど皆無に近いというのは事実であり、弥生終末を畿内布留1式の頃まで下げることができれば比較的すっきりするように思う。また一方、そうでなくて弥生的は土器をこの段階まで使用しているが実際には既に古墳時代に入っていたという考え方も当然成立する訳で、どちらを採るべきなのか正直なところ筆者には判断しかねる。いずれにせよ、そういったことも含めて弥生後期から終末期の編年を考え直さなければならない時期にきていると考えている。

この宮前川遺跡を拠点的な集落としてとらえれば、その水系を利用した流通は当然考えられる筈で、既に上流の古照遺跡、松山北高遺跡においては量の多寡はともかく布留式甕の出土をみている。今後、更なる資料の増加に期待したい。　　(栗田)

図　　版

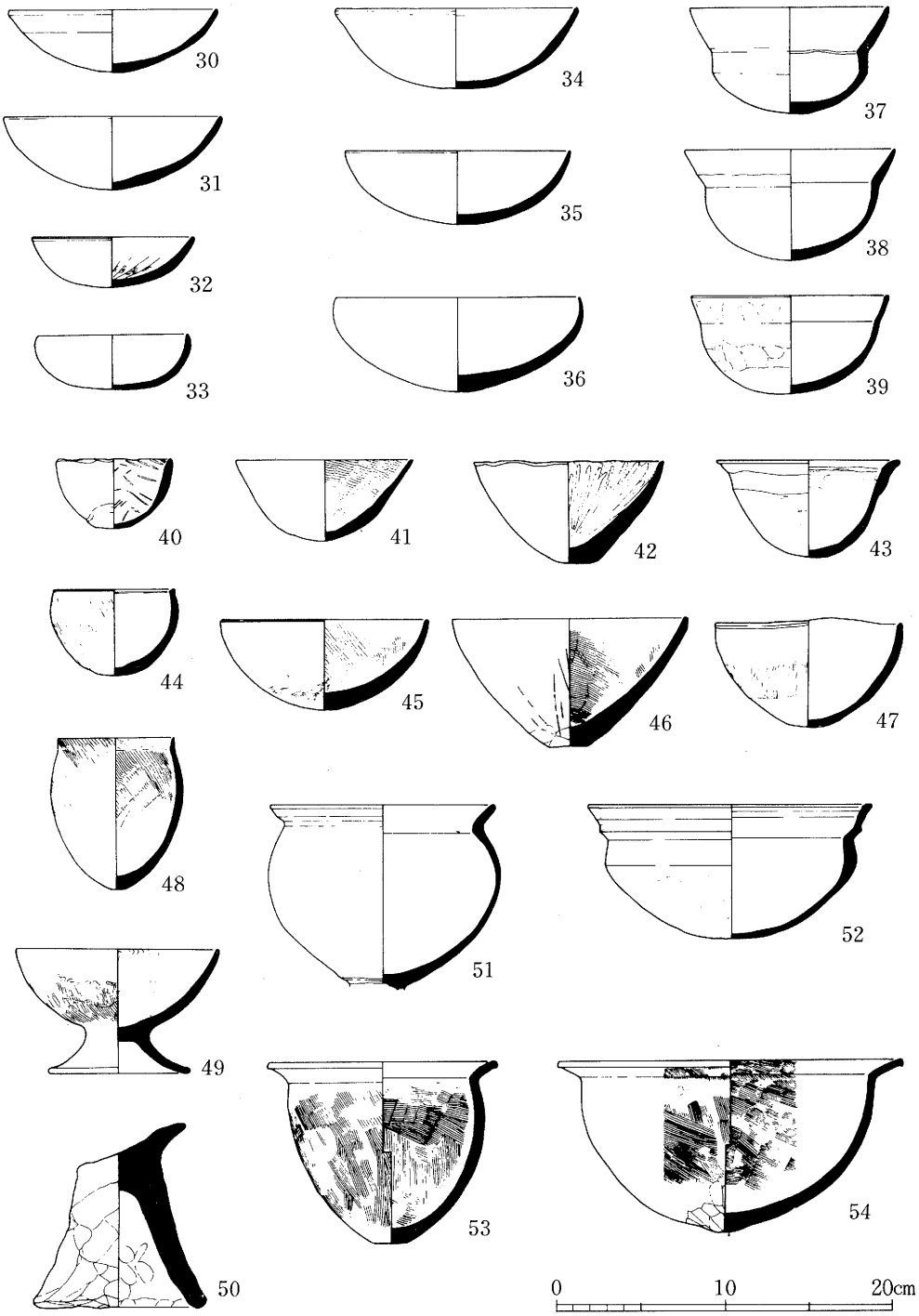


ＳＢ－１（１～４）、ＳＢ－２（５～９）、ＳＢ－３（10～15）

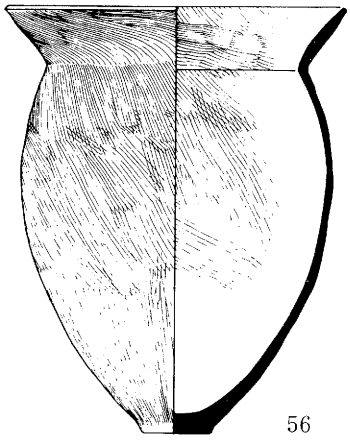


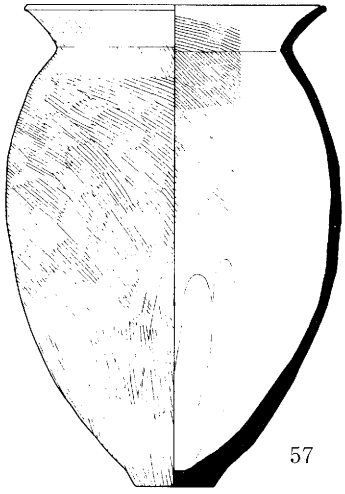
ＳＢ－４（16～23）

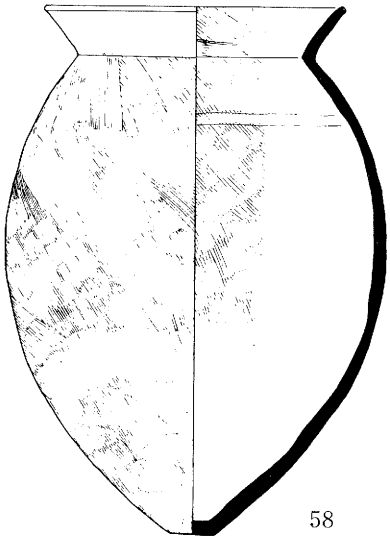
図版三　第1調査地出土の土器実測図

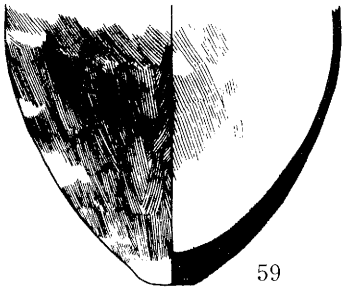


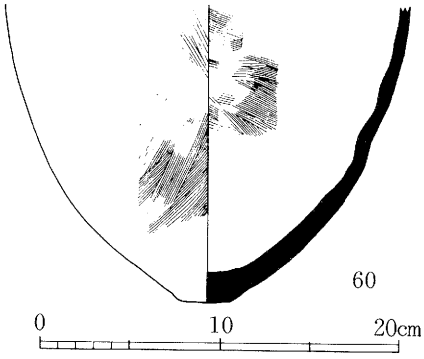
55


56

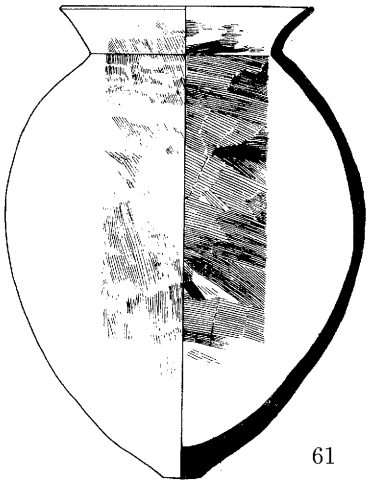

57

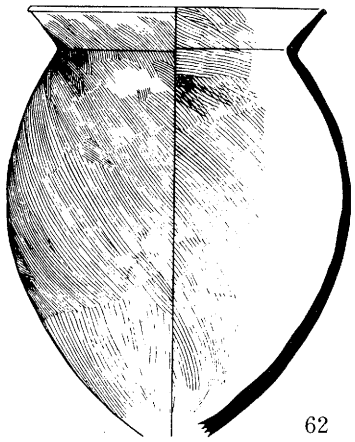

58

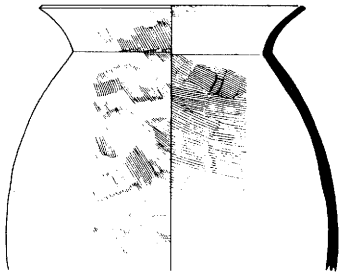

59

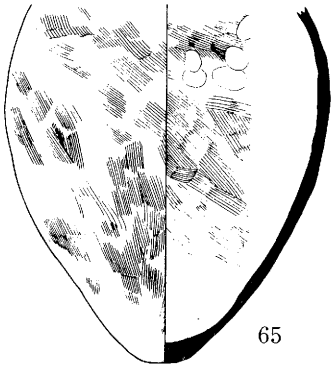

60
0
10
20cm

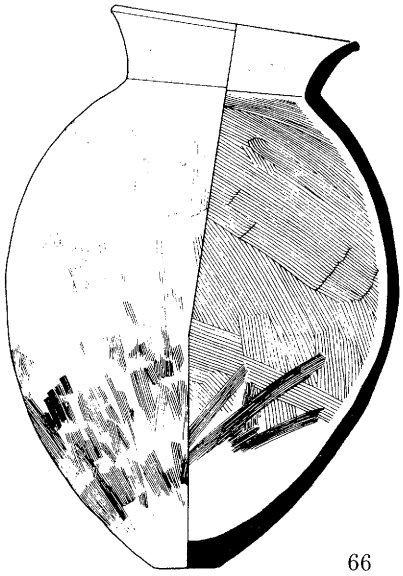
図版五　第1調査地出土の土器実測図





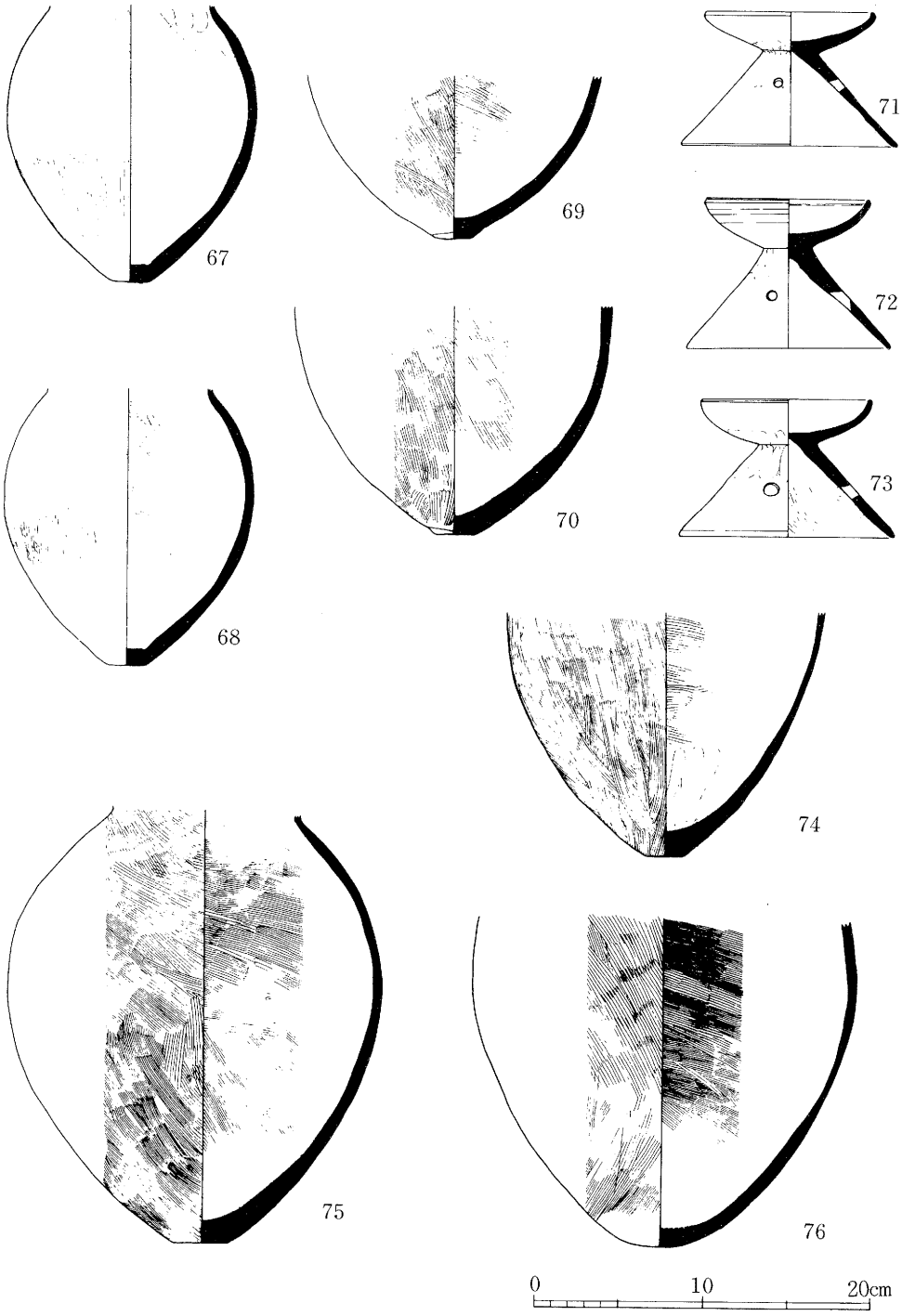


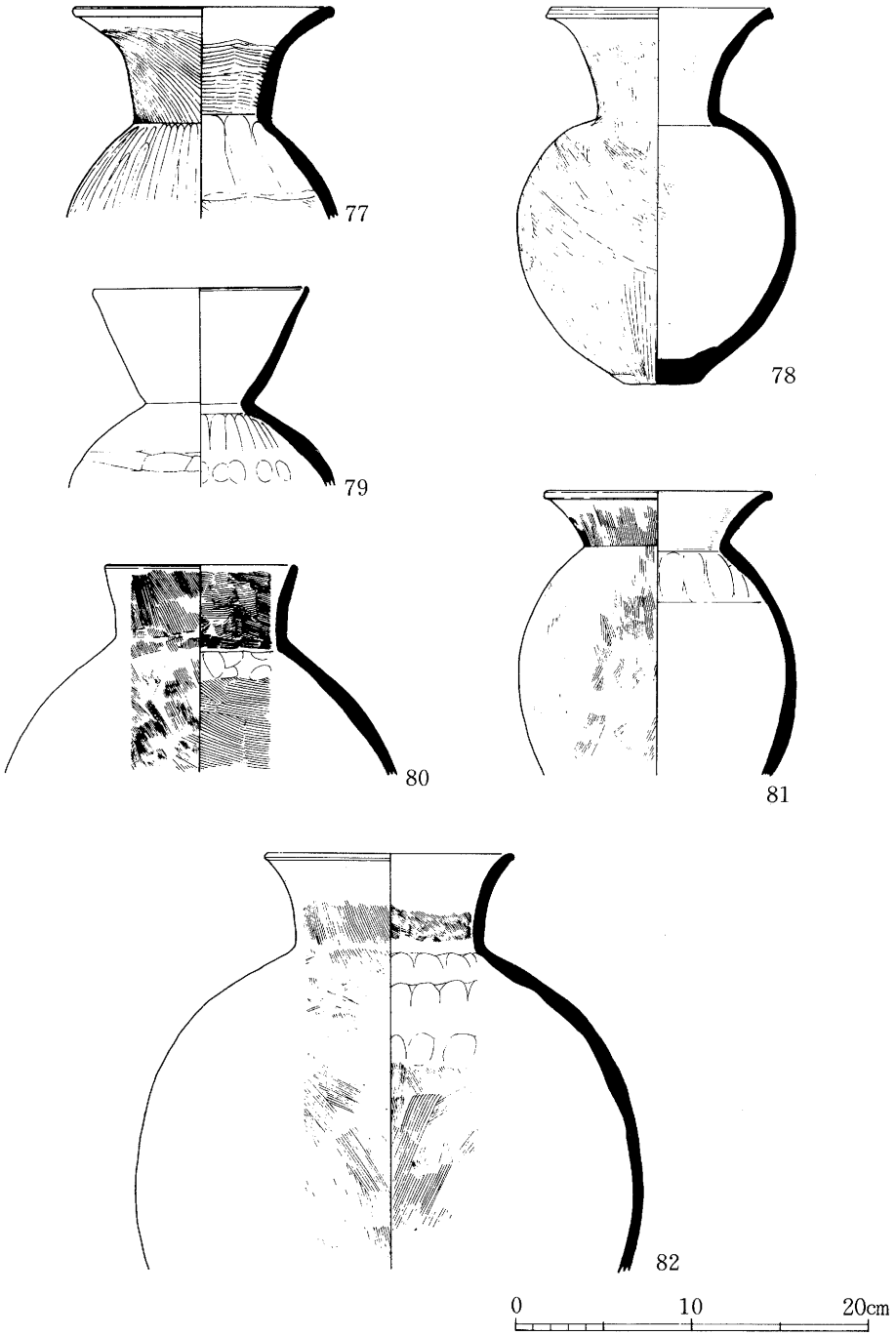




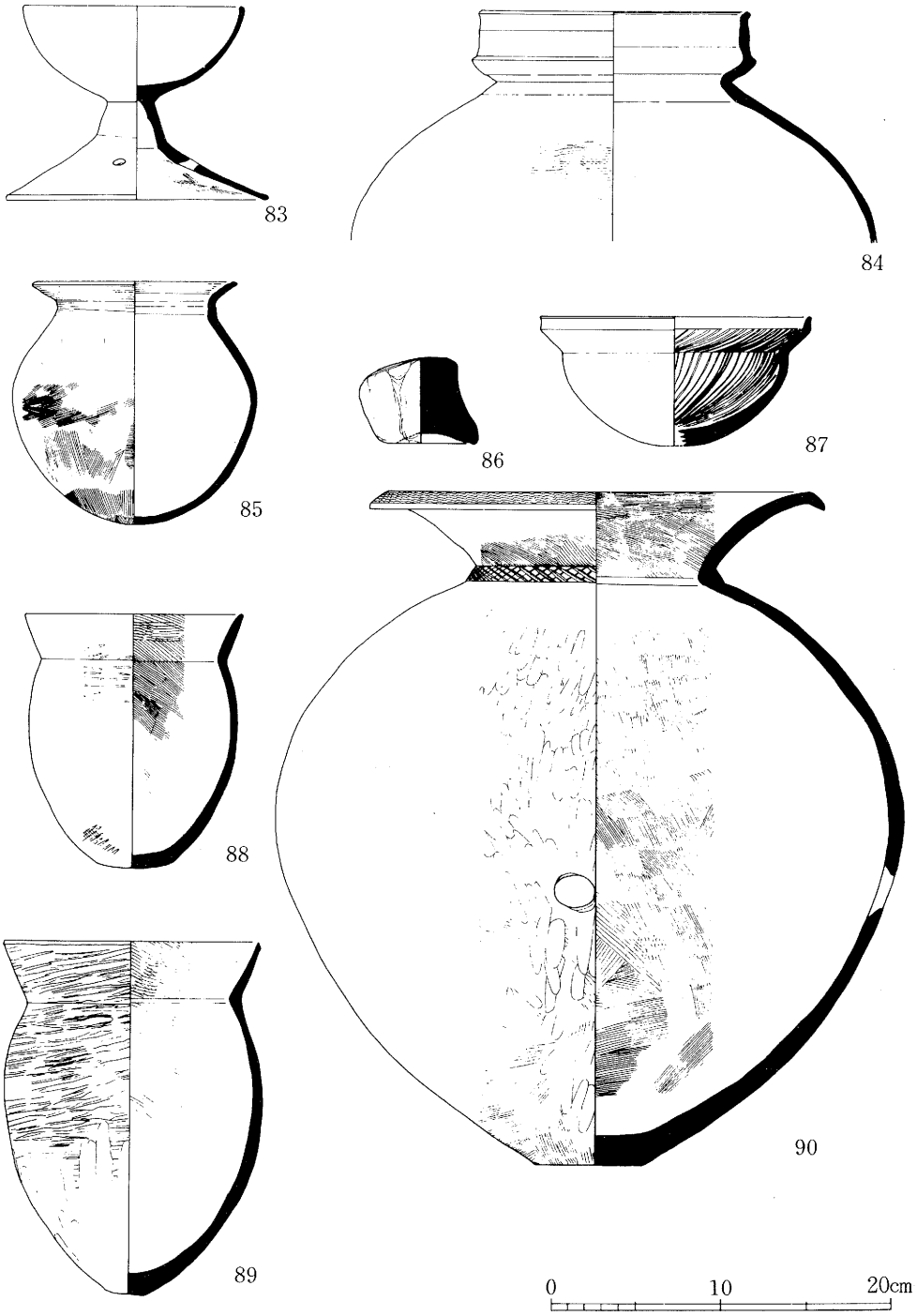
0　10　20cm

図版六　第1調査地出土の土器実測図

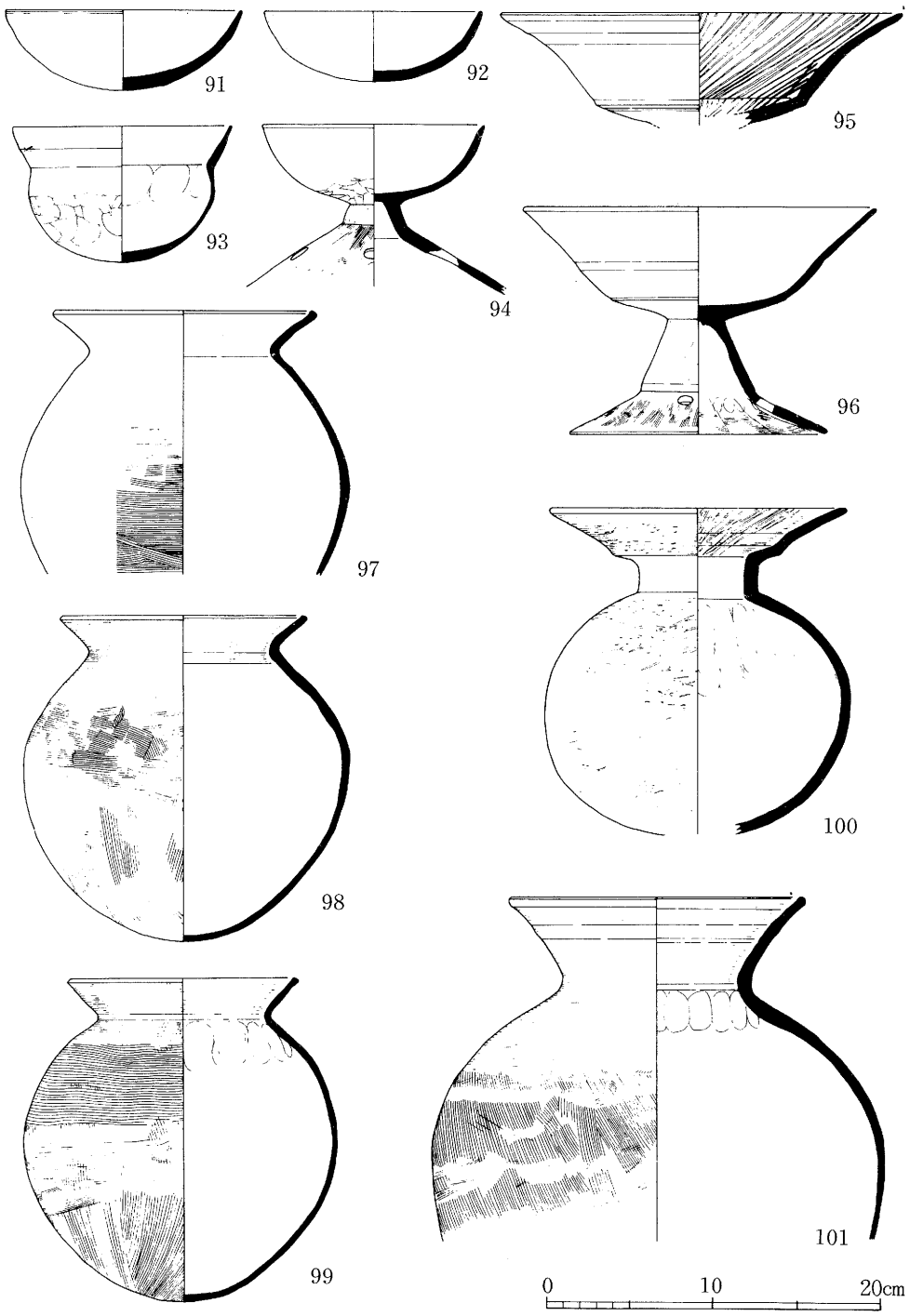


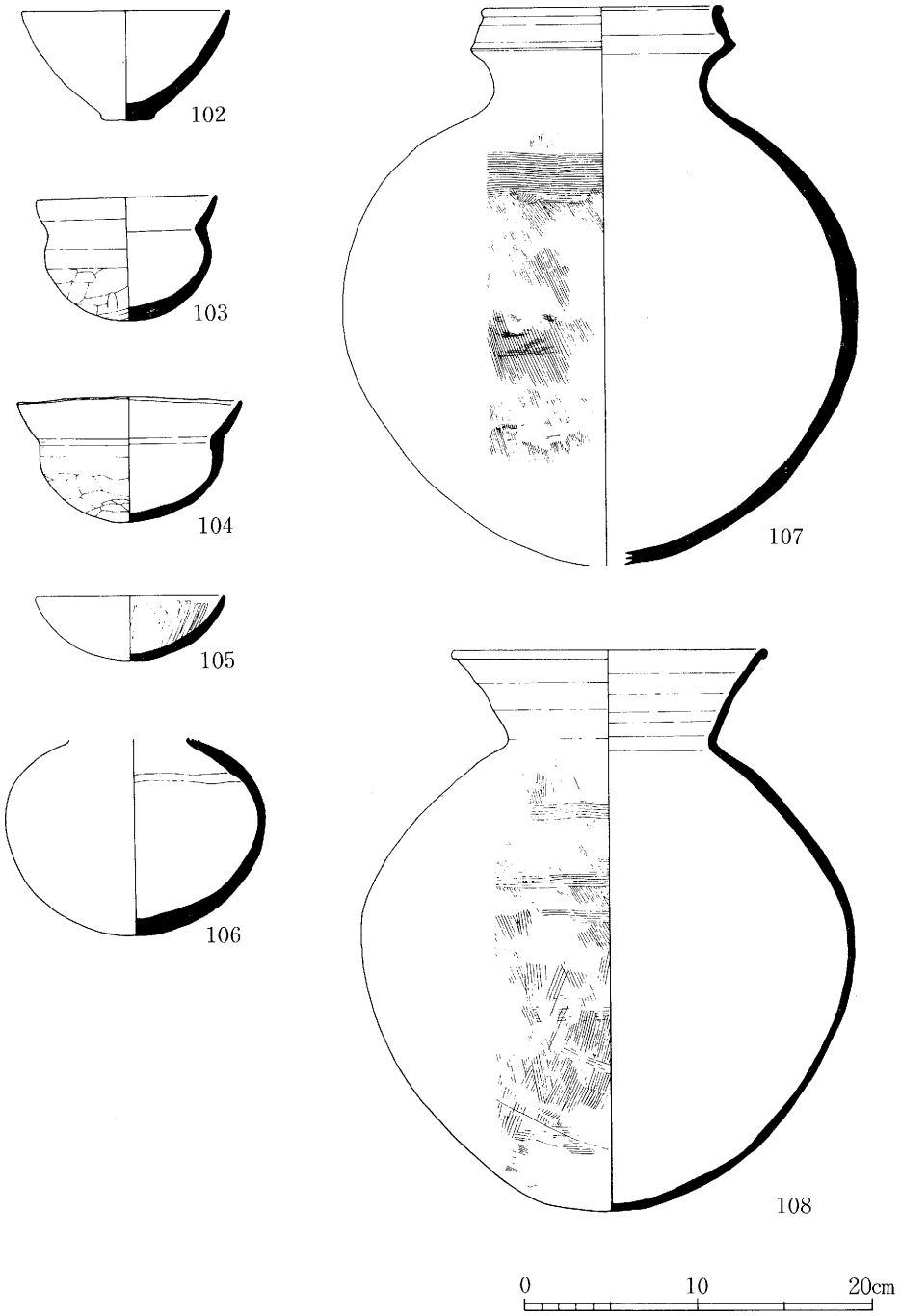

77
78
79
80
81
82
0
10
20cm

図版八　第2調査地出土の土器実測図

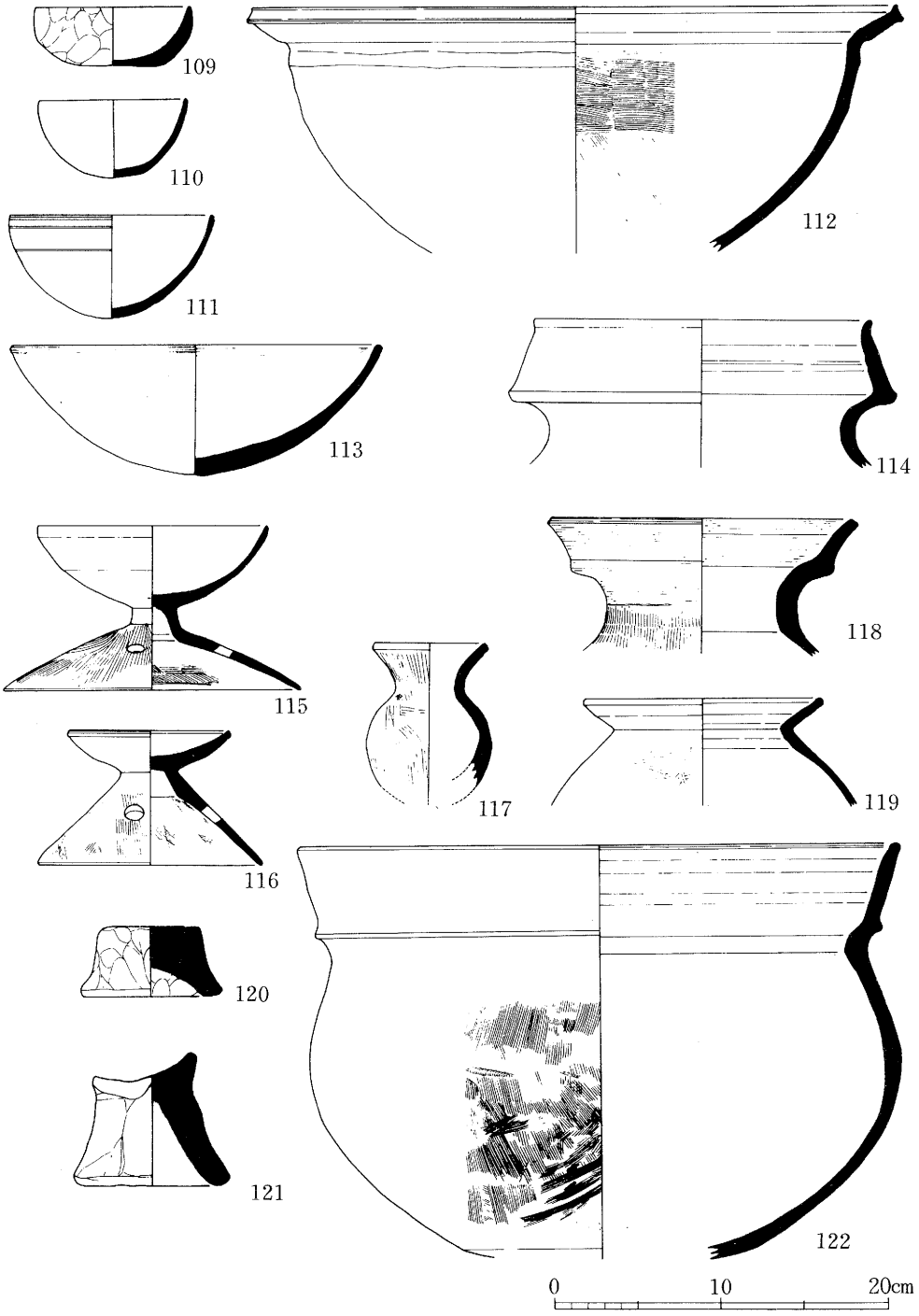


SK－6（83、85）

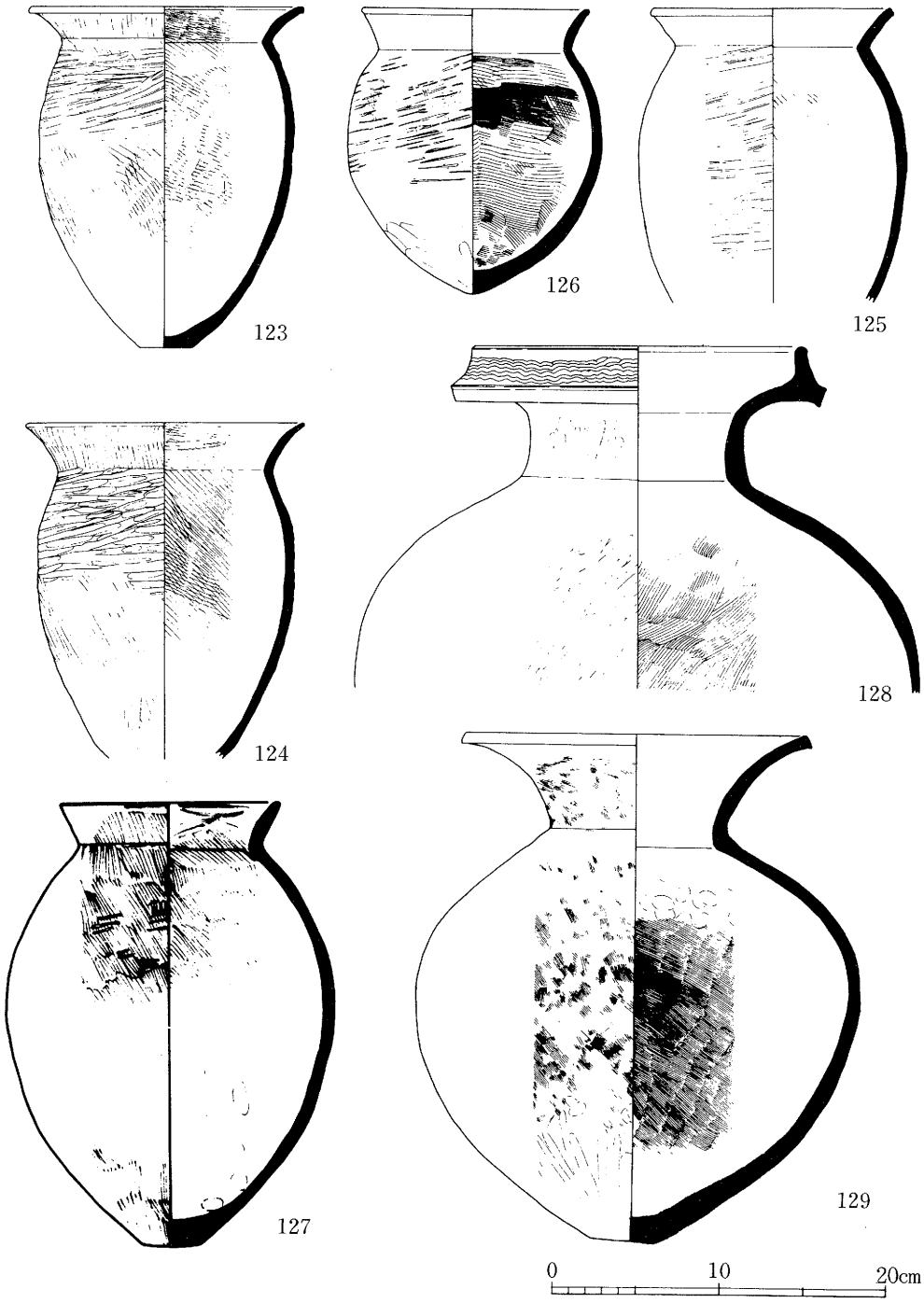

91
92
95
93
94
96
97
100
98
101
99
0
10
20cm



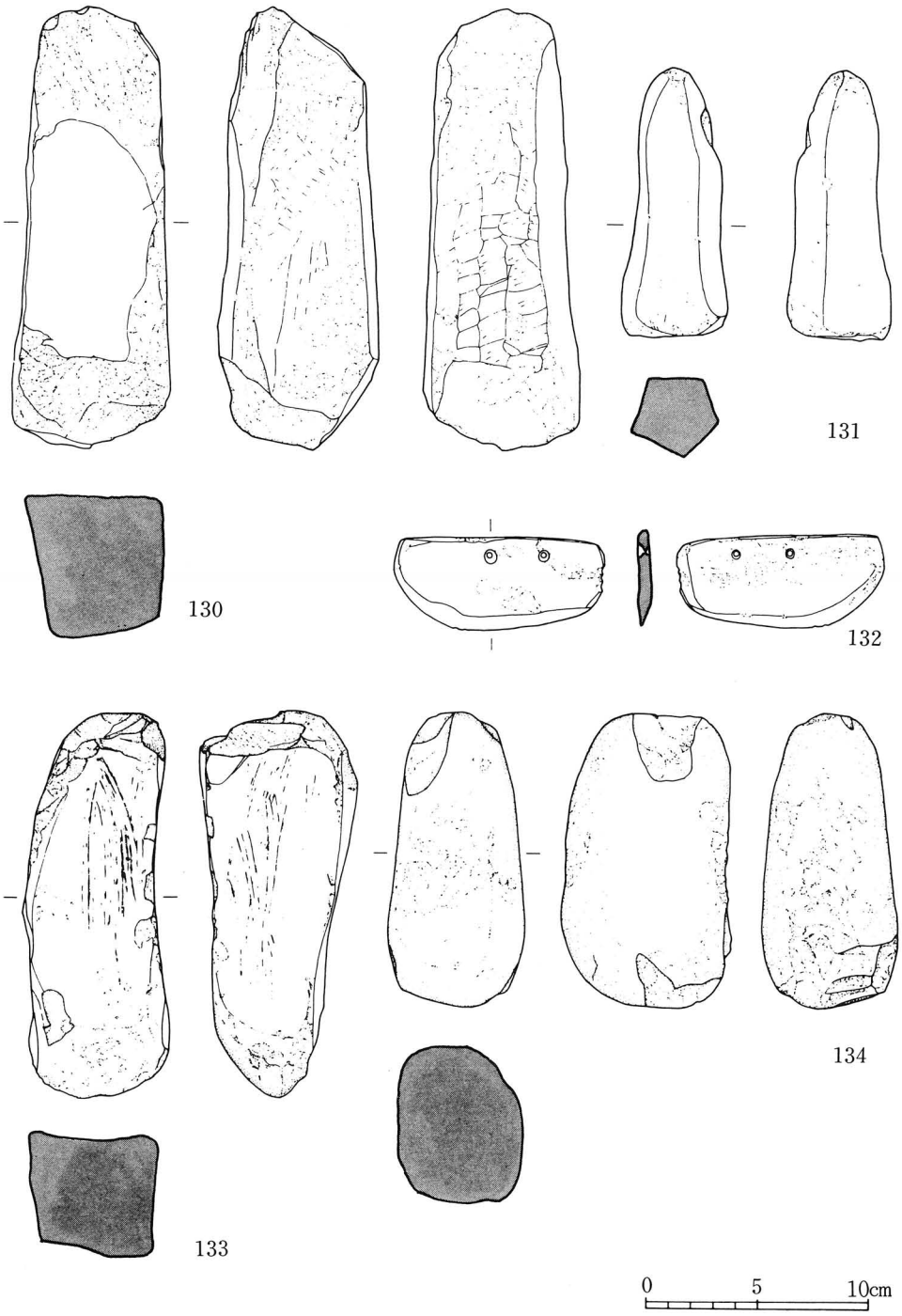
ＳＢ－５（105、108）、ＳＢ－７（102～104、106、107）



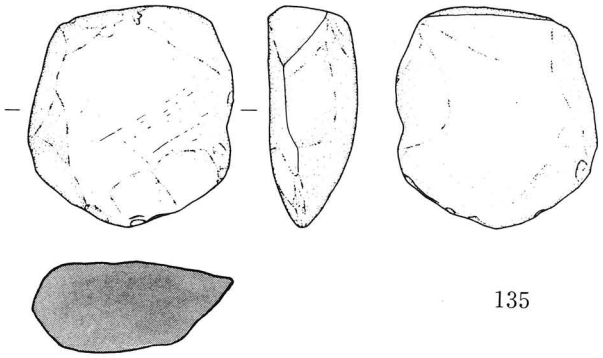
ＳＢ－８（110、122）



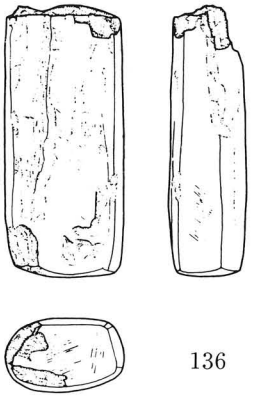
SK－7


130
131
132
133
134
0
5
10cm

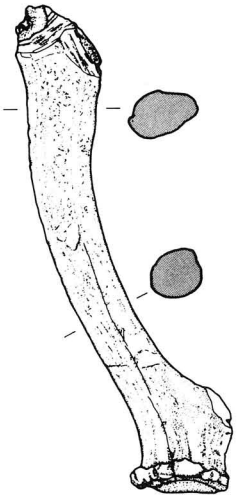
図版十四　石器類・その他の遺物実測図



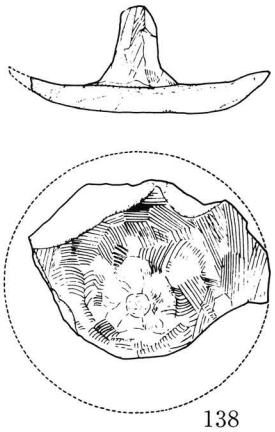
135



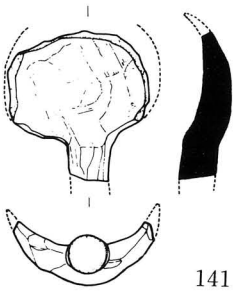
136



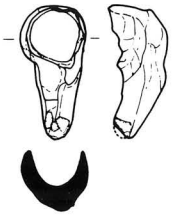
137



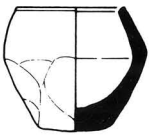
138



141



142



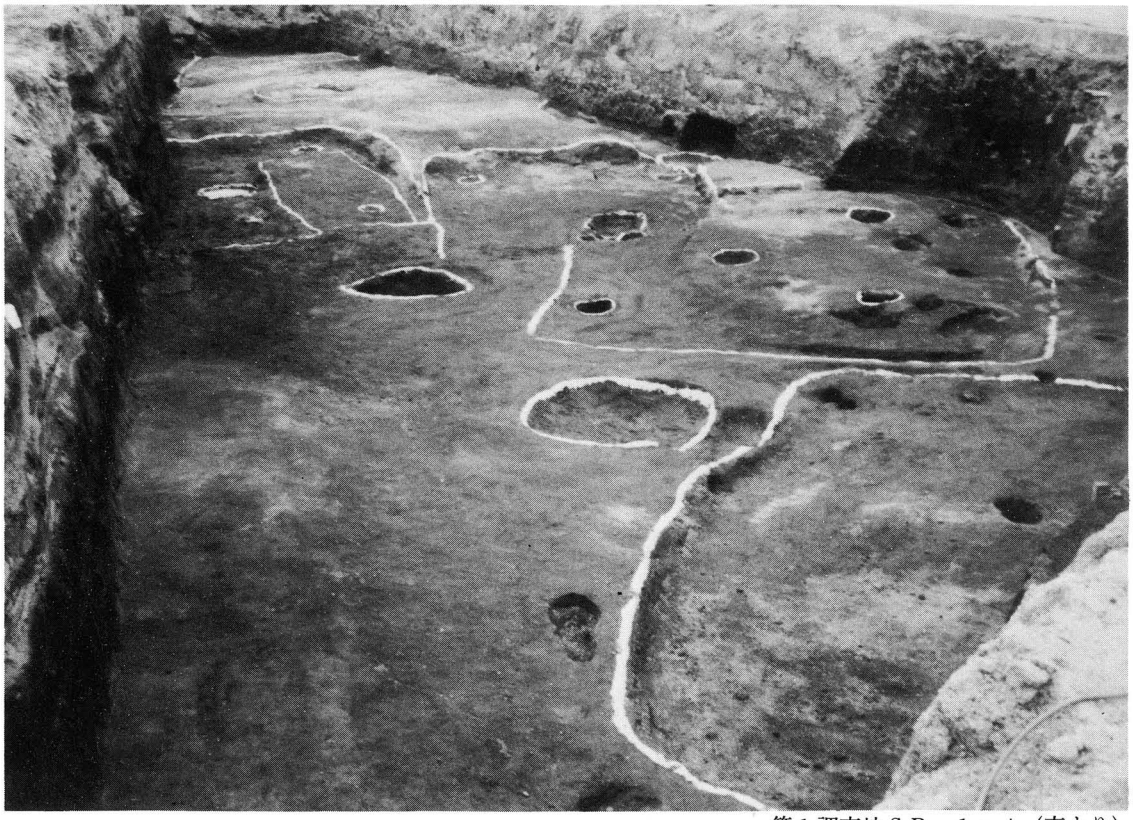
139

140

0　5　10cm

調査区全景（南東より）

第１調査地（南西より）



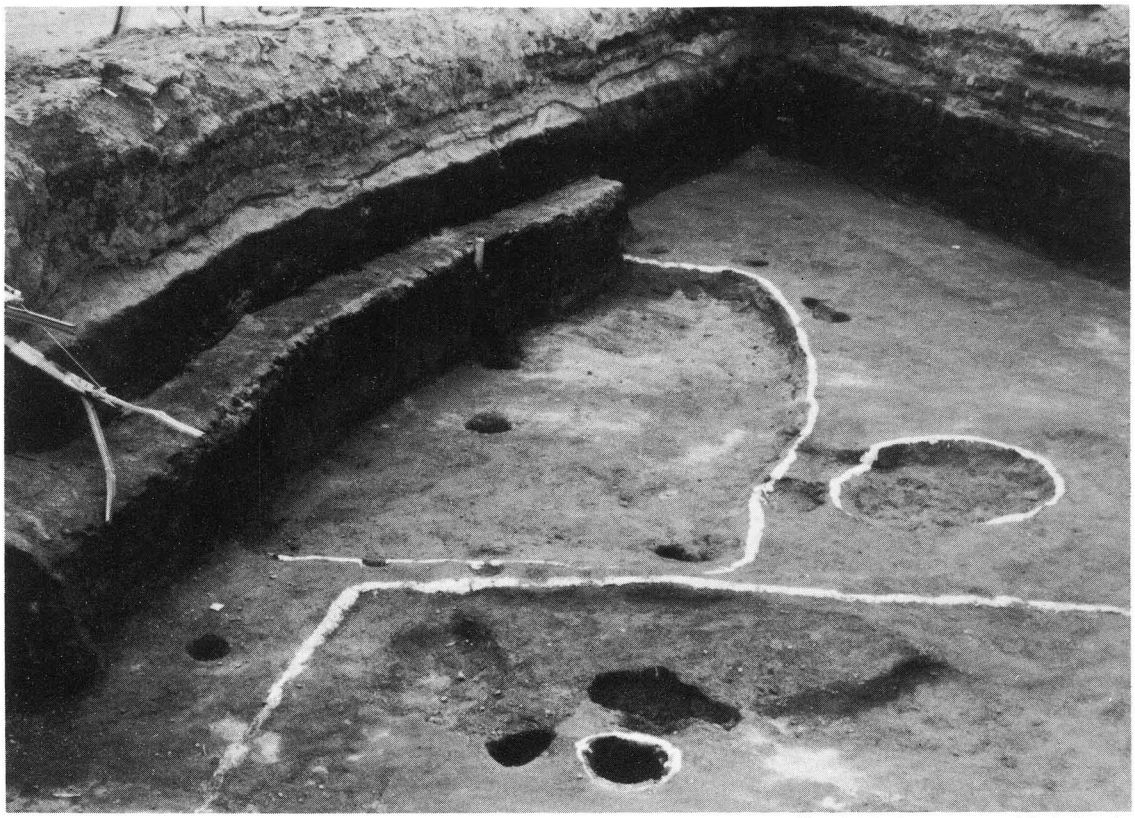
第１調査地ＳＢ－１～４（南より）

第１調査地ＳＢ－２～４（南より）

第３調査地ＳＢ－５～７（南より）

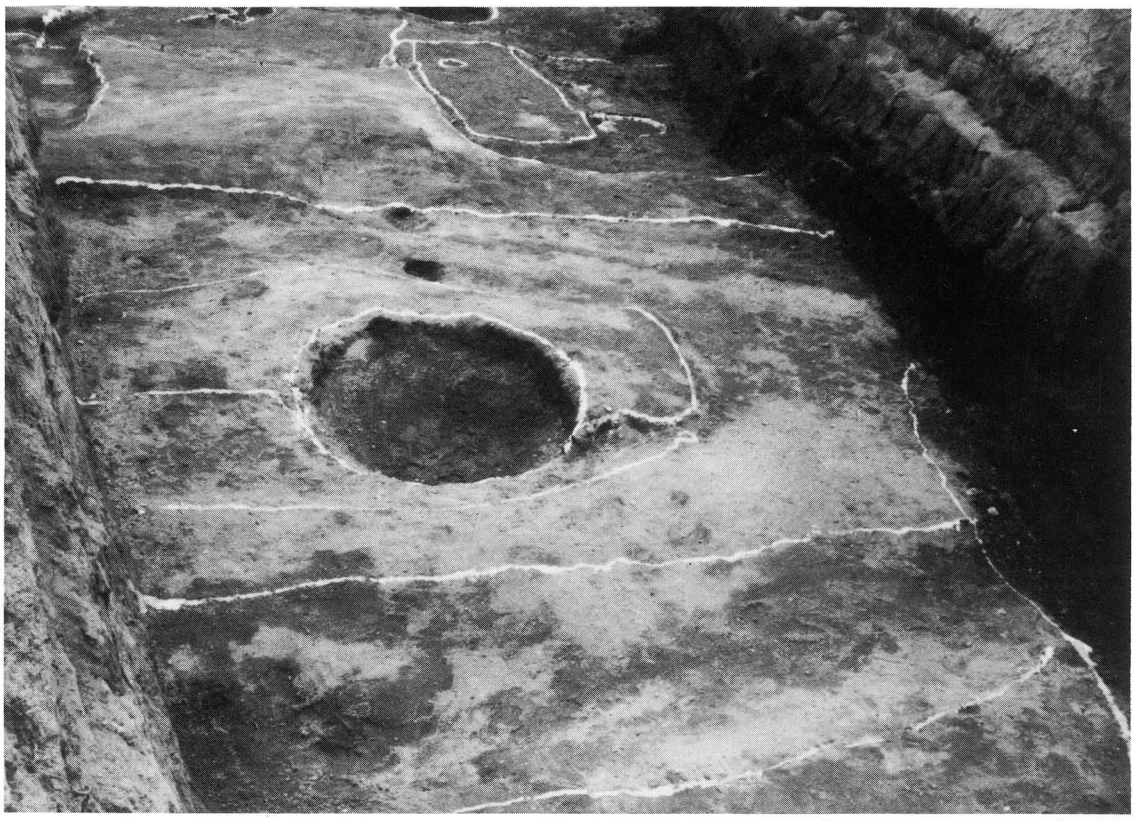
第３調査地ＳＢ－６・７（南より）

第１調査地ＳＢ－１（東より）

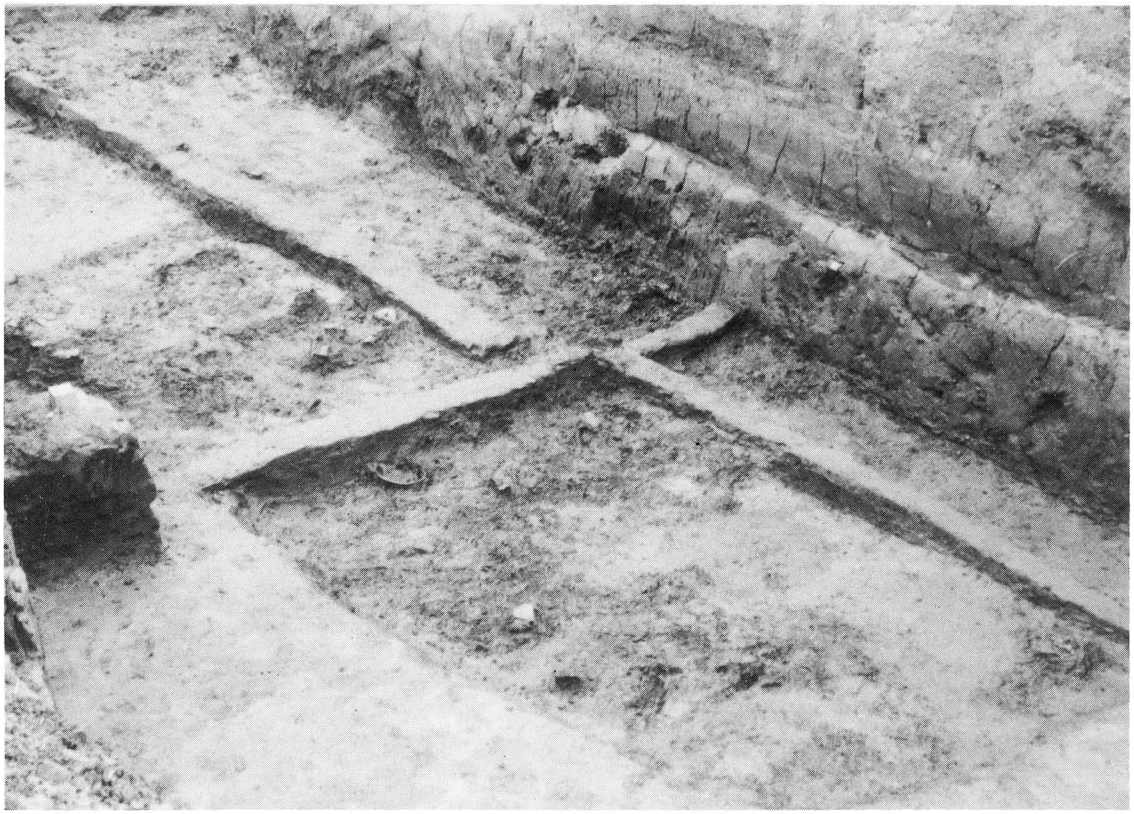


第１調査地ＳＢ－１（北東より）

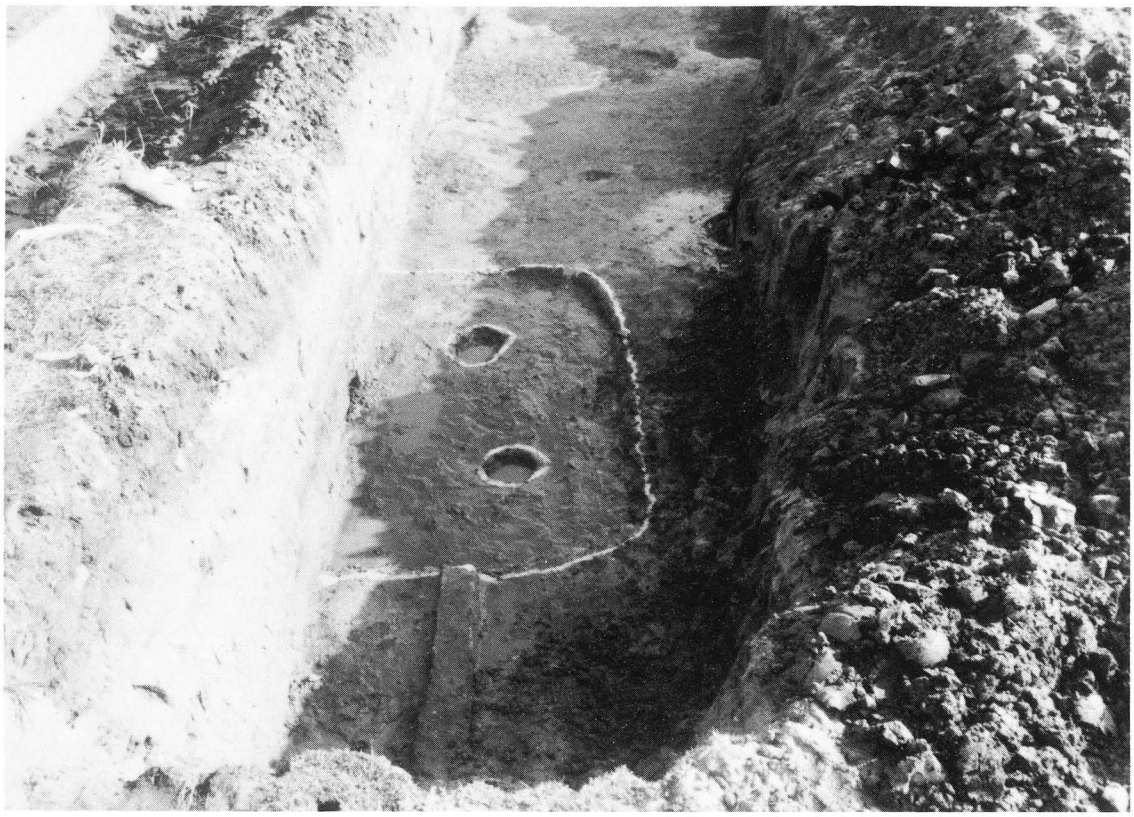
第１調査地ＳＢ－２（北より）



第１調査地ＳＫ－４（北より）



第３調査地ＳＢ－８（南西より）



第３調査地ＳＢ－８（北より）

第１調査地ＳＢ－１遺物出土状況

第１調査地遺物出土状況

第１調査地遺物出土状況

第１調査地遺物出土状況

第２調査地自然堤防突端

第２調査地ＳＫ－６

第 2 調査地遺物出土状況

第 2 調査地遺物出土状況

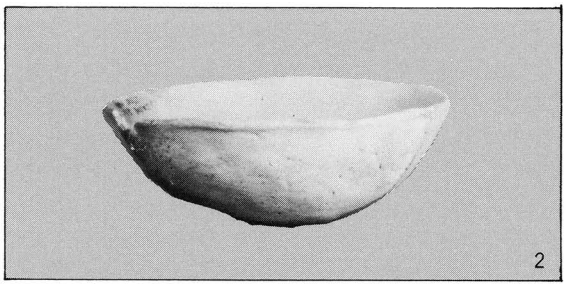
第３調査地ＳＢ－６遺物出土状況

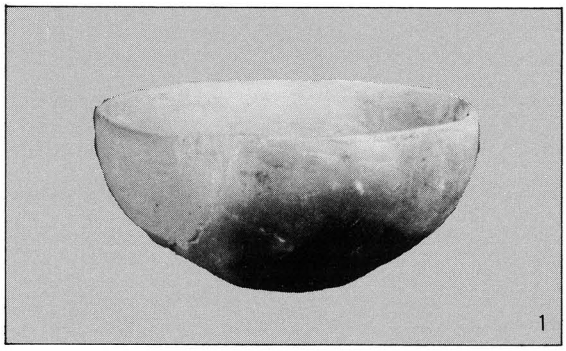
第３調査地ＳＢ－７遺物出土状況

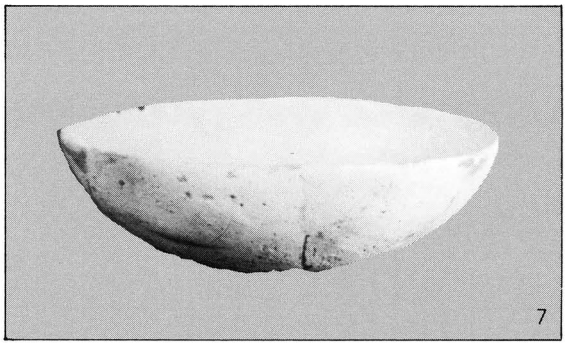
第３調査地ＳＢ－６検出状況（北より）

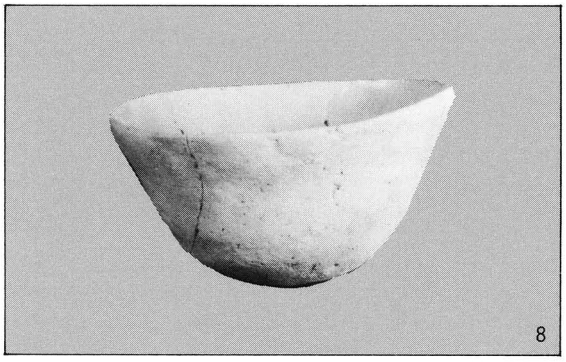
第３調査地ＳＢ－６・７遺物出土状況（北東より）

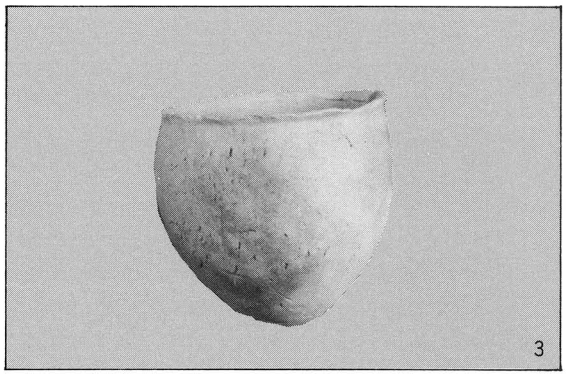
図版二十七　第1調査地出土の土器

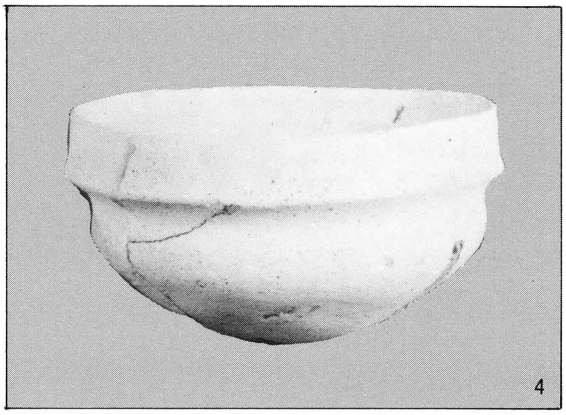


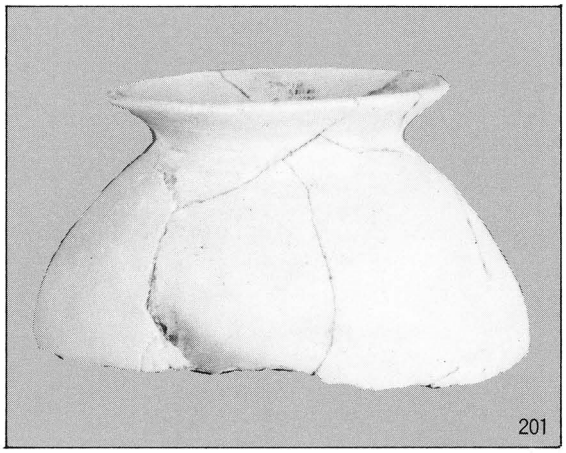


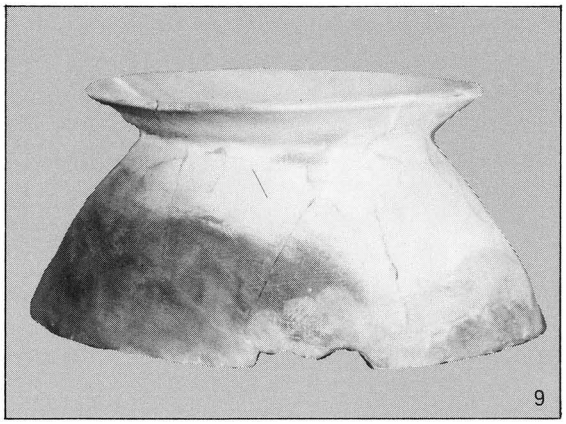






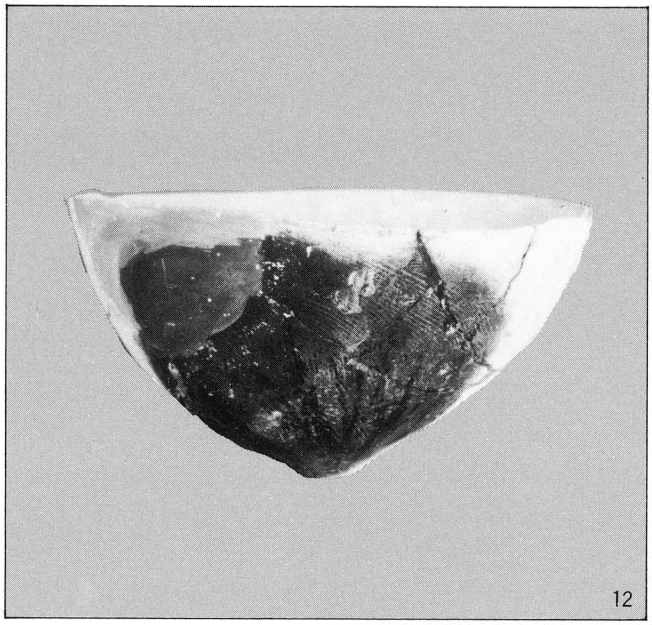


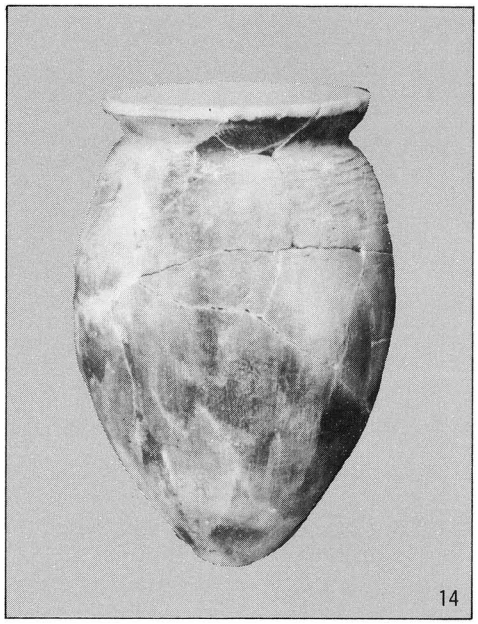


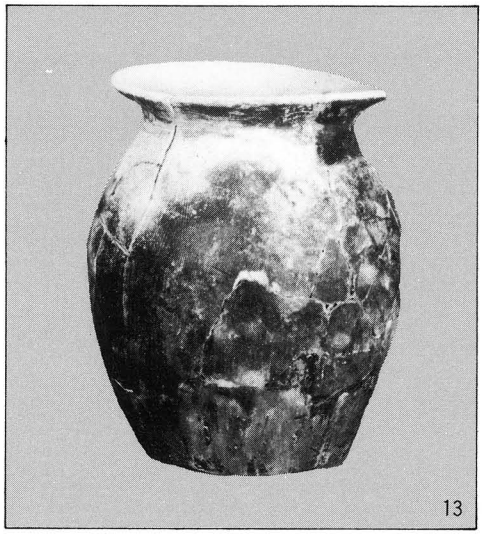


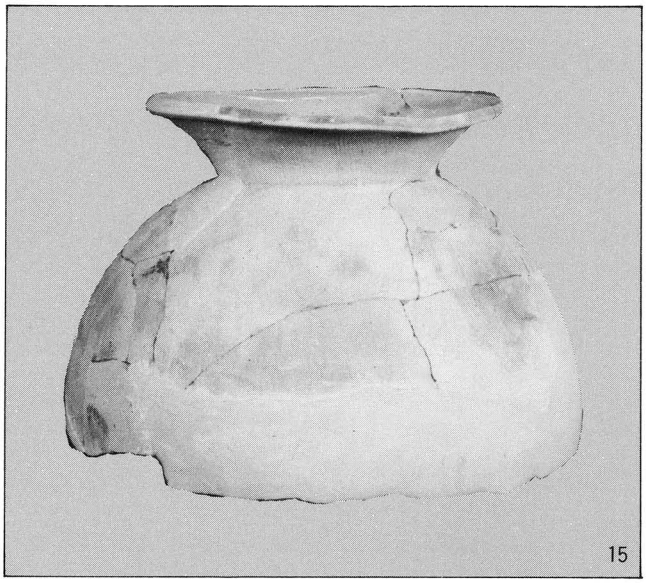
ＳＢ－１（１～４）、ＳＢ－２（６～９、201）

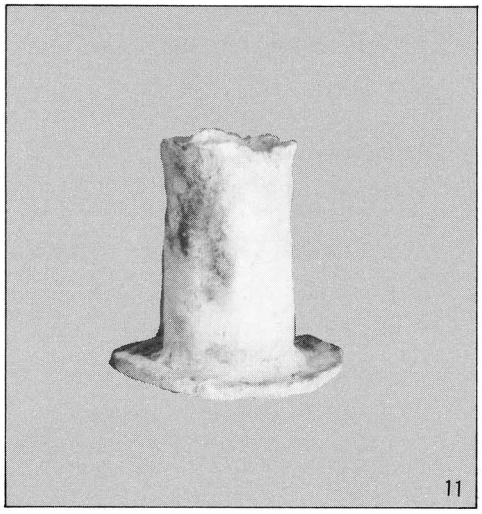
図版二十八　第1調査地出土の土器

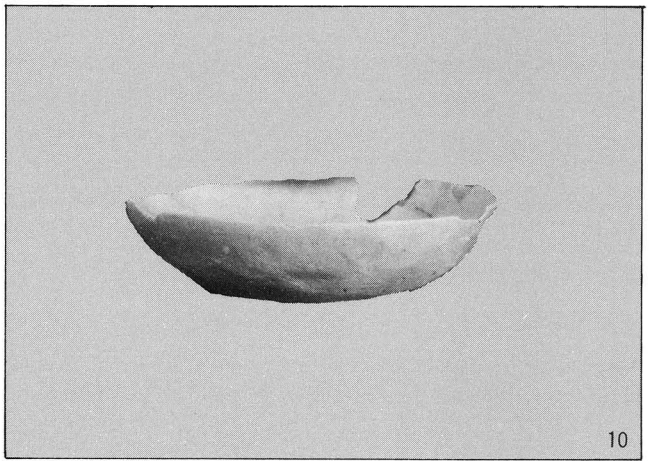




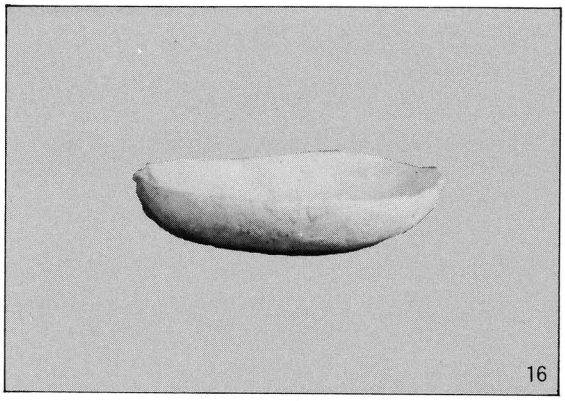


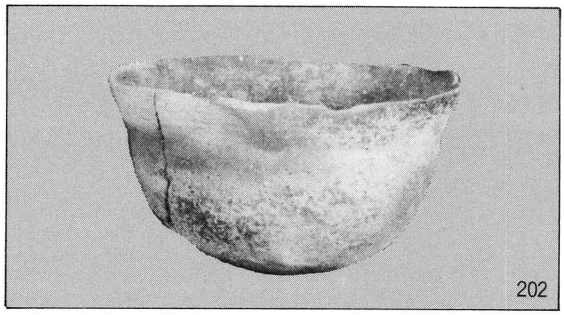


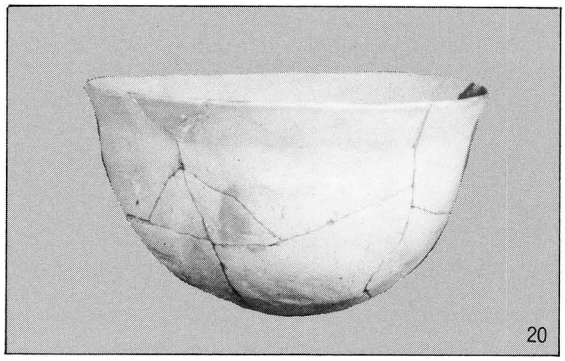


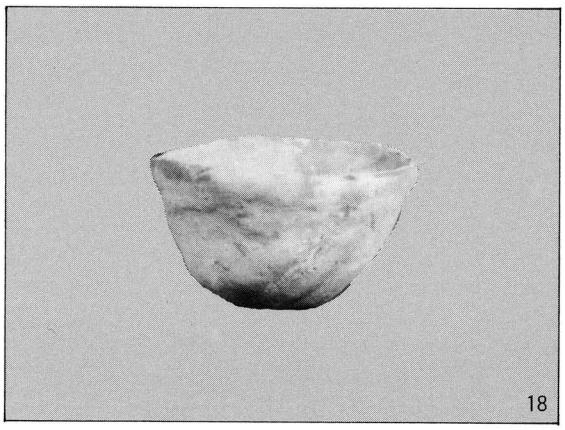


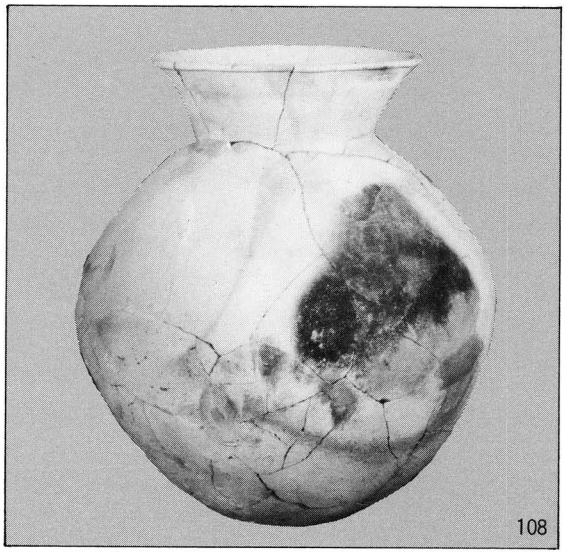
図版二十九　第1調査地出土の土器

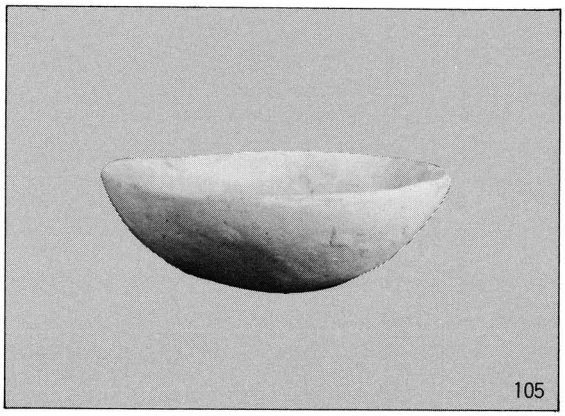




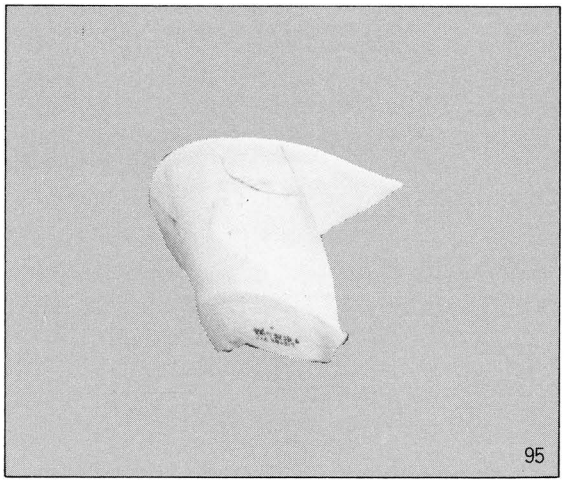


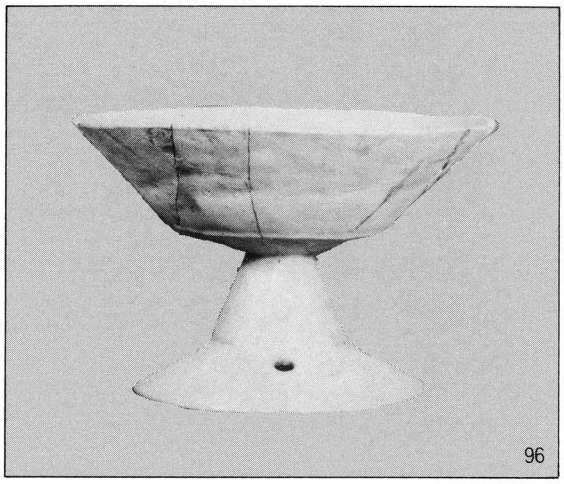




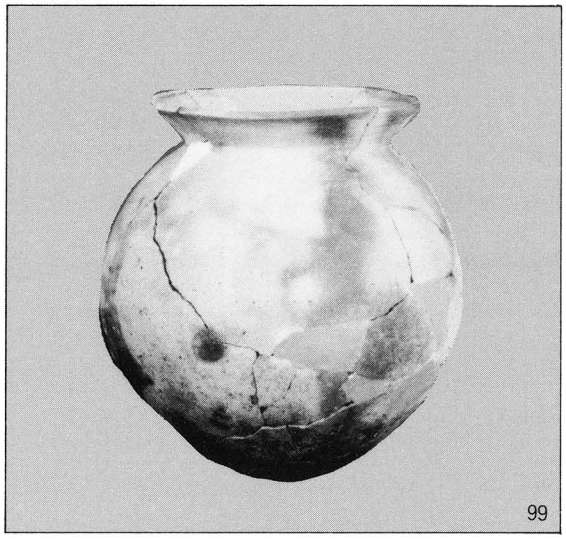


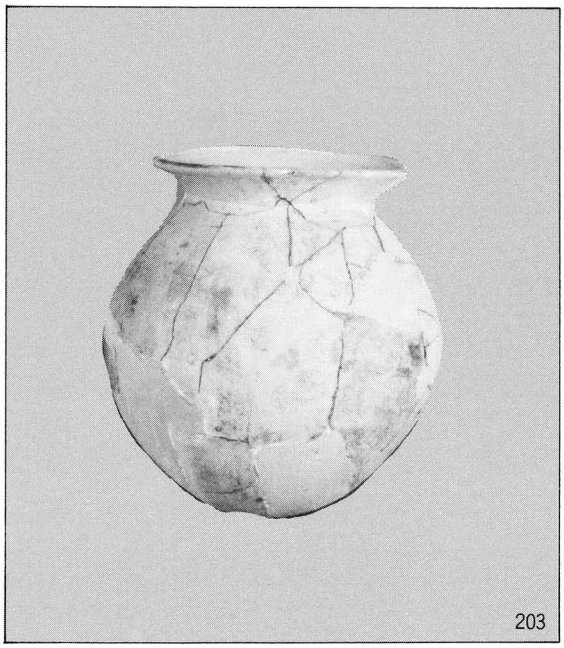
ＳＢ－４（16、17、20、22、39、202）、ＳＢ－５（105、108）

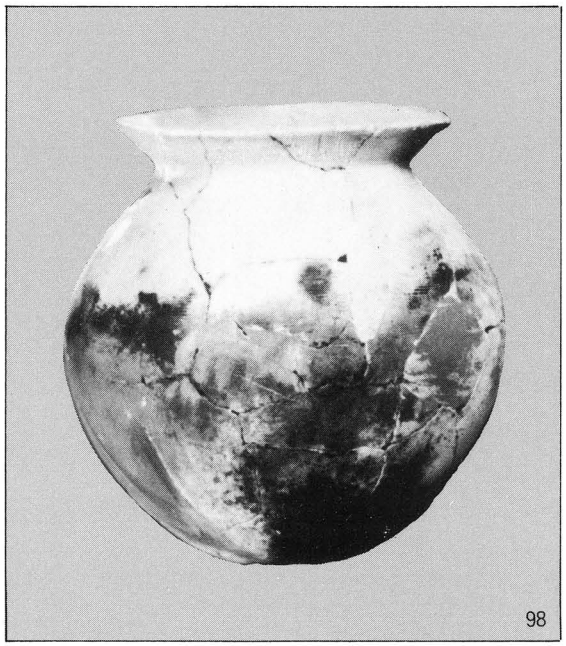

95


96

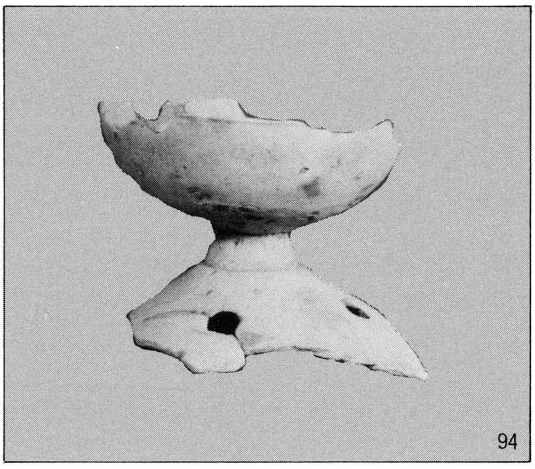
93

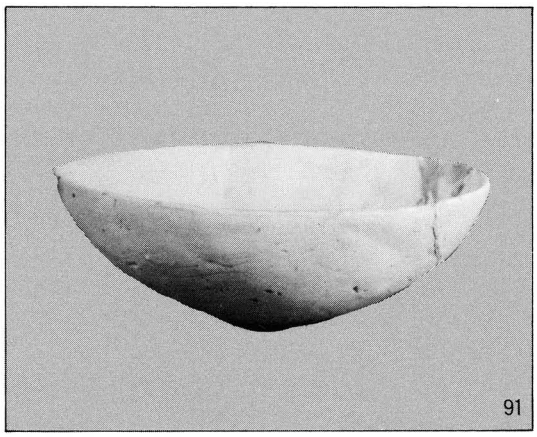

99

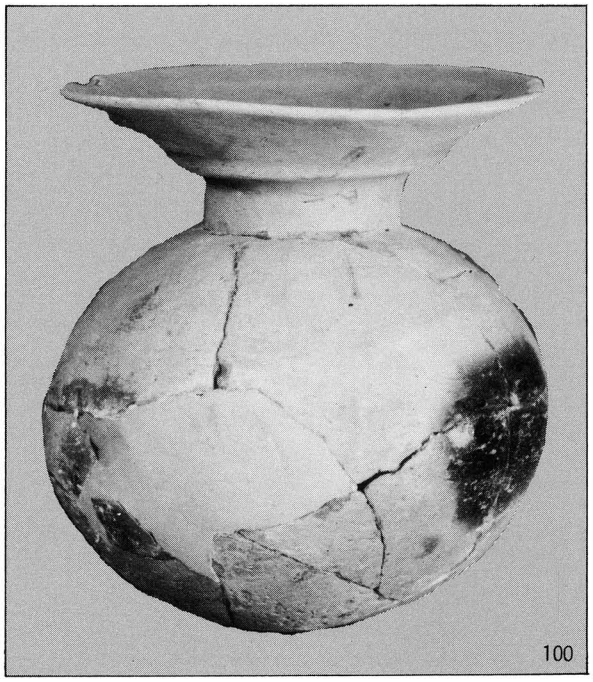

203


98

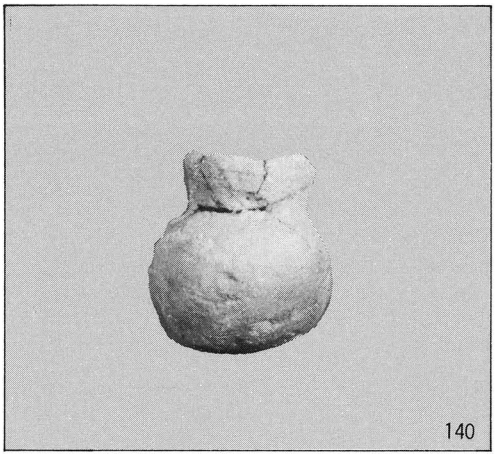
図版三十一　第3調査地出土の土器

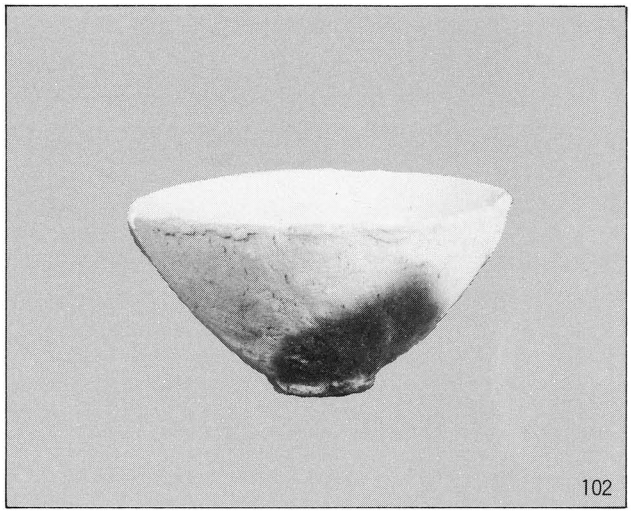


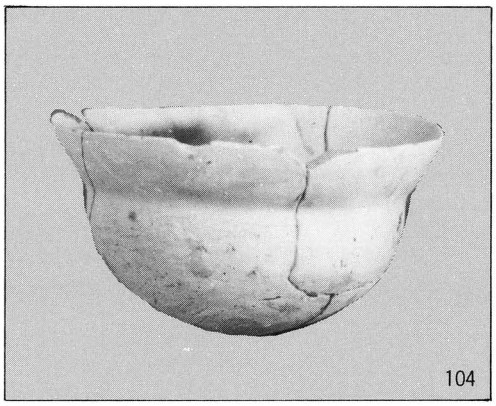


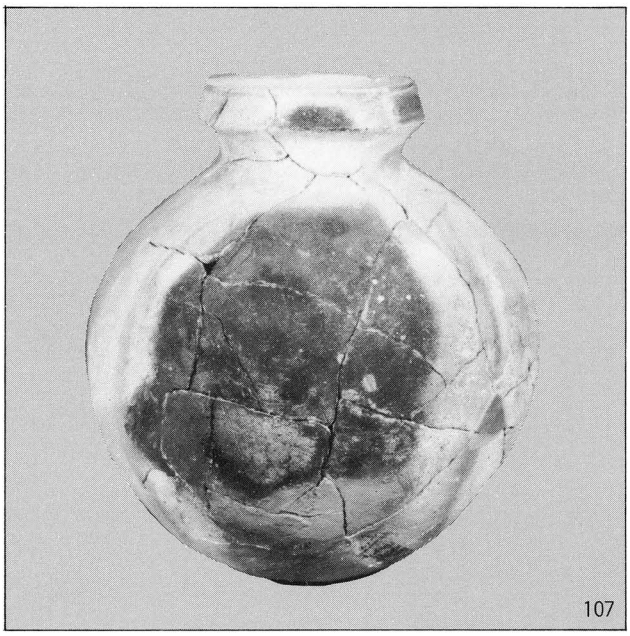


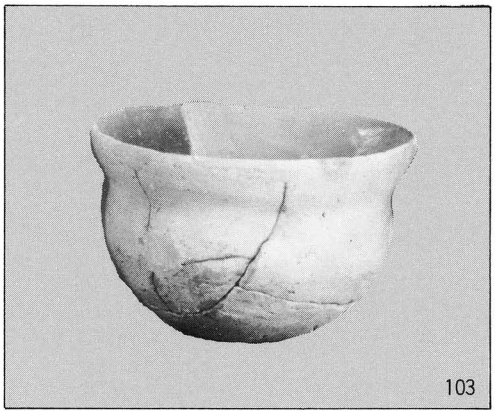
SB－6

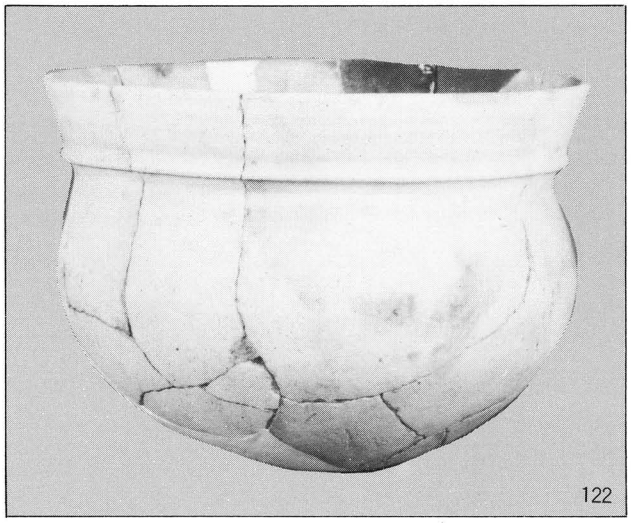


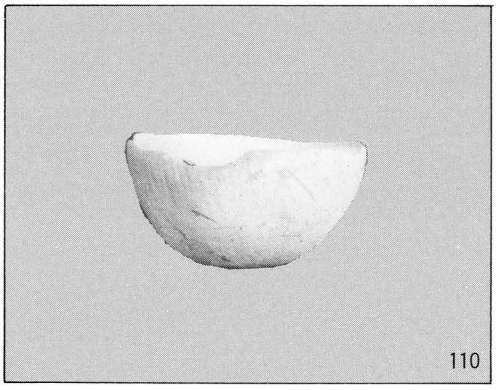






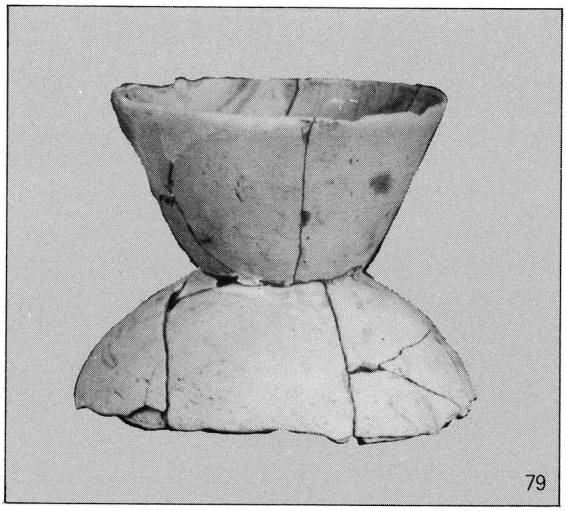


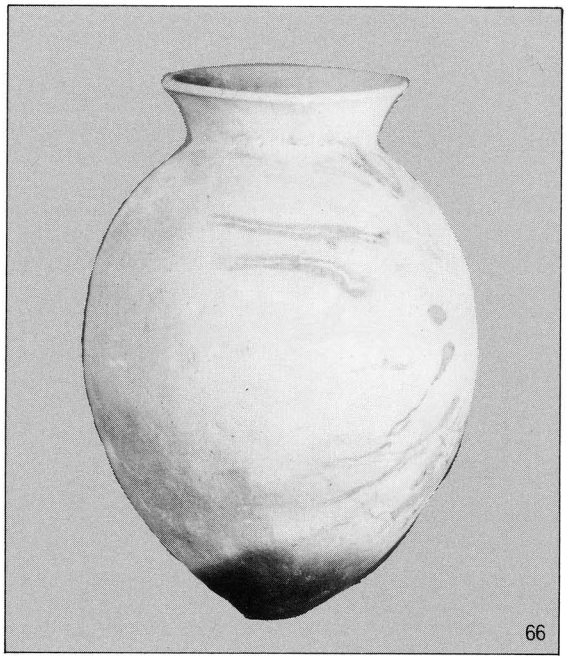


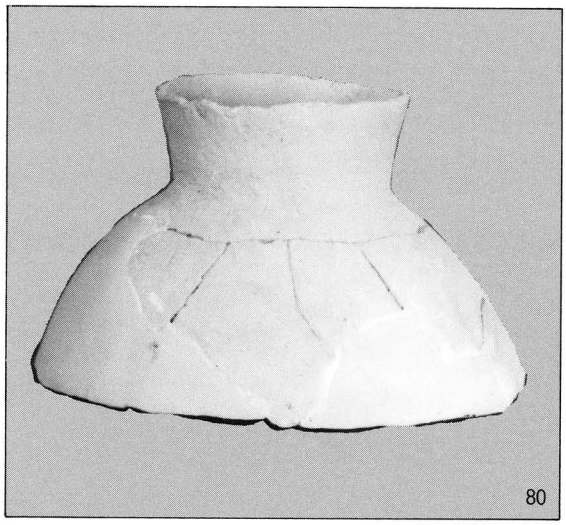


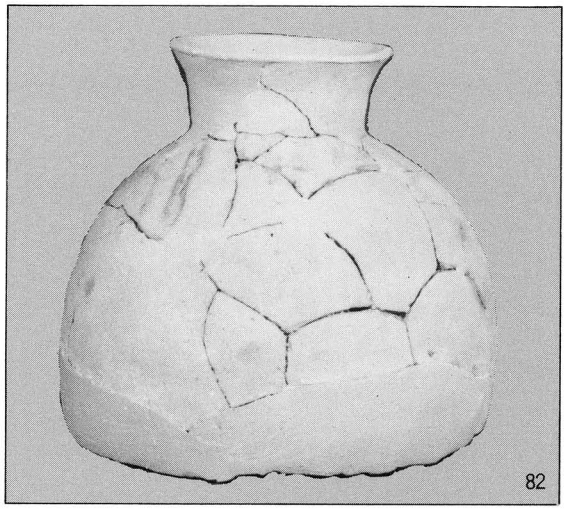
ＳＢ－７（102～104、107、140）、ＳＢ－８（110、122）

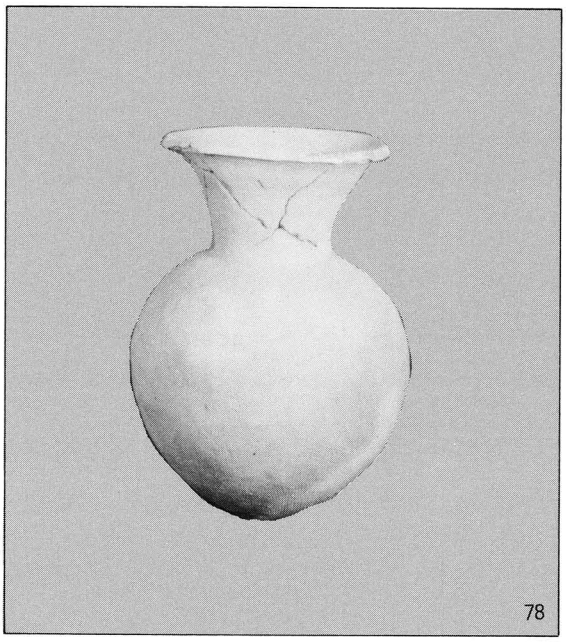
図版三十三　第1調査地出土の土器

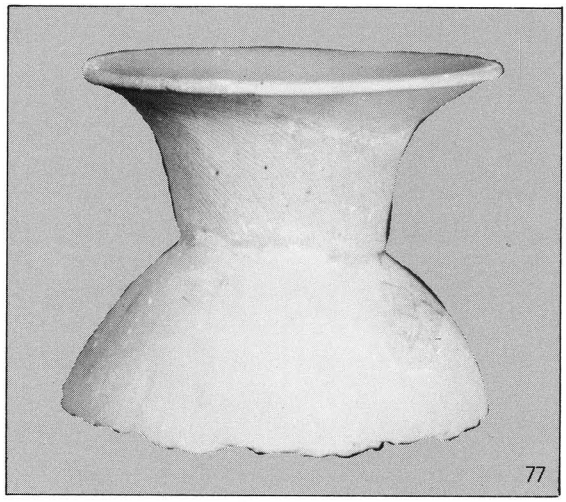

79


66


80

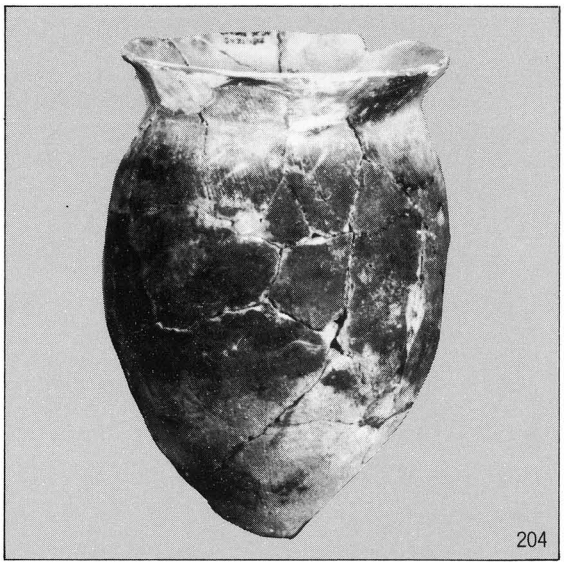

82


78


77

図版三十四　第1調査地出土の土器

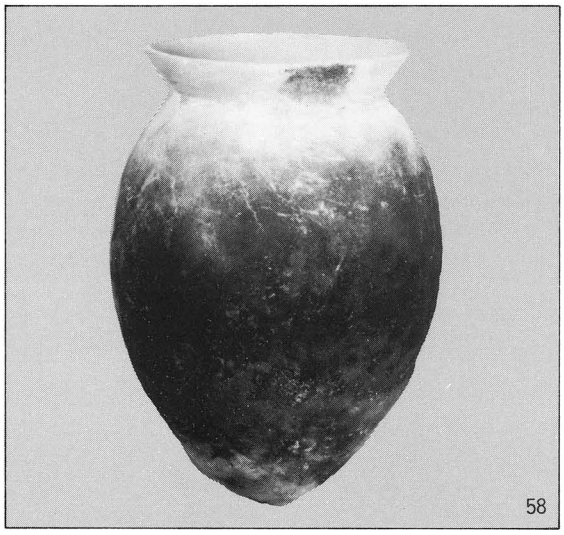
56


204

55

61

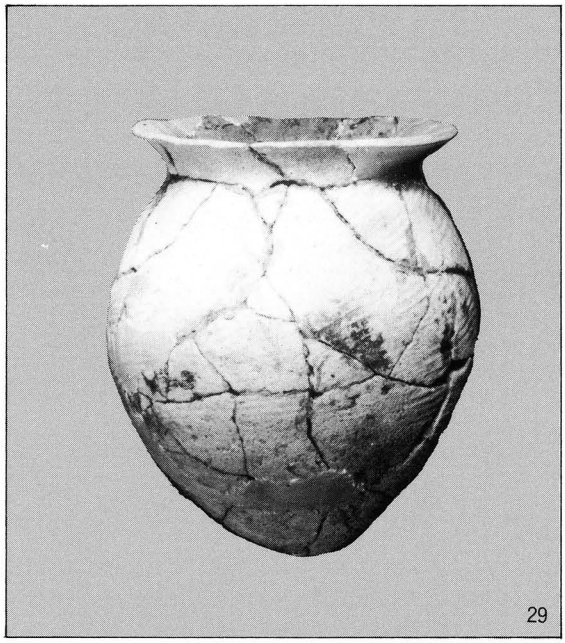
62

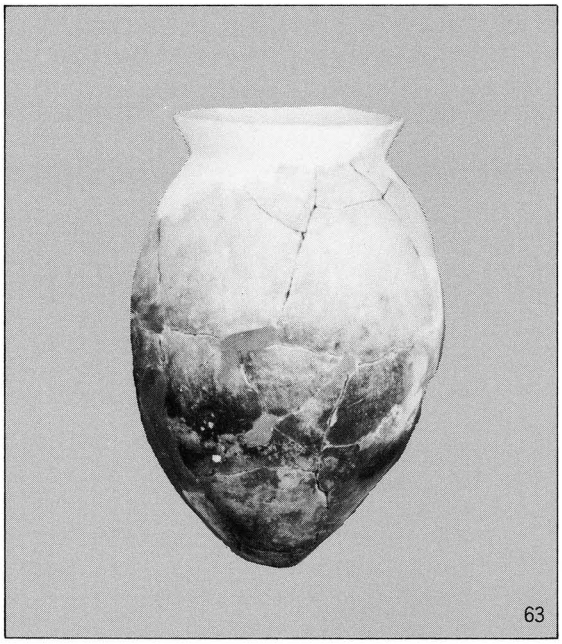

58

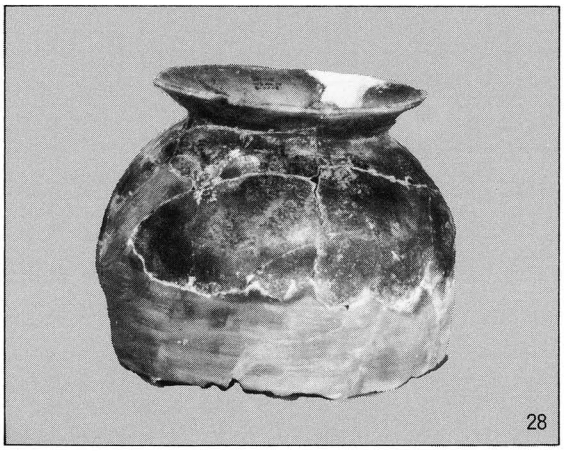
図版三十五　第1調査地出土の土器

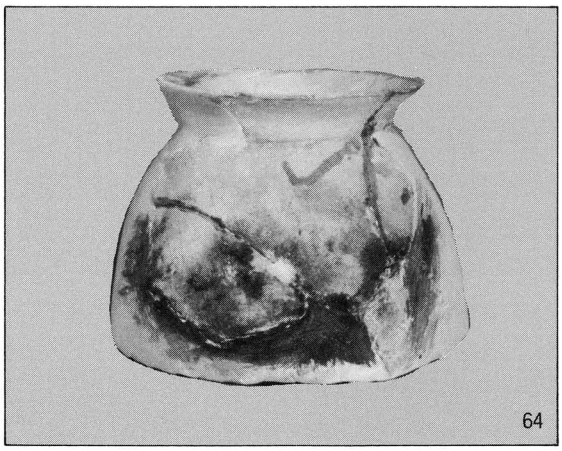
205

81

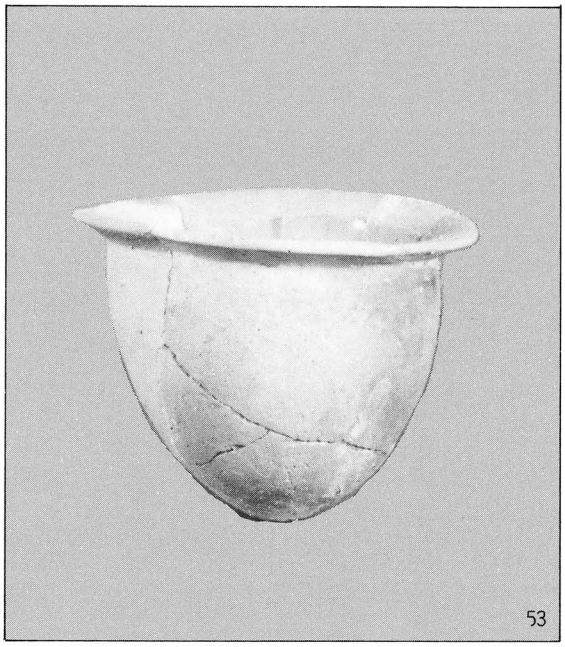

29

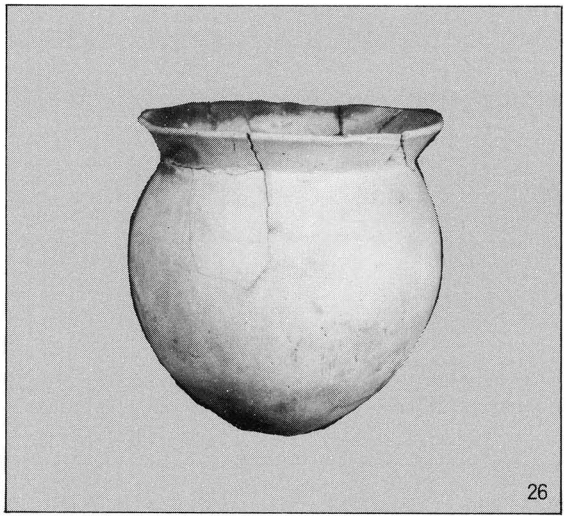

63

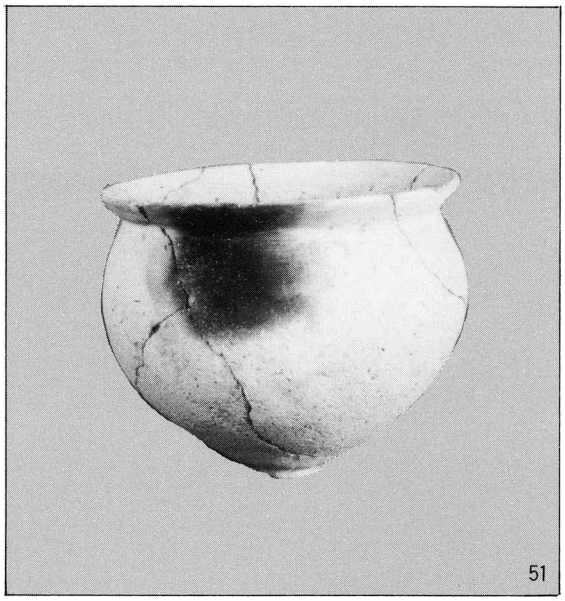

28

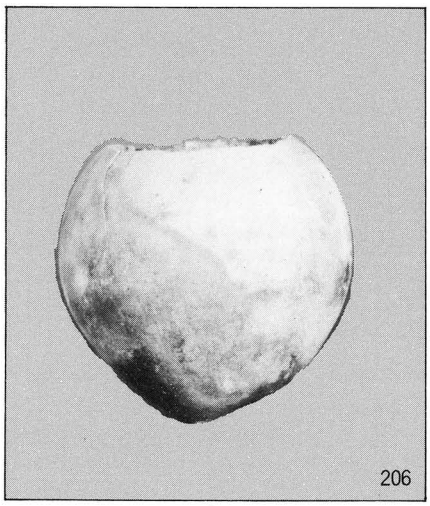

64

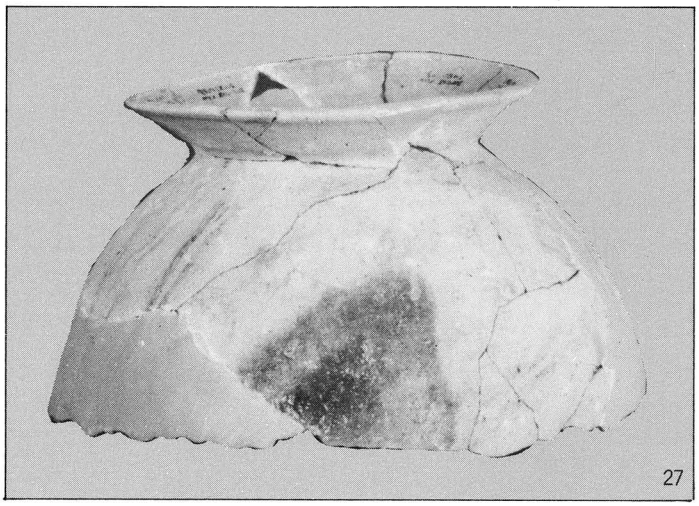
図版三十六　第1調査地出土の土器



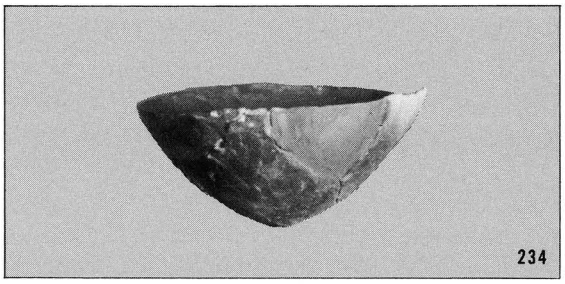


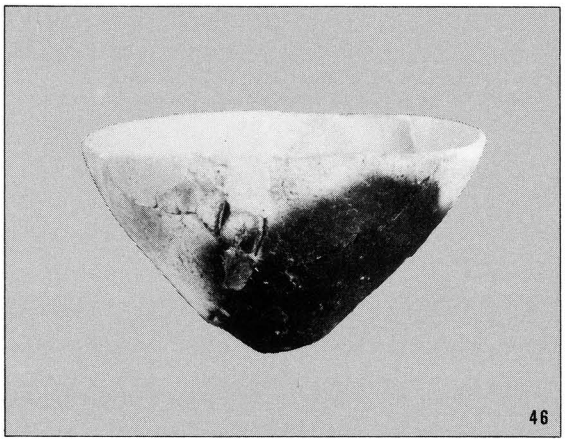


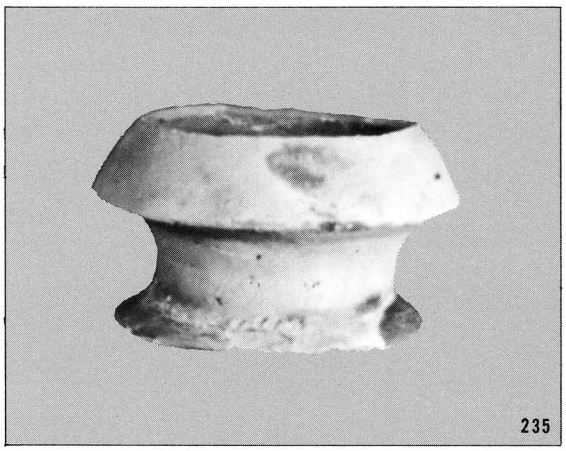


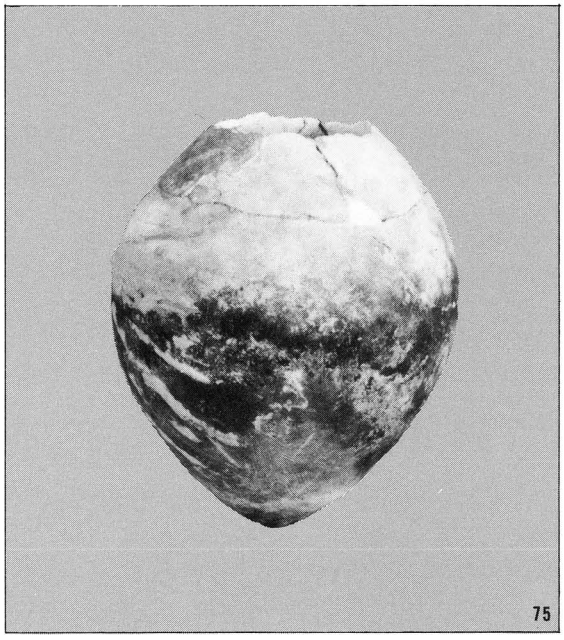


図版三十七　第1調査地出土の土器

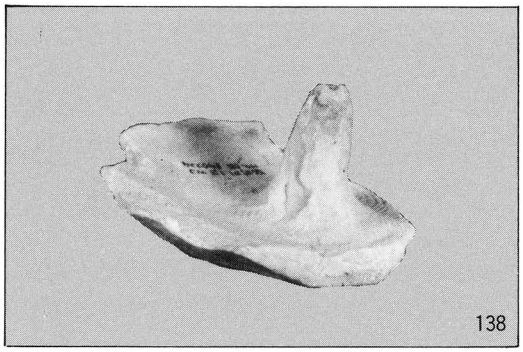


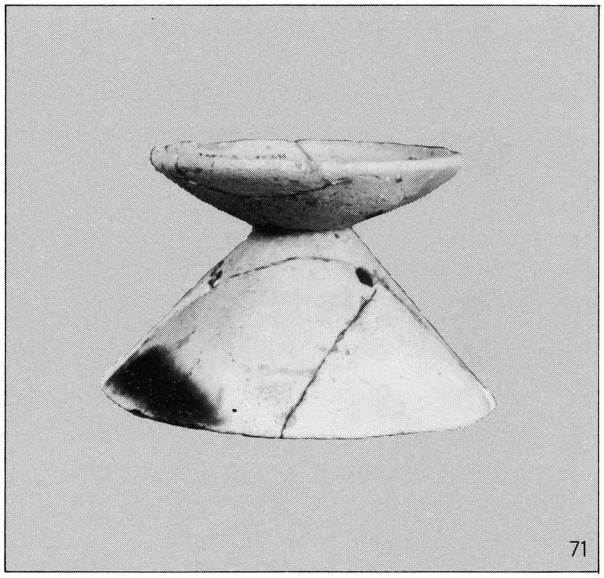


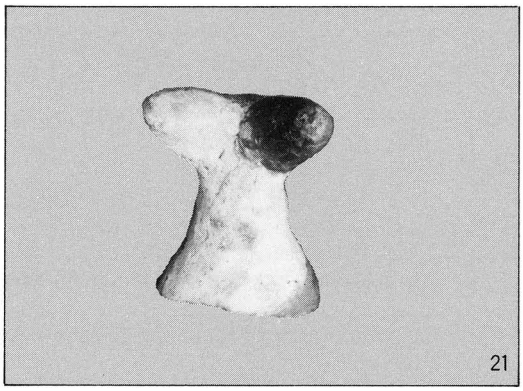


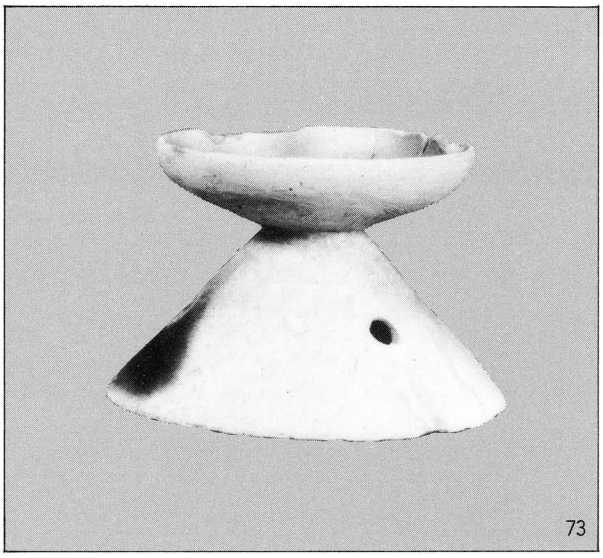


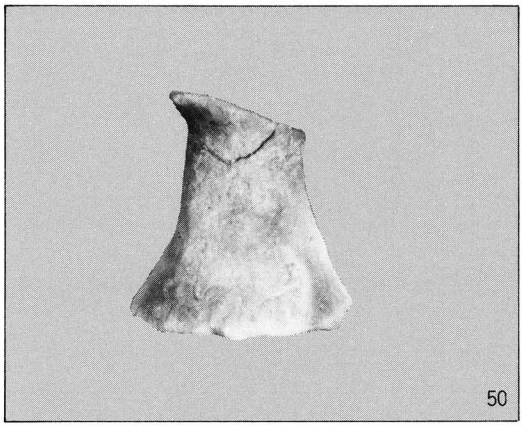
図版三十八　第1調査地出土の土器

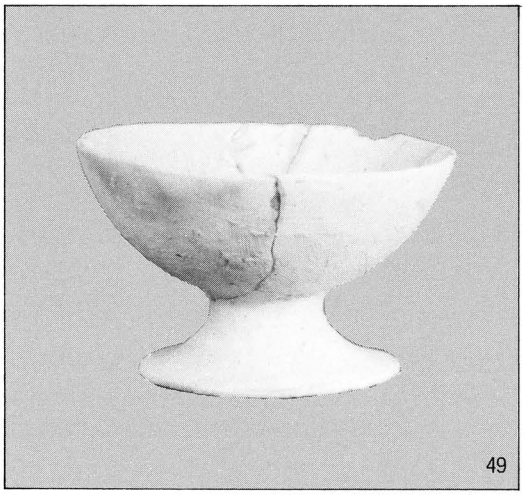


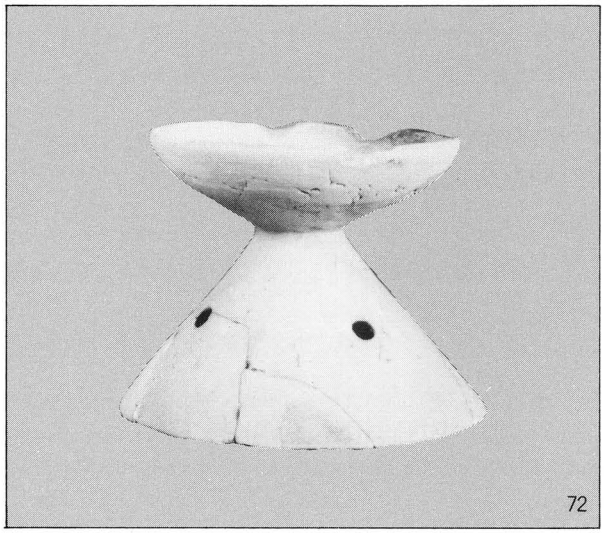




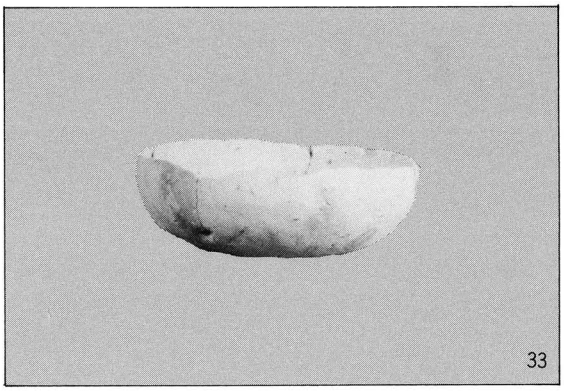


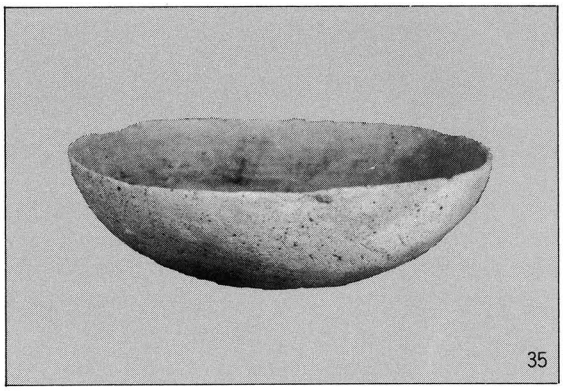


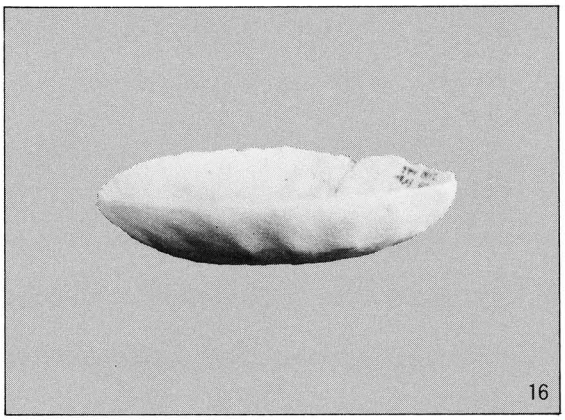


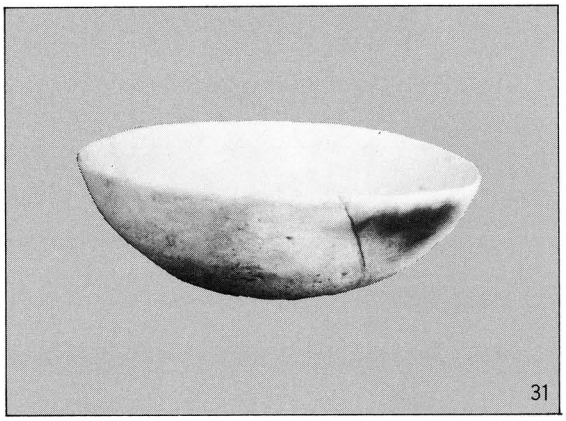


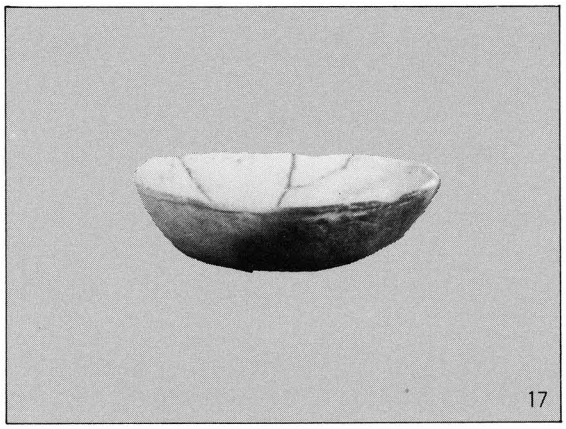
図版三十九　第1調査地出土の土器

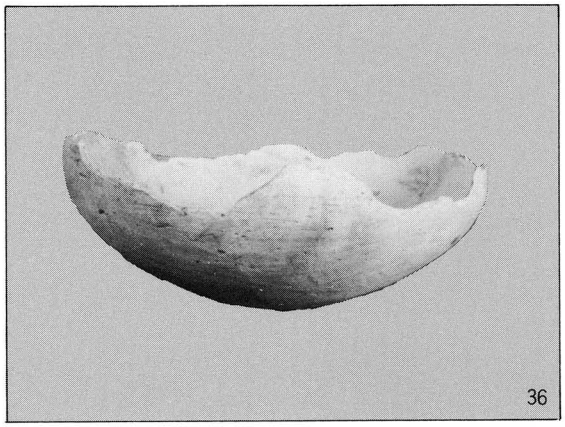

33

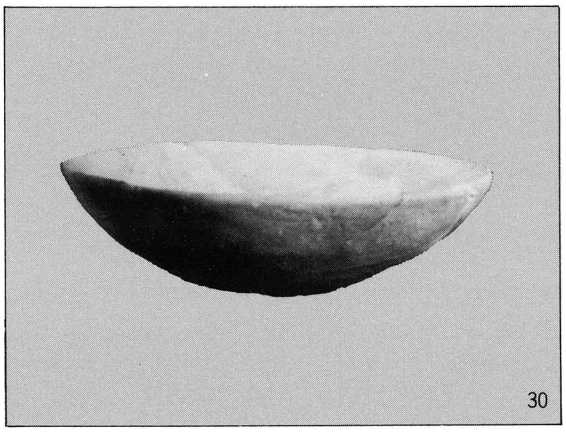

35

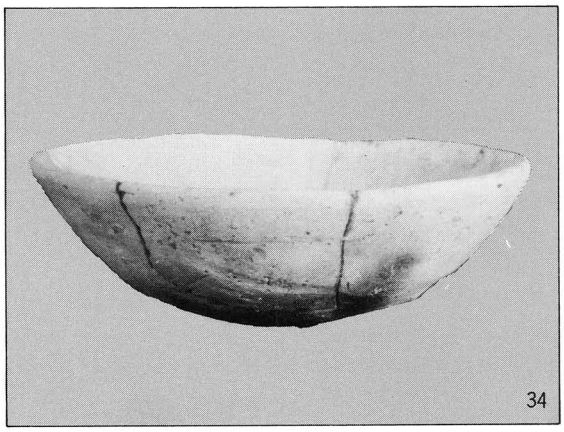

16


31

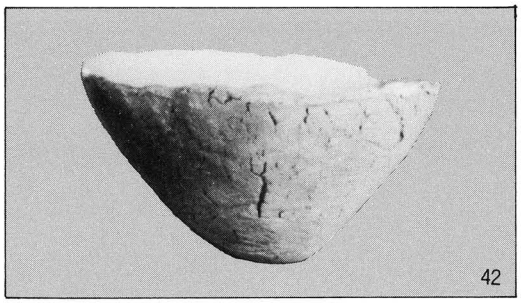

17

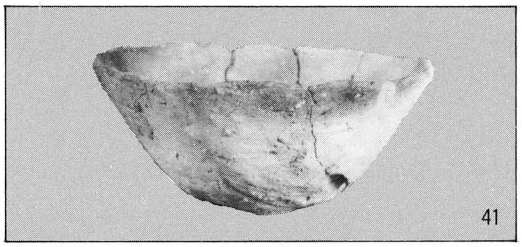

36

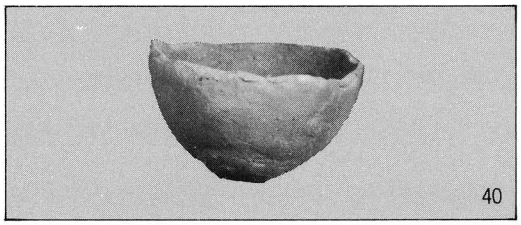

30

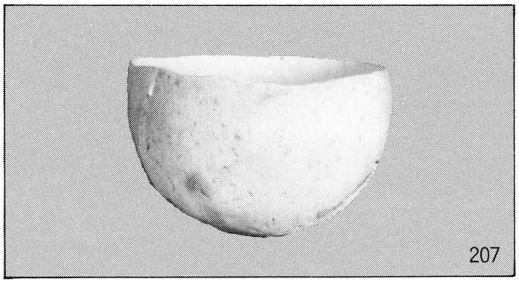

34

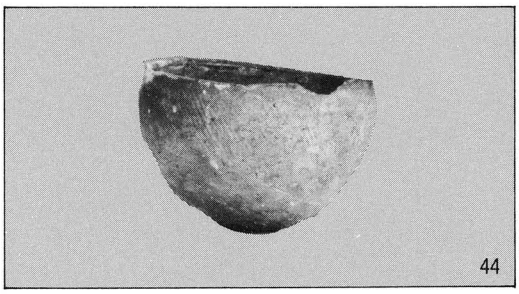
図版四十　第1調査地出土の土器

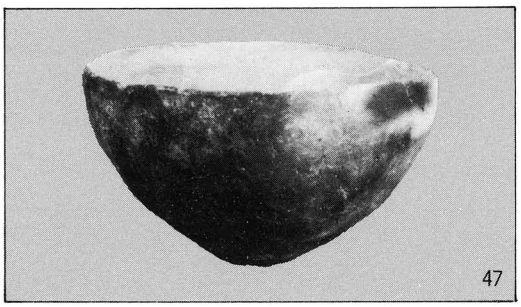

42

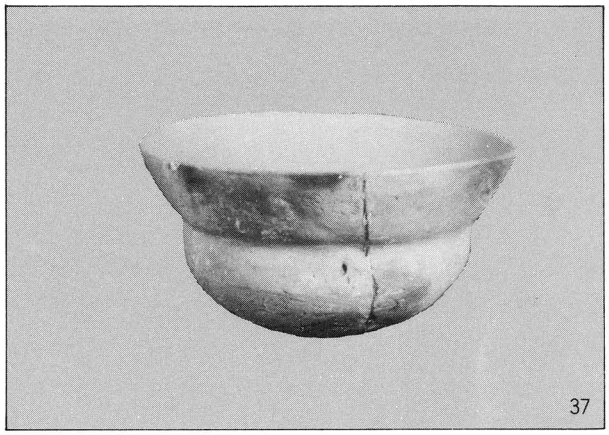

41

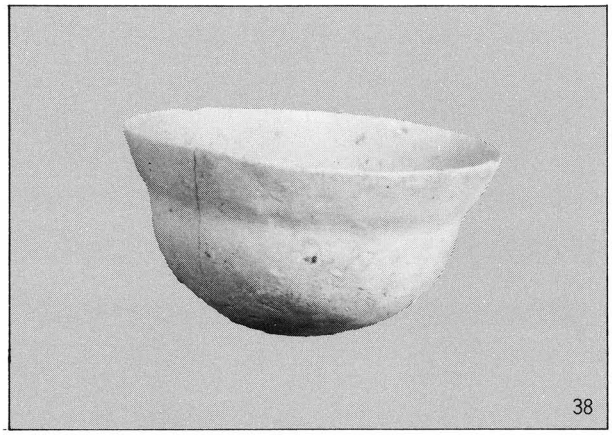

40


207

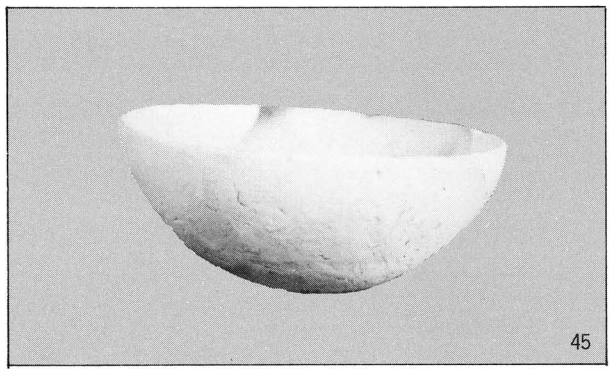

44


47

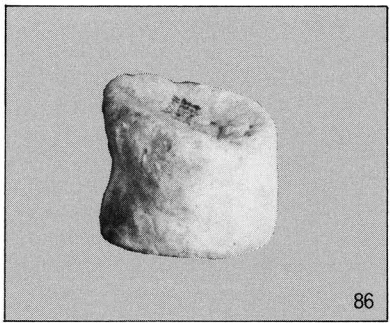

37

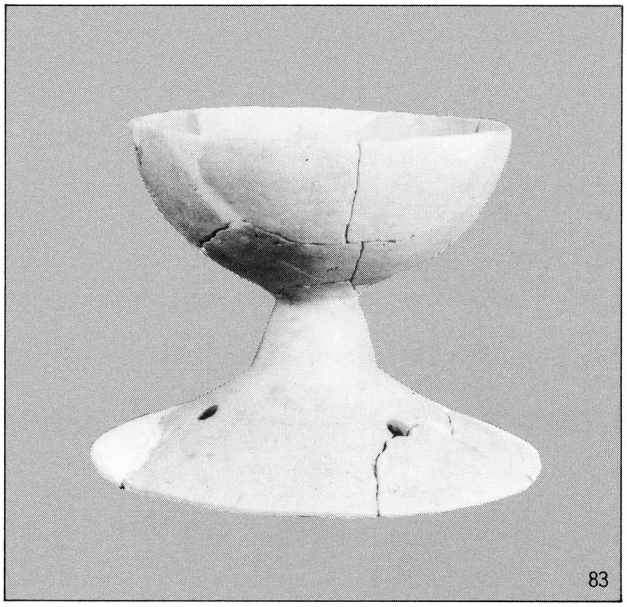

38

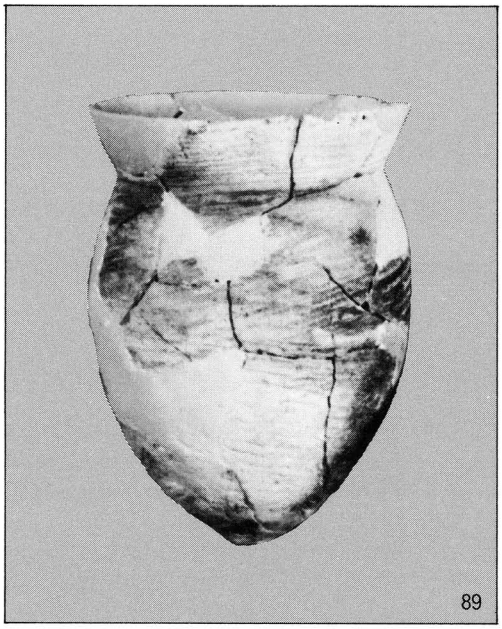
39

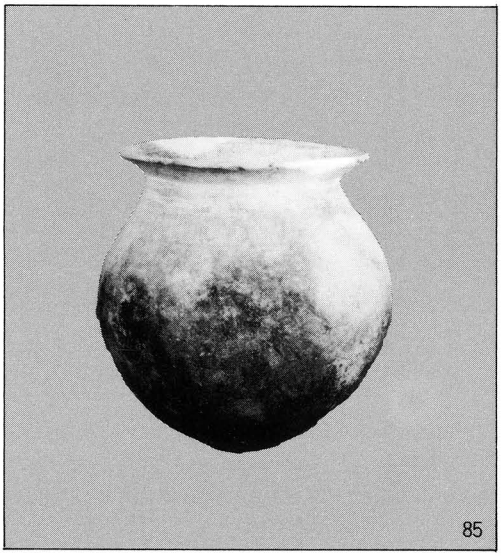

45

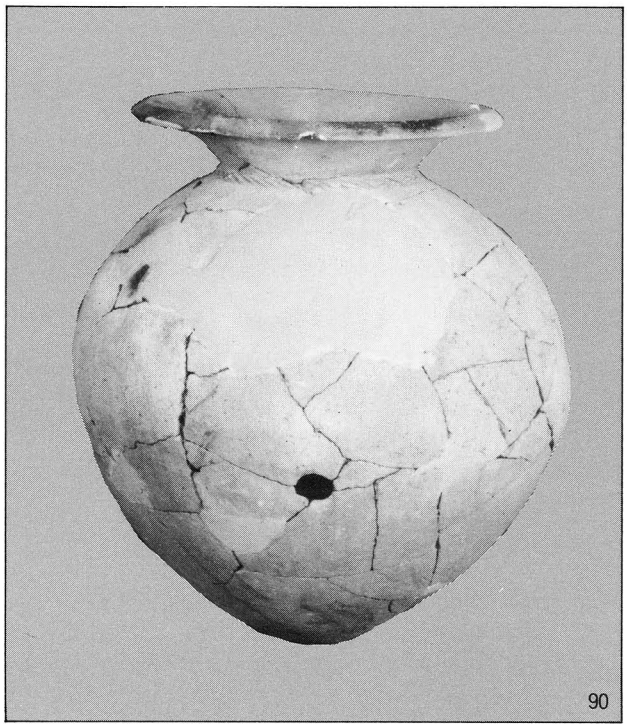
208


86


83

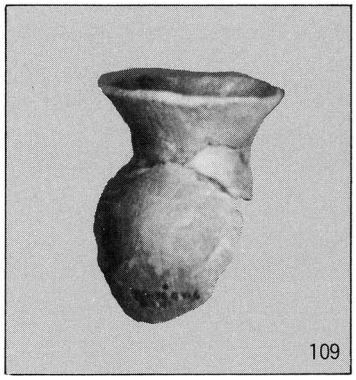

89

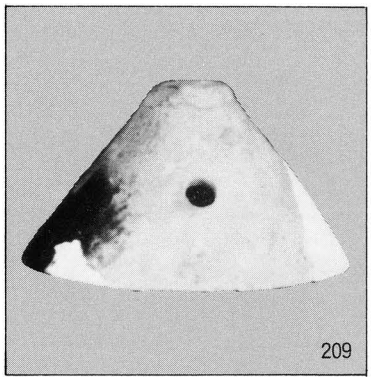

85

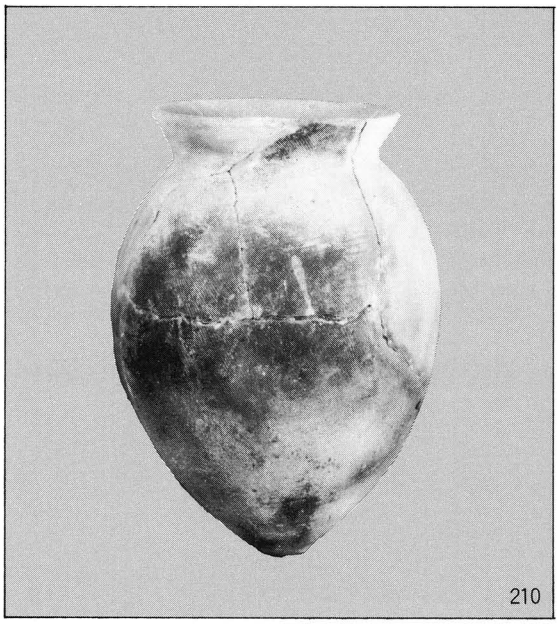

90

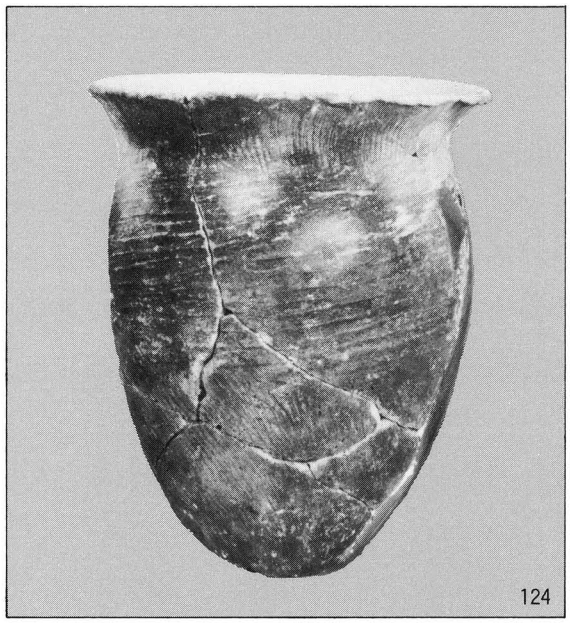
SK－6（83、85）

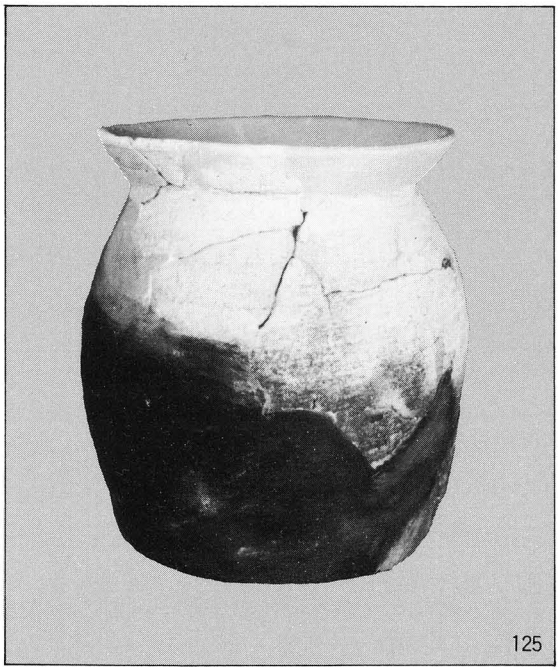
図版四十二　第3調査地出土の土器

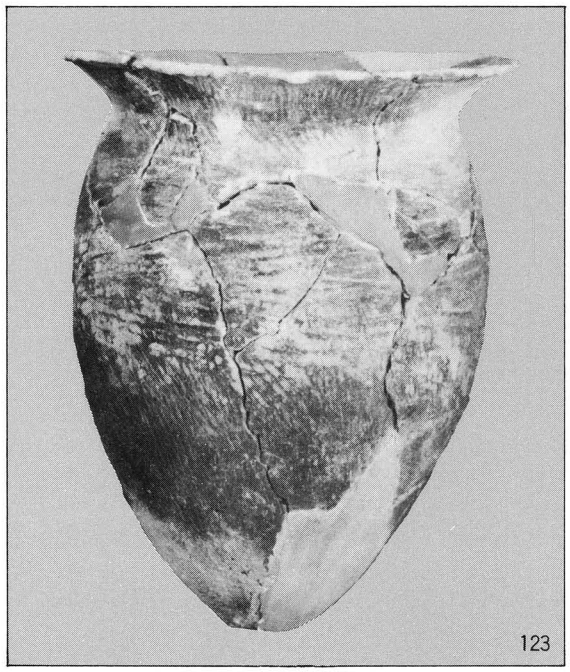






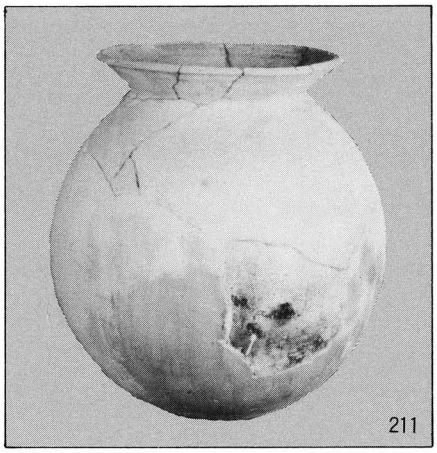


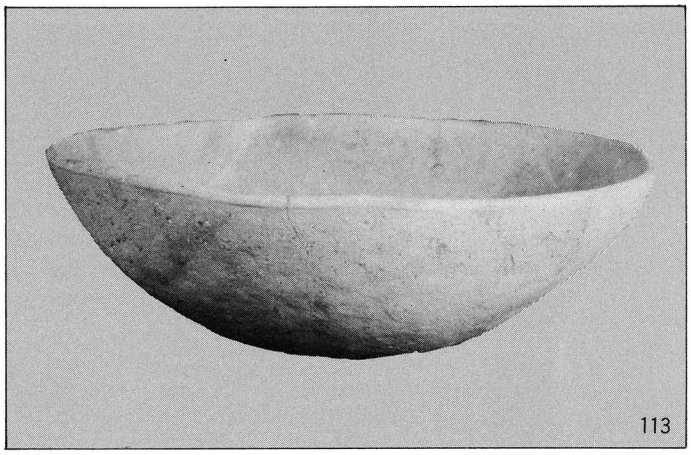


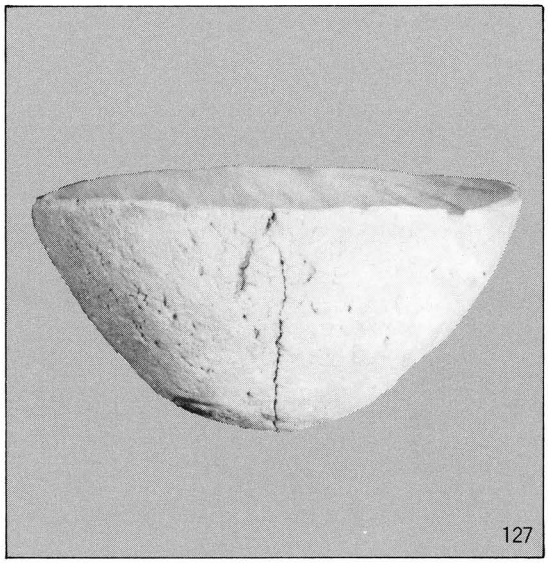


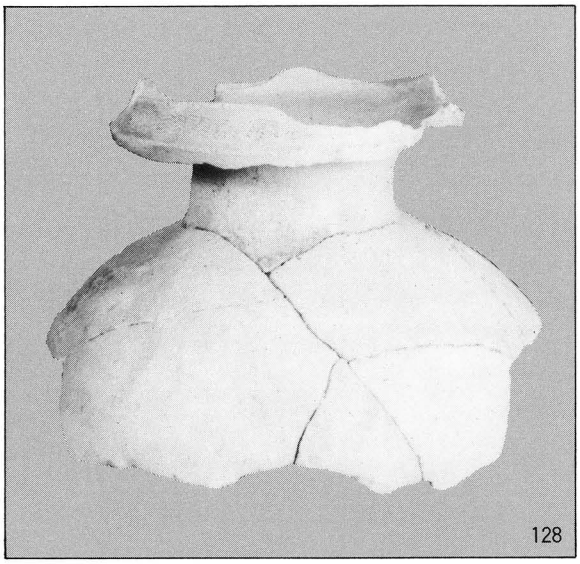
ＳＫ－７（123～125、207、208）

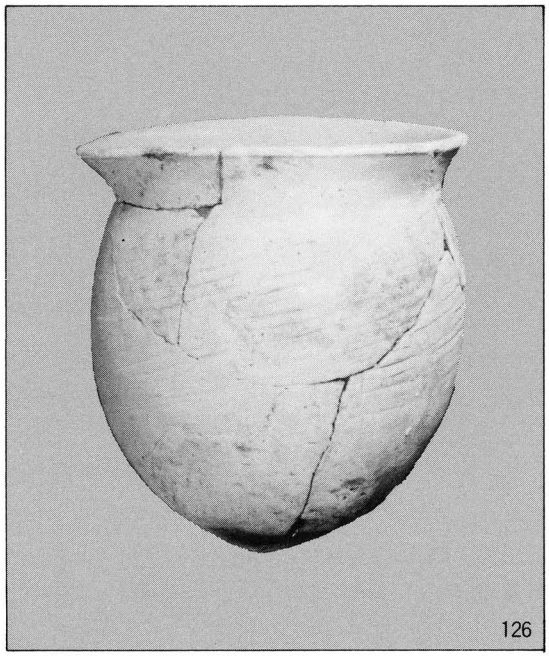
図版四十三　第3調査地出土の土器

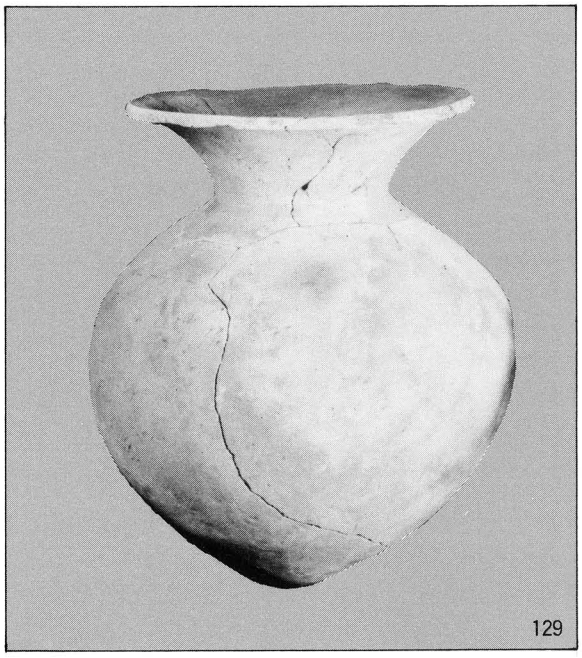

211


113


127

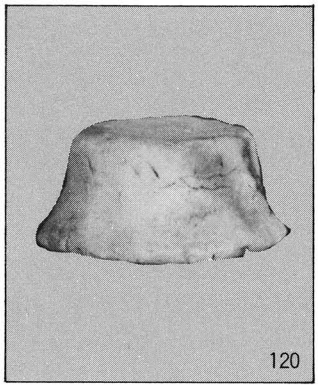

128

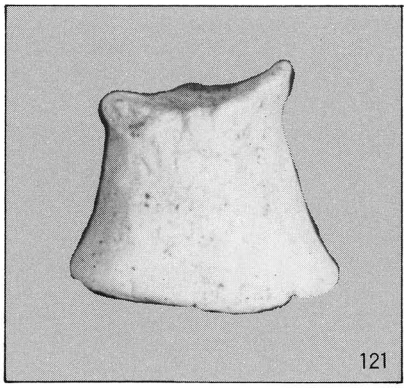

126

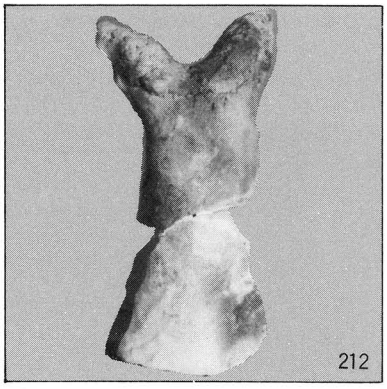

129

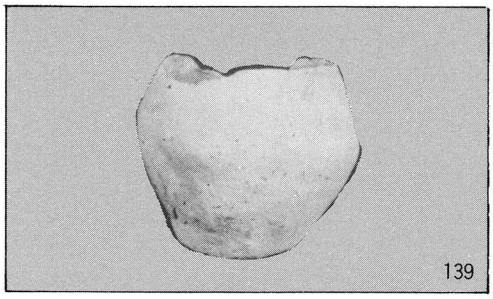
ＳＫ－７（126～129）

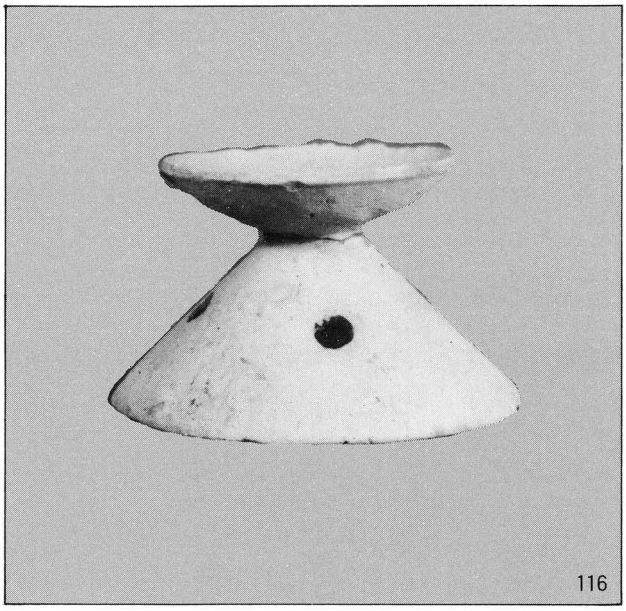
図版四十四　第3調査地出土の土器

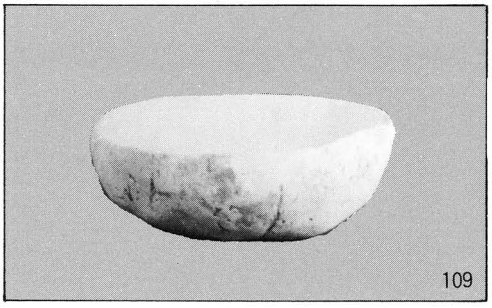

120

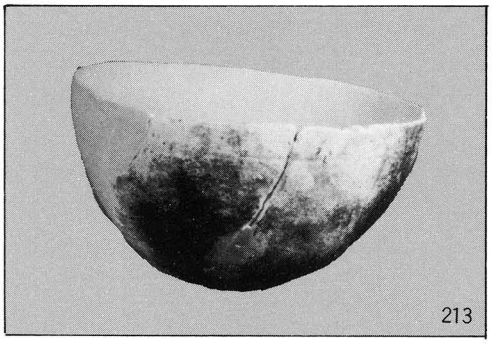

121

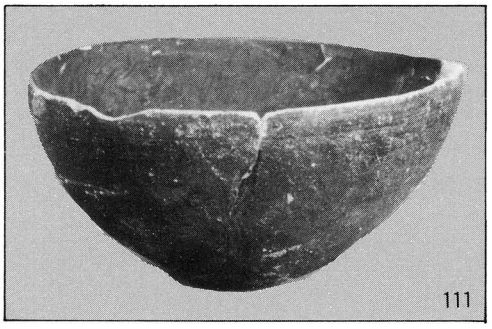

212

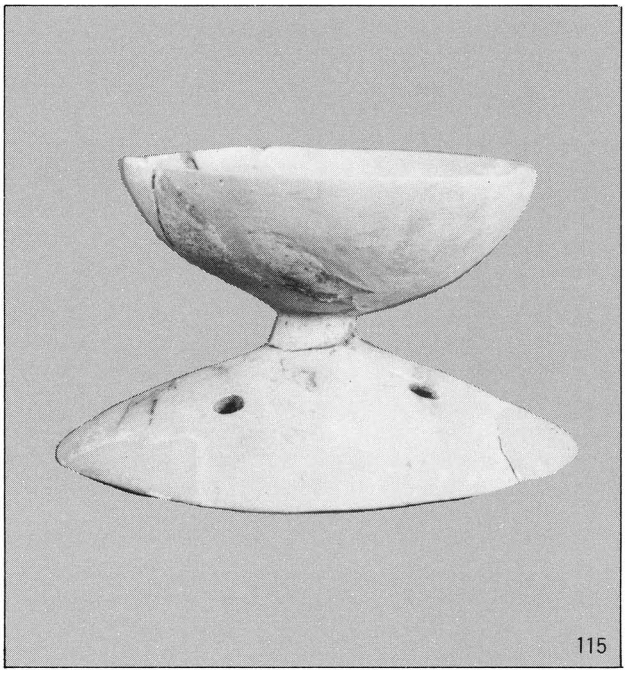

139


116

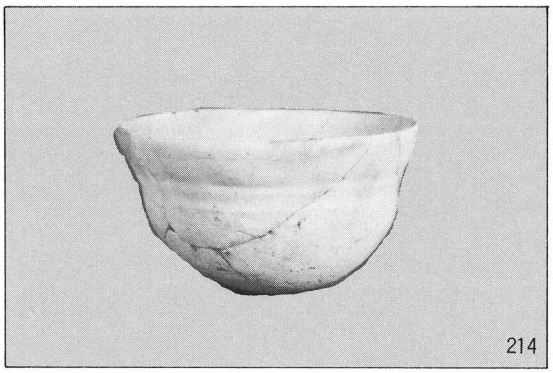

109

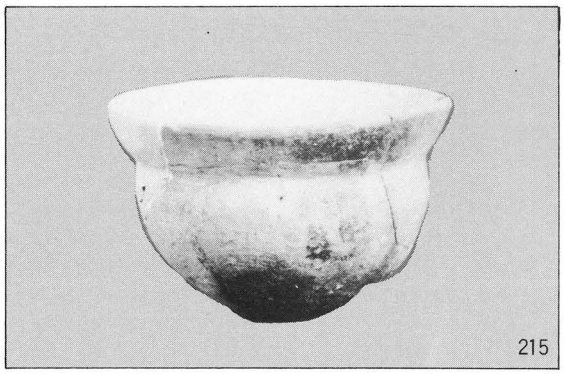

213

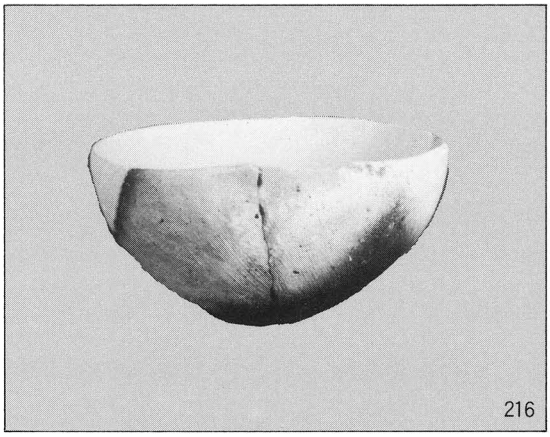

111

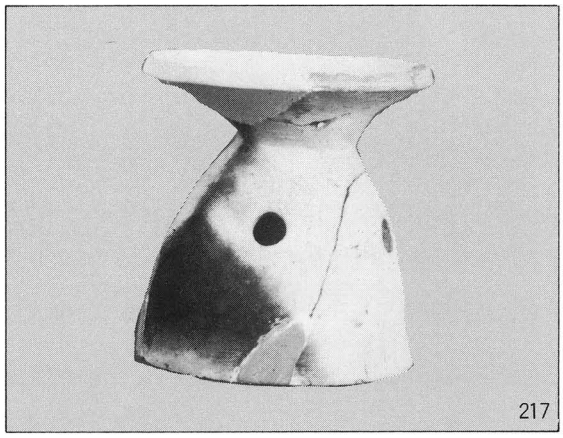

115

図版四十五　津田第Ⅰ地区出土の土器

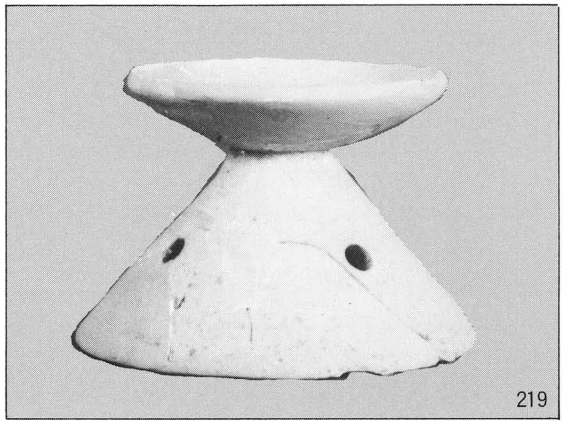

214

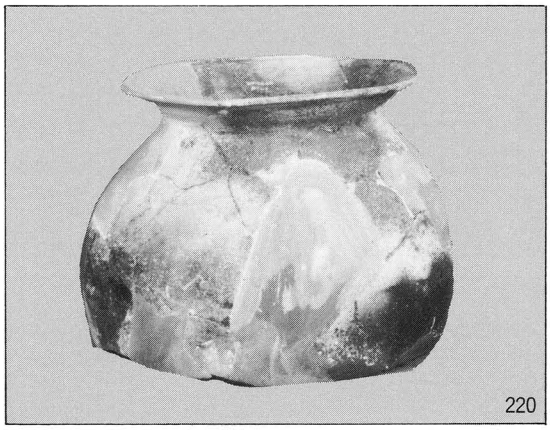

215

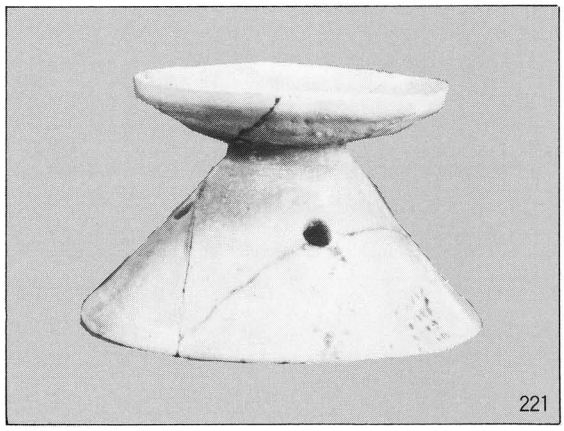

216


217

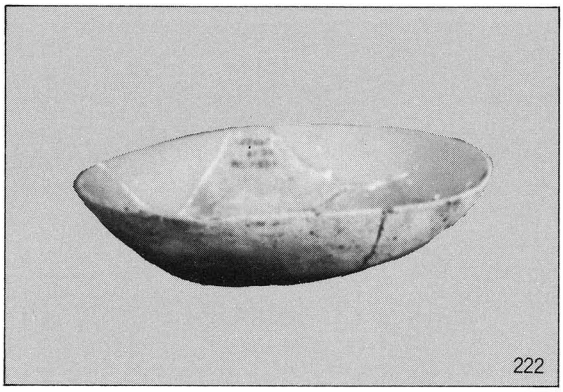
218

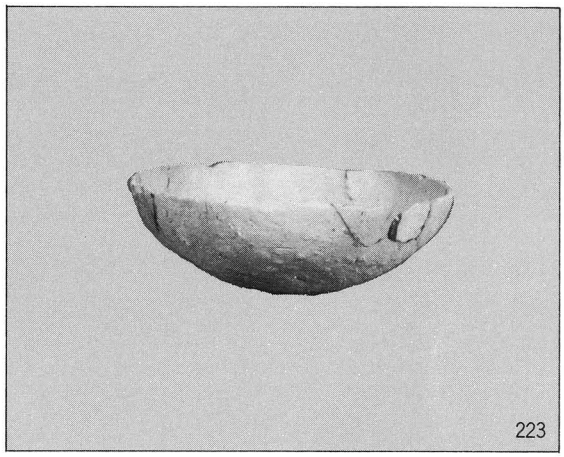

219

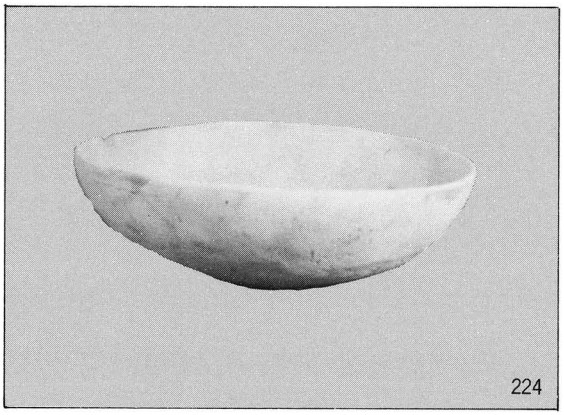

220

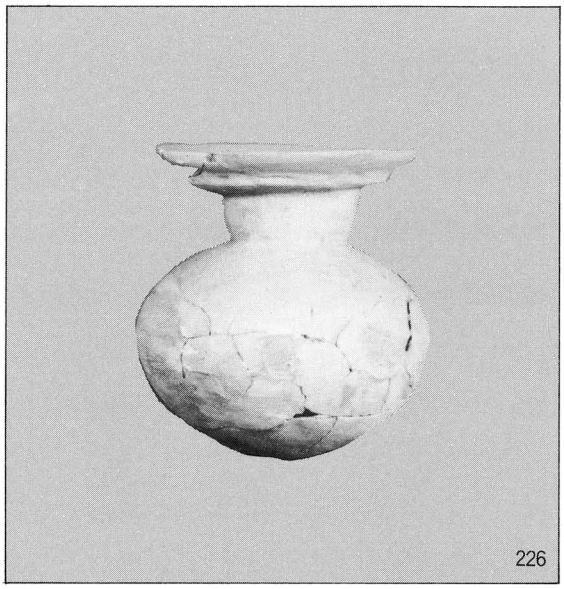

221

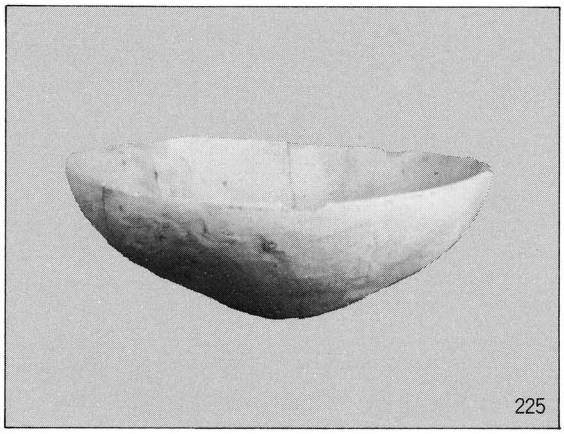
図版四十六　津田第Ⅰ地区出土の土器

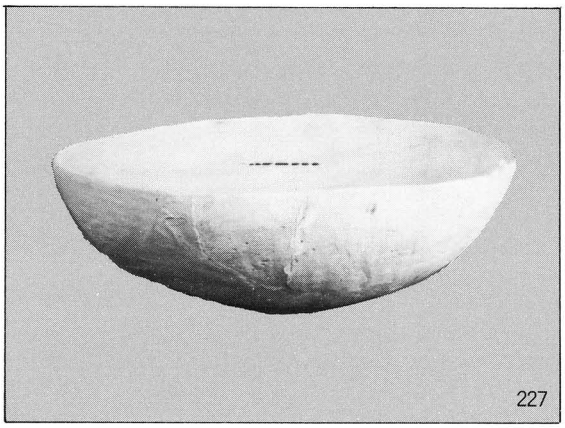

222

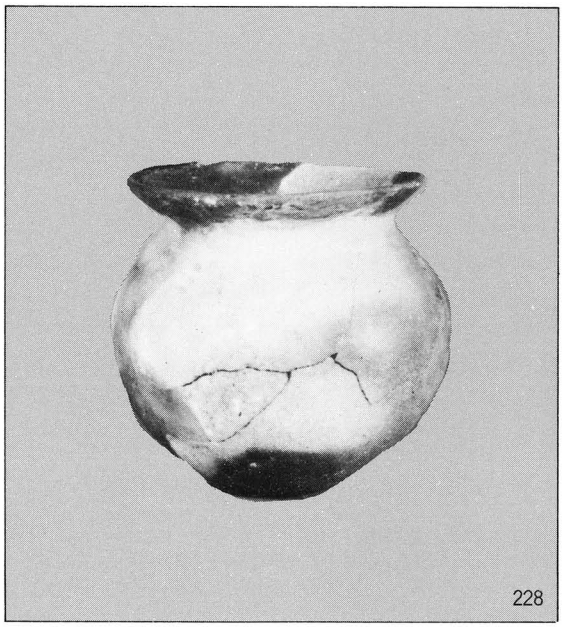

223


224

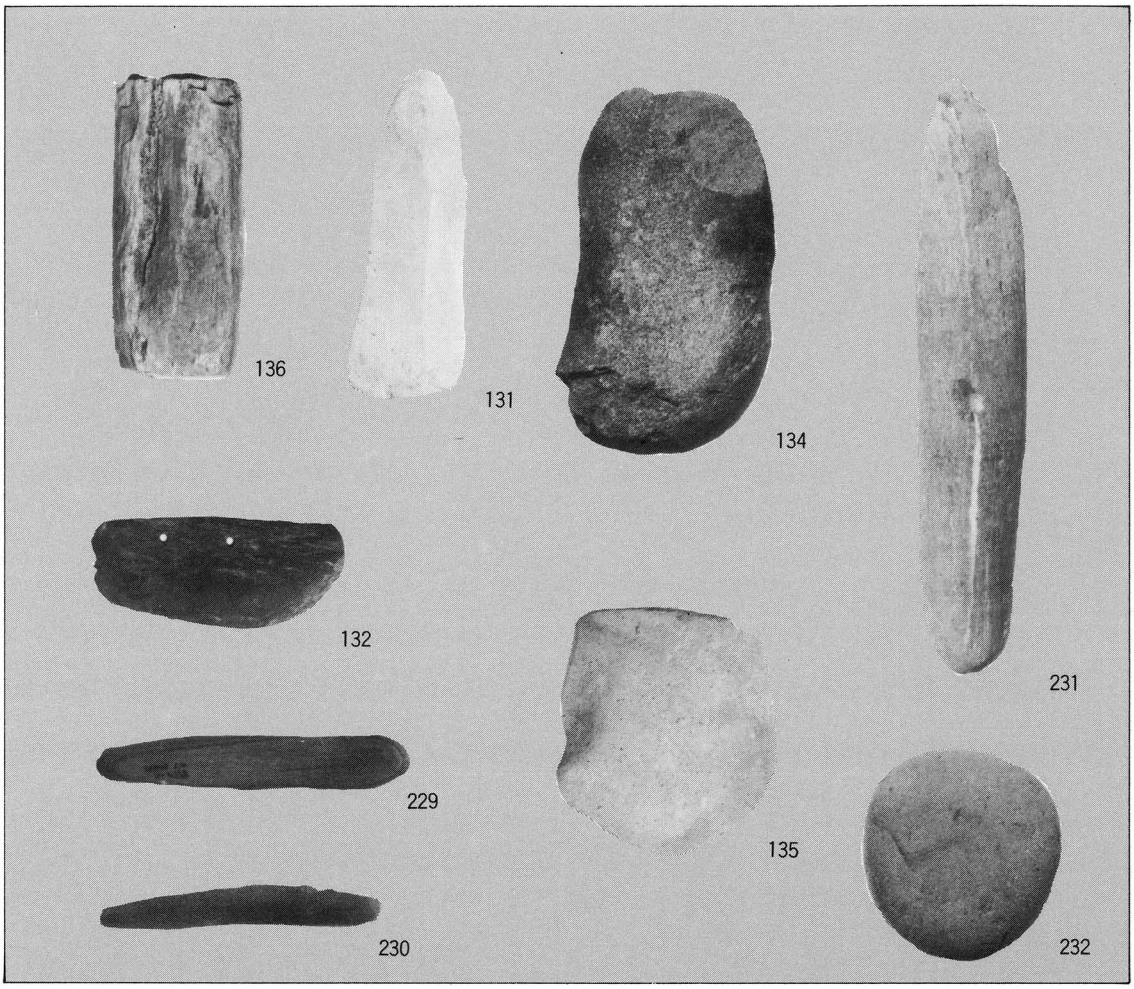

226

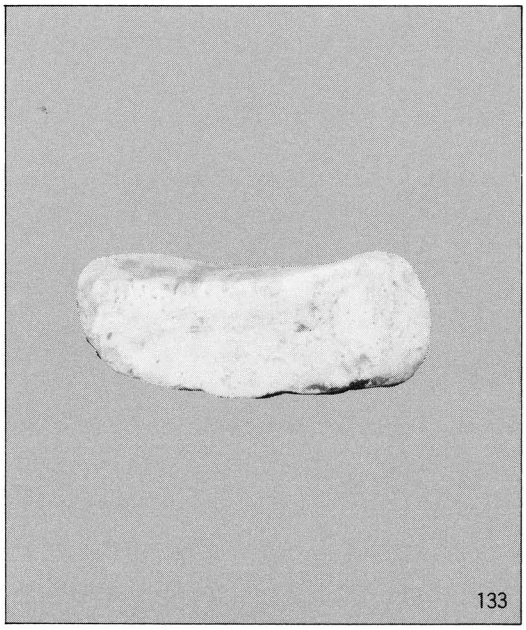

225

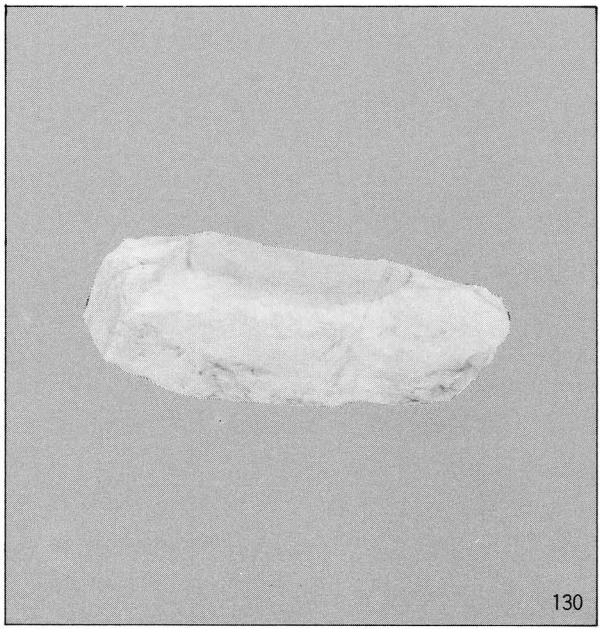

227


228

図版四十七　津田第Ⅰ地区出土の石器類

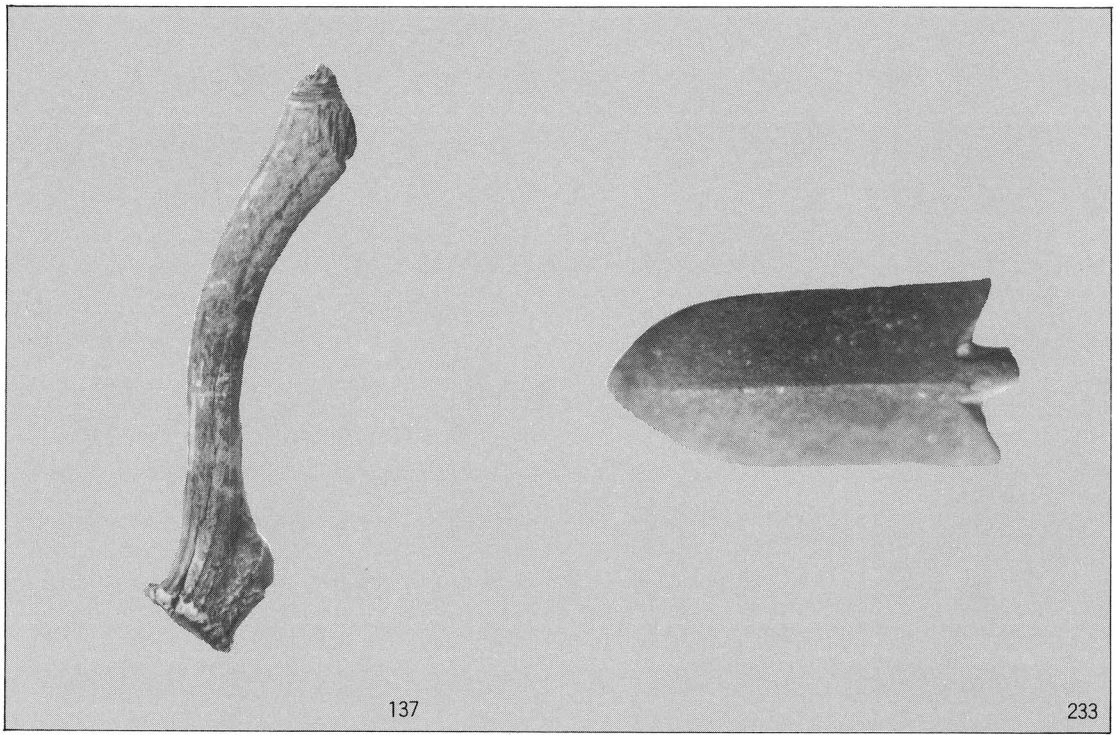


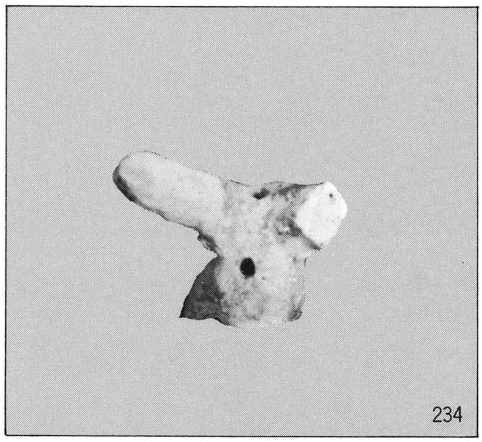


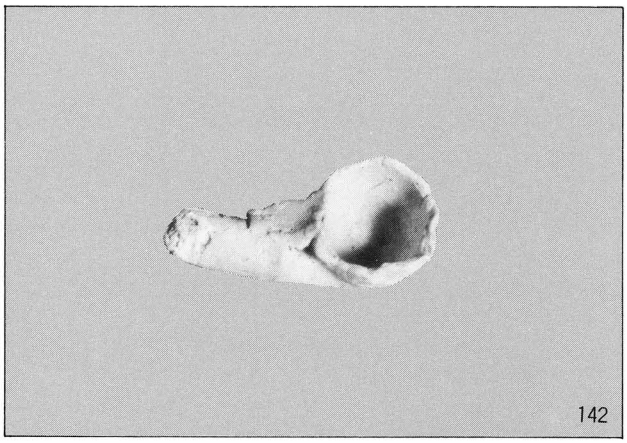


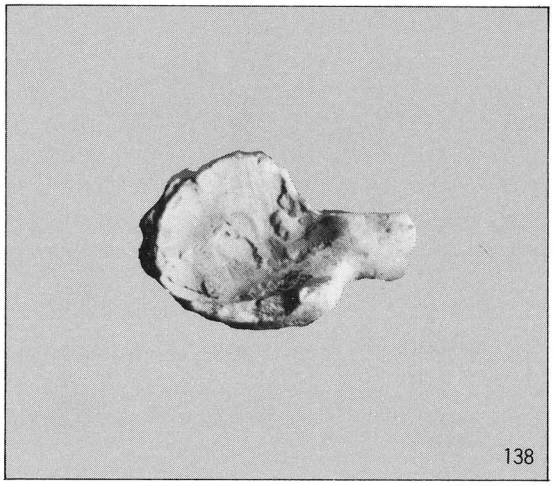
ＳＢ－１　(131)

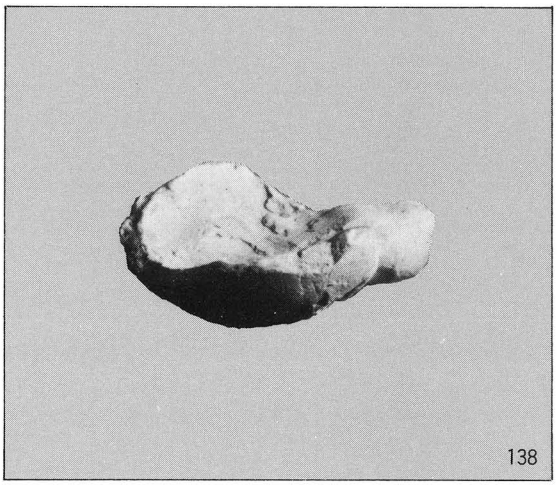
図版四十八　津田第Ⅰ地区出土のその他の遺物











ＳＢ－３（137）、ＳＢ－２（232）

松山市文化財報告書

1	三島神社古墳	昭和47年	(絶版)
2	天山・桜谷古墳	昭和48年	(〃)
3	長隆寺跡	昭和49年	(〃)
4	古照遺跡	〃	(〃)
5	釜ノ口遺跡	〃	(〃)
6	かいなご・松ケ谷古墳	昭和50年	
7	国道バイパス概報	〃	(絶版)
8	岩子山古墳	〃	
9	御産所11号墳・忽那山古墳・久万ノ台古墳	昭和51年	(絶版)
10	古照遺跡II	〃	(〃)
11	文京遺跡	〃	(〃)
12	来住廃寺跡（国指定史跡）	昭和54年	
13	五郎兵衛谷古墳	〃	
14	浮穴・西石井荒神堂・東本II、III・桑原高井遺跡	昭和56年	
15	東山鳶が森古墳群	〃	
16	斉院茶臼山古墳	昭和58年	
17	国道11号バイパス調査報告	昭和59年	

松山市文化財調査報告書　第18集

宮前川遺跡

昭和62年4月30日発行

編　集　松山市教育委員会

発　行　松山市教育委員会
〒790 松山市二番町4丁目7番地2
TEL (0899) 48－6520

印　刷　アマノ印刷有限会社